

NEWガンダムブレイカー ～イナズマ戦線～

WILLARD (現・九羽原らむだ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「力のみがガンプラの全て」

パーツをガンプラバトルによって奪い盗る事が許された、実力主義の場。

それを教訓に設立された関西ガンブレ学園に、ガンプラはおろかガンダムすら知らない少年「カナタ ヒカリ」は入学してしまった。

ヒカリは入学と同時に、初心者狩り……通称パーツ狩りと呼ばれる行為に遭ってしまい、完膚なきまでに叩き潰されてしまう。

卑劣な行為にガンダムを嫌いになりそうになるヒカリ。

だがそんな彼の為に、見目麗しい白髪の少女が立ち上がった……。

ヒカリは幼女「アマナ ツキヨ」と仲間たちを交え、力のみがガンプラバトルを支配する学園の在り方を変える為、力を合わせてゆく。

※この作品はNEWガンダムブレイカーのストーリーの二次創作となっております。オリジナルキャラのみの完全オリジナルストーリーです。

この作品は“オファニム”さんとの合同作品です。

原文・キャラ設定を自分、監修・機体設定をオファニムさんでお送りしています。

上記の通り、打ち合わせ等で少し投稿が遅れる可能性があります

目次

01話「学園とガン普拉（前編）」	1
01話「学園とガン普拉（後編）」	13
02話「出会いはサンダーボルト」	28
03話「始まりのビルド」	36
04話「運命的なセッション」	46
05話「執念のスクランブル（前編）」	57
05話「執念のスクランブル（後編）」	66
06話「そこは地獄のスクールライフ」	74
07話「頑張り屋たちのセーフポイント（前編）」	80
07話「頑張り屋たちのセーフポイント（後編）」	89
08話「少女のドリーム」	104
09話「今後のプラン」	118
10話「ハイ・テンションな新入生」	126
11話「新しいバトルスペース」	138
12話「戦慄のキラーマシン（前編）」	146
13話「戦慄のキラーマシン（後編）」	155
14話「アイドルはお転婆姉ちゃん」	169
15話「熱狂的ファンサービス」	182

01話 「学園とガンプラ（前編）」

ガンプラは、もはや動く時代。

ある研究の副産物として生まれた技術。それは、特定の素材を動かすという発見だった。

特定の素材を使用し動かせるものとは、ガンプラ。

この技術は、当時の一部のファンから、熱狂的なまでの支持を受けた。

そしてファンとの協力を経て確立した娯楽が、世に生まれ落ちた。

その名も、ガンプラバトル。

幾年もの月日をかけて、ガンプラバトルは徐々に徐々に世間に浸透していった。

元々ガンプラを作っていたファン、一部のコアなファン、浅いファン、ガンダムを知らぬ若い世代、一般世間。

——そして、最終的に世界へと浸透した。

爆発的人気を誇ると言っても良いほどブレイクした娯楽は、同時に新たな需要を生み出した。

それは、職業。モデラーやガンプラビルダーと呼ばれる職人が、より欲される世の中へとなったのだった。

そういった事情から、世界各地に学校が設立された。

この学校も、そのうちのひとつ。

ガンブレ学園関西校。

ここはガンプラビルダーを目指すタマゴたちを育成する教育機関。

もちろん、機動戦士ガンダムシリーズをこよなく愛する者、ガンプラという存在に興味を示す者も多数入学している。

今日はその入学式。

数千を超える生徒たちが集っている今日。

「ふあ〜……」

今、ここであくびをしている少年もその一人。

未来あるガンプラビルダーたちが集結していた。

.....

入学式終了後、ひとまずのトイレ休憩がやってくる。

入学式自体は終わったようだが、この後にガンブレ学園ならではのイベントが始まるらしい。その準備なども含めての休憩時間のようなのだ。

「ふう……」

大きなあくびをしたおかげで目がトロンとしている少年が一人。

この少年の名前は「カナタ ヒカリ」。

見ての通り普段から少し気が抜けている。放っておけば上の空でどこか彼方を見つめているような少年である。苗字のように。

「おい、ヒカリ〜！」

そんな少年を呼ぶ少し大柄な男。

少年と同じく、ガンブレ学園の制服に腕を通している。

この大柄な男の名前は「サクマ ショウタ」。

この学園の2年であり、ヒカリの古くからの腐れ縁である。

「あつ、久しぶりショウタ」

「おいおい。俺、今はこの学園の先輩なんだぜ？ 名前じゃなくて先輩ってよんだらどうだ？」

ショウタは自他ともに認めるガンダムオタクであり、歴代のTVアニメシリーズは勿論、劇場作品にOVAにネット配信放送はすべて閲覧……そして、東京のお台場イベントにも毎回顔を出している根っからのガンダムファンである。

ガンプラもたくさんの数に手を出しており、彼の実家には、ガンプラ専用倉庫が用意されているくらいである。父親もガンダムが大好きということも影響しているのだろうか。

あと、ジムが大好きと言っていた気がする。

「俺とお前の仲じゃん。名前でもいいかなって」

「あつはっは。相変わらずだな、お前」

この少し冷めたような、というか面倒気なところはヒカリの性格で

ある。

ギャグに返してのツツコミも少しばかりテンションが低かったり、周りのノリにはなあなあで流したりなど、結構流されているタイプだ。

「しかし、驚いたぜ。お前がガンブレ学園に来るなんてさ」

何を唐突に？

シヨウタは疑問を浮かべて彼に聞く。

「家も近いし、友達がいるところのほうが好きだろうし……それに、将来とかもよく考えてるわけじゃないから、ここでいいかなって」

「おいおい」

随分と適当な理由だったことにシヨウタは驚く。

気持ちにはわかるが、将来設計をそんな適当に考えていいのかと心配になってしまいそうだ。

……まあ、そこは個人の自由だ。

本当に危なくなったら再度注意するくらいでいいだろう、と思った。

「それにしても……ガンブレ学園に入るってことはそういうことだよなあ」

ヒカリを見ながら、何か物思いにふけっている。

「お前がついにガンダムデビューか……ってことは、何かガンダム作品を見てきたってことだよなあ！　なあ、何を見たんだよ？」

やっぱり王道で宇宙世紀か。それとも比較的見やすい平成世代のSEEDや00か。

それとも少し変化球でOVA作品などから入ったのか？

ワクワクしながらシヨウタは質問する。

……ガンブレ学園に入学する生徒に対してする質問にしては少しばかり愚問のような気がするだろう。しかし、この質問をするには少しばかり理由があるのだ。

「見てないよ？」

ヒカリは即答する。

「え？」

「ガンダム作品は……まだ一つも見えてないけど」

そう、あんな質問をした理由。

そして、この学園に入学すると聞いて驚いた理由。

彼のこの質問の回答が答えである。

「おいちよつと待て！ 嘘だろ!? ってことは、ガンプラのことも……」

「はい、お静かに！」

どうやらトイレ休憩の時間は終了のようだ。

“あとでな”と一言だけサインを残してシヨウタも移動する。彼

は2年であるため、シヨウタがいる場所とはかなり離れた場所なのだ

から、急いでダツシユしている。

「……？」

そんなシヨウタを眺めているときの事だった。

一人の少女が目に入る。

猫耳フードのブカブカなパーカーを羽織っている。

……猫耳？ ずいぶんと個性的な格好だ。背丈に合っていないサイズのパーカーが何とも言えない味を出している。

それに、小さい。

明らかに高校生というには身長が小さい。

その見た目はどちらかと言えば、小学生後半を思わせるような気もする。

(あれも先輩なのかな?)

どうみても後輩だし、高校生のまねごとをして紛れ込んでいるようにして見えない。

……が、職員が誰一人注意しないということは、この学園の生徒であることは間違いないのだろう。

人間見かけによらずとはよくいう。

深く追求することはせずに、ステージに立った職員のほうを見る。

「入学した皆さんに特別イベント……」
ステージに用意された巨大なスクリーン。
そのスクリーンに映し出された大きな文字。

「ガン普拉バトルを実際に体験していただきます！」
なんと、初日でガン普拉バトルを体験できるというイベントであつた。

初日から在学生や職員たちによる歓迎会のようなものである。みんなで楽しくガン普拉を作ること、そして作ったガン普拉で戦う事の楽しさを知ってもらうための一大イベントなのだ。

一斉に生徒たちの歓声が沸き上がる。

……ガンダムのは勿論、ガン普拉の事に関して一かじりもしたことがないヒカリは、そこまではしゃぐほどの楽しさがあるのだろうか
と首をかしげている。

まあ、それに関しては一度やってみればわかることである。

生徒たち羅列にのまれ、どんぶらこと隣のイベントフロアにまで移動していった。

……しかし、この歓迎会。

“地獄”が待っていることを、彼はまだ知らなかった。

……

イベントフロア。

ここには今回だけ特別に、ガン普拉バトルを行うためのバトルシステムが多数配置されている。

それだけじゃない。実際にガン普拉を作るという体験コーナーも当然用意されている。最近発売されたガン普拉から旧キットまで幅広く用意されているのである。

その規模の凄さ。学園が出来上がるまでの実績。

ガン普拉ビルダーという存在がどれほど世界に影響を与えたのかわかる。

しかし、このヒカリという少年。

「おいおい！ お前、まさか!? マジのマジなのか!？」

シヨウタは慌てふためくようにヒカリの肩を掴む。

「お前、ガンダムはおろか、ガンプラすら調べてないのか!？」
「うん」

即答で返事した。

そんな呑気に返事をしている場合かと言いたくなくなった。

ここはガンブレ学園。

ガンプラビルダーを育成するための学園機関だというのに、このヒカリという少年はガンダムについての知識を一切持っていないのである。

それもそのはずだ。

この少年は昔から、これといった趣味を持たずになあなあと過ごしてきたのだ。

小学校の頃も図書館で絵本を適当に読むか、木陰の下でお絵かきをしていたか。中学校の頃は必要最低限の勉強をして、周りに連れられ適当に付き合っているだけだった。

ゲームはおろか、アニメは音楽にもそれといった興味はない。見たことがないとまでは言わないが、ドハマリした作品がゼロという徹底ぶり。

そんな彼がガンブレ学園に入学すると聞いた時には趣味の一つでも見つけたのかと安堵したが、その安堵はあっという間に崩れ去ってしまった。

「まずいって！ さすがにガンプラのことを何もわかっていないのは……」

「お前が楽しいって言ってたから」

学園生活はそれなりに楽しんでる。

その一言だけで彼はここへの入学を決めてしまったのである。

「ああー……まあ、仕方ねえか」

ヒカリの無趣味な一面は昔からだ。

だったら、やることはひとつだ。

「よっしゃ、俺がガンプラを作ることと動かすことの楽しさを一から教えてやるよ！ そうだな、ひとまずは……」

彼が手に取ったのは見本のガンプラ。

ここから全てが始まったの代名詞。

ファーストガンダム。

すべてのガンダムの始まりとなったモビルスーツ。

「これがガンプラだ」

まずはガンプラを触ってどういうものなのかを体験させる。

意外と動く。

プラモデルと聞いたから窮屈そうなイメージがあったが、案外関節を無理に曲げて変なポーズを取らせても何の支障もないことに驚いた。

何より、出来に驚く。

所詮は玩具だろうと思っていたが侮れない。ポーズを取らせてみると、テレビから飛び出して来たような立体感が込みあがってくる。

「それじゃあ今からガンプラを作り……って、うっ」

するとシヨウタは突然腹を抑え始める。

「すまんヒカリ……ちよつとトイレに行ってくる」

「トイレ休憩になんていかなかったのさ」

「いや、お前に挨拶くらいはと」

どうやら自分に気を遣って我慢していたようだ。とはいえ、その我慢の限界が思ったよりも早くやってきてしまったようであるが。

「すぐ戻るからここで待っていてくれ！」

シヨウタは即座にその場から立ち去った。

今日はいいつの全力疾走を何度も見ているような気がする。このガンダムという機体もあんな風に走ったりするのかなとちよつと想像してみたりする。

ガンプラを作る、か。

これほどのクオリティのものが出来上がると考えると、確かにワクワクするかもしれない。

「おい」

少し作ってみようかな。

彼が帰ってきた後にいろいろなことを聞いてみようと思胸が高鳴っていた。

「おいって言ってるだろ」

ここで呼ばれていることに気が付いた。

……在学生だろうか？

少しガラの悪い男子学生たちがこちらを見下ろしている。

「お前、新入生か？」

「そうですけど」

そういう質問をするということは在学生なのは間違いない。

少し身構えながらもしつかりと挨拶はする。

挨拶とは大事なものであり、どれだけ気が抜けてても、ヒカリは挨拶だけはしつかり徹底していた。

「そのガンプラ、お前が作ったのか？」

「いや、これは」

「ちようどいいー！」

男子学生の1人がバトルシステムを指さした。

「どうだ？ ガンプラデビューに一戦やってみないか？」

デビュー……

戦わせることもガンプラビルダーの一貫。そこにも面白さがあるとシヨウタは日々自慢げに語っていたような気がする。

丁度いい機会だと思う。

少しばかりシステムに触れてみるのもいいかもしれない。

「こころよ」

やり方は隣にいるガイドさんに聞く。

ガイドさんの指示を受けながら、ガンプラを配置し、自分も操縦の

準備に入っていた。

「おいおい、あれ……」

その時、後ろのほうから不吉な声が聞こえる。

「また、やってるよ……」

「おい、止めたほうがいいんじゃないか?」

「やめとけ、俺らも狙われるぞ」

知らぬふりしてどこかへと消えていく。

「?」

何の心配をしていたのだろうか?

初心者が戦うことに不安を覚えているのだろうか。

「おおっ!?!」

驚いた。

目の前の風景が……変わっていく。

これは、コックピット……というやつなのか?

まるで、その中に放り込まれたような気分である。

パイロットの気分を味わえる。

遊園地のアトラクションとは全く違う風景にテンションが上がる。

男の子というのはロボットのコックピットには一度は憧れを持つものである。

この後にどんなワクワクが待っているのだろうか。

期待を膨らませ、ヒカリは目の前を見た。

「……っ!?!」

しかし、目の前を向くとそこに広がったのは。

さつきまで綺麗だったのに……粉々にされているガンダムのプラモ。

そして、そのガンプラのプラモを徹底的につぶそうとする男子学生のガンプラ達。

恐ろしいほどの重火器を背負ったドム、ゼロ距離で必要以上にヒートホークで殴り続けるザク。

「おらよっ！」

しまいには砕け散っていくガンダム之首根つこを掴み、引きちぎっていくブルーディスティニー1号機のプラモ……

何だ、これ——？

さつきまで綺麗だったプラモが粉々にされている？

「はっはっは！ やっぱたまんねえな！」

「この間はひどい目にあつたからな！ ここで憂さ晴らしさせてもらうぜ！」

憂さ晴らし？

何を言ってるんだ？

八つ当たりとでも言いたいのか？

「しかし、何の装備もされていないガンダムで戦場に出るなんて馬鹿だよなあ！」

「本当だぜ！ ガンプラビルダー向いてねえよ！」

「ガンプラが可哀そうだもんなあ!! ひやつはははは！」

ガンプラが可哀そう？

自分のせい？

「やめろ、テメエらっ!!」

そのバトルステージに突然、何者かが割り込んできた。

シヨウタだ。一方的なバトルを見て黙っていられなくなったようだ。

「歓迎会での暴動はご法度じゃねえのかよ！」

「暴動じゃねーよお？ 教えてやってるんじゃねえか」

男子学生は、ステージ上のボロボロのガンダムを雑に引っ掴み、振り上げ——

「力こそが正義！ 蹂躪こそが娯楽！ 悔しいか、悲しいか？ テ

メーのその泣きつ面がサイコーの楽しみってなあ!!」

そして、叩きつける。

バキヤツ

無情にも、ボロボロになったガンダムが砕け散った。
大笑いしながら、男子学生はその場から離れていく。

「ひでえ……」

「相変わらずだな、しかも歓迎会にまで手を出しやがるなんて」

「可哀そうだけど」

在学生たちは誰もそれを止めようとしな

い。ただ遠目で見つめ続けるだけだ。

「ヒカリ？」

呆然と粉々になったガンダムの前で立ち荒んだヒカリに声をかける。

——何が楽しいんだ？

せつかく作ったものを粉々にして、それを笑って……それを繰り返して。

壊すだけ。ただ作って壊すだけ。

それを繰り返し、楽しむだけ。

面白くない。

何も面白くない。

せつかく作っても、こんな風に壊されて……意味があると思えない。

この世界が、楽しいと思えない。

この学園……選んだのは間違いだったのだろうか。

普通の学園に通うことのほうが、まだ……

「可哀そう」

目の前で粉々になったガンダム。

それが一人の少女の手で一つずつ拾われる。

「……………」

その少女にヒカリは視線を向ける。

「大丈夫？」

見たことがある。

猫耳フードの少女。明らかに高校生には見えない小柄な少女が、バラバラになったガンダムを拾い上げ、こちらを見上げている。

目を奪われた。

彼女のその背に、純白の翼を幻視した。

（後編へ続く）

01話 「学園とガンプラ（後編）」

彼女は、粉々のガンダムを手に、夢げにたたずんでいる。

その姿に不思議なくらい、目を奪われ。

その背に、純白の翼を幻視してしまう。

ふいに、声を掛けられる。

「一緒に治そう？」

「え」

ヒカリは突然の誘いに声が裏返る。

「こっち」

少女はこちらの返事を聞くこともなく、ガンプラ作成の体験コーナーへと向かっていく。粉々になったガンダムのプラモを持ったまま。

「……待って」

ヒカリは少女を追いかけた。

彼女を追いかける理由。ガンダムを治すと決めた理由は二つある。

まず、このガンダムのプラモは借り物だ。体験コーナーのために誰かが作ったサンプルだ。徹底的に壊したのは自分ではないが、自分に一切の責任がないわけではない。

あそこでバトルを断れば、このガンプラはこんな目に合わなくて済んだのかもしれない。

自分には、このガンプラを治す義務があるのだ。

そして、もう一つ。

彼女を見ていると、なにか、はつきりとした言葉で言い表せないような、体の奥が熱を持ったような感覚を覚えたのだ。

ただただ、この何となく心地の良い熱に従っただけ。

理由というには、浅いのかも知れない。だが、確かに感じたのだ。ヒカリは、それを何とのかまだ知らない。

「おい、ヒカリ、待ってー！」

いつも通り、流れるようにどこかへ向かうヒカリのもとを、シヨウ

夕は追った。

.....

ガンプラビルド体験コーナー。

文字通り、ここで一から新しくプラモを作ったり、別のプラモと組み合わせてオリジナルのガンプラを作ってみたりなど行えるコーナーだ。

満席に近い状態だったが、運よく3人分の席が空いていた。

「治し方は分かる?」

「いや、全然」

当然だ。自分はガンプラのいろはの、いの文字も知らないのだ。

目の前に転がっているニッパにブラシ。スミ入れのペンだったり、ヤスリだったりなど、これをどう使えばいいかなんて見当もつかない。

「こうするの」

少女はガンダムの右腕を手にとると、慣れた手つきで治していく。

……ひとまずは真似をすればいいのだろうか?

パテ? ヤスリ? この道具をつかって、この少女を真似するように治せばいいのか?

見よう見まねで治していく。

「4時間くらい。そうすれば固まるわ」

結構な時間がかかるんだと驚いた。

そして、洗練された手つきで、次々とガンプラを元の姿に治していった。

あんなにボロボロだったガンダムが元の綺麗な姿へと戻っていく。といっても、パテが固まっていけないこともあり、完全な姿に戻るには結構な時間がかかるようだが。

そのこと含め、ガンプラを壊したことはしっかりと謝らなければ。

そこは覚悟しておこう。

「……」

それにしてもこの少女。

少しばかり感情の起伏が乏しい気がする。入学式の時もそうだったし、軽く会話した中でもそう感じた。何故なら、全くもって面白くなさそうな顔をしていたからだ。

しかし、どうやらガンプラを治しているときだけは違うようだ。

——太陽。見た目相応の、太陽のような明るい笑顔なのである。

ガンダムが元に戻っていく姿を見て、まるで子供のように目を輝かせている。

「ひとまずはこれで」

さつきまでボロボロだったのに。

格好良かった姿が見る影もないくらいに壊れていたのに。

治った。

まだ未完成のため形にざらつきがあるが、その姿は元の姿に近くなっていた。

「おお、すげえな」

あれだけひどい惨状だったガンプラがここまで綺麗になったことに、シヨウタは驚いている。経験者である彼から見ても、高いレベルの修理技術だった。

「ありがとう」

ヒカリはお礼を言う。

こんな見ず知らずの自分のために修理するのを手伝ってくれたのだ。心からの感謝をつたえる。

当然のことだが、挨拶も、お礼もしっかりと返す。彼の中で徹底している礼儀であった。

「……辛かった？」

少女は首を傾げ聞いてくる。

「怖かった？」

これはきつとさつスキの試合の事だろうか。

怖くはなかった。むしろ、何が起きたのか理解するのに時間がかか

るレベルだった。

……でも、ガンダムのプラモを平気でスクラップにするその姿は見ていて胸糞悪かった。まるで不良品を壊すかのような姿を見ていてムカつとはした。

悪意しか見えない破壊。

辛いわけがない。心にひどい傷を負った。

「俺は」

「ならないで」

少女はヒカリの腕を握る。

「ガンプラの事、嫌いにならないで?」

……まただ。

また、体が熱くなった気がする。

無垢で、純粋なその笑顔。そして、その声がスウツと芯に響き、どうしてか顔の表面にまで熱を伝えてしまう。

いったい何だ、この気持ちは?

ヒカリは少女の言葉で体が固まってしまった。

そしてそれ故に、忍び寄る魔の手に気づかない。

「おっ!・ 治ってんじゃん!」

見た目がよくなったガンプラが、突然目の前から姿を消す。

「また俺たちと戦ってくれるために修理したのかよ! 嬉しいねえ!」

まただ。さっきの男子学生たちだ。

どうやら、徹底的に潰したいようだ。このガンダムを。

「返せ」

ヒカリは手を伸ばす。

「おっと」

男子学生はその手を掴み返し、ガンプラには手を届かせない。

「返してほしかったら俺たちと戦いな?」

——俺たちのサンドバックになりやがれ。

彼らが口にしたのは、つまりはそういうことだ。

その挑発に、シヨウタは食って掛かる。

「テメエラ、いい加減に……！」

「……どうして、壊すんだ？」

疑問を浮かべずにはいられなかった。

そこまでプラモを破壊することに執着する理由はなんだ？

「ちげえよ、ただ壊すんじゃねえ」

男子学生は口にする。

「俺たちの力を証明するためにぶっ壊すのさ！ 身の程を分からせてやるためにな！」

こいつらは何を言っている。

自分の身の程を？ 力を証明する？

まるで、ガンプラが『力を証明する道具』のように。

「いい加減にしやがれ、ガンプラは自分の力を示す道具なんかじゃ」

「お前はあの校訓が目に入らねえのかよ！」

男子学生は学園の教訓の掛け軸を指さす。

『力こそ、証明』

ただその一言。

大きくその文字が描かれている。

「力こそがこの学園のすべてなんだよ！ 間違ったことは一言も言っていないだろーが！」

「ぐっ……」

力こそ証明？

それが学園のすべて……やはり、壊すことだけが目的だということのか？

ガンプラビルダー。作る人たちを育成するための機関だということに？

おかしい。皆の夢を壊すようなことをするなんて……おかしい。

「返して」

少女は立ち上がり手を伸ばす。

「その子を返して」

「ああ？」

男子学生は少女に近づく。

「じゃあ、テメエも相手してくれるのかよ?!」

飛び出す。

男子学生の腕が少女に向かって。

「……ッ!!」

我慢の限界だった。

ヒカリは思わず手を伸ばしていた。

少女に迫ろうとしていた悪意を自身の腕で払ってしまった。

無意識だった。気が付いたら体が勝手に男子学生の腕を力強くはたいてしまったのだ。

おかげで男子学生の腕は少女には届いていない。

「テメエッ！」

すると、今度はその腕がヒカリへと飛んでくる。

「いいから早く相手しやがれ！」

無理やりバトルシステムへと連れてこられる。

彼の体を無理やり断頭台へと括りつけようとしていたのだ。

「待って」

少女が彼らのもとへ。

「……私もその人と戦う。だから、勝ったらガンプラを返して」

「おい、お前ガンプラは持つてるのかよ？」

「……一つだけある」

逃げればいい。

自分の事なんて気にしなくていいのに。

何故、掃った火の粉にまた身を投げ出す真似をしているんだ。

「おい、さすがに経験者が未経験者相手に集団リンチはまずいだろう。俺がこいつのアドバイスに回る。文句はねえな？」

「チツ、好きにしろ」

男子学生たちはバトルシステムの対面へと移動する。

ついさつき、ガンダムのプラモをスクラップにした悪魔の姿が一斉にバトルステージへと現れていく。

蘇る。

さつきの悪夢が鮮明によみがえる。

「大丈夫」

少女は隣のコックピットで口を開く。

「私が、守る」

少女はガンプラをバトルステージへ。

「あれは……」

そこへ現れたのは。

自分が使っているガンダムと似たような機体。姿形がすごくそっくりなガンプラが、自身のガンダムのプラモの隣に現れたのである。

「ガンダム？」

「ああ、だがあれは、0ガンダム「オーガンダム」だな。似てはいるが、ガンダムとは違う機体だ」

0ガンダム。

機動戦士ガンダム00に登場する、初の太陽炉搭載型MSであり、主人公の刹那・F・セイエイの物語がはじまるきっかけとなるMSである。

ほとんど灰色に近いカラーリング。

あれはファーストシーズンに登場したときのカラーリングだ。

……背中から緑色の粒子が粉雪のように吹いている。

あれも、0ガンダムならではのものなのだろうか？ 自分の使っているガンダムにはあのような粒子は背中から出ていない。

疑問に思いながら0ガンダムを見つめている。

「私の後ろを離れないで。攻撃をずっとよけるだけでいい……その姿じゃ、まともに戦えない」

当然だ。まだパテが完全に固まっている。

動かすだけでも無謀な状態だ。無理がある。

「動かし方は教える。お前は攻撃をよけることに専念しろ」

後ろからヒカリの手を握り、自分が動かしているかのようにレクチャーしていく。

こうしたほうが一番覚えやすい。

少々、男に手を握られるということに男子としては気持ち悪さがあるが贅沢は言つてられない。ここは素直に従おう。

「オラオラオラッ！」

攻撃が飛んでくる。

よけなくては……避けなければ、まだ粉々にされてしまう。

一発のバズーカがこちらめがけて飛んできた。

「させない」

0ガンダムが自身の前に飛んできた。

「あつ……」

0ガンダムにバズーカが直撃する。

ガンダムシールド。

0ガンダムのシールドから小さく展開された緑色のバリアフィールド、GNフィールドが自身とガンダムの身を守る。

「っ！」

0ガンダムが一人戦場へと駆け出していく。

「野郎!!」

男子学生たちも3人一斉に0ガンダムに向けて突進を仕掛けてき

た。

3人相手に一人で挑むのは無謀だ。

だが自分が動いても足手まといになるだけ……何もできない歯がゆさが苦しい。

「はっ」

ところが、目の前に広がるのは想像と違った風景。

圧倒している。

3人相手だろうと敵のガンプラを圧倒しているのだ。

向こうの男子学生たちも予想外の強さに驚きを隠せないようだ。あわてふためくように周りに罵詈雑言をぶつけては、仲間割れを始めている。

0ガンダムは3体のモビルスーツの攻撃をよけて反撃を入れてを繰り返す。

0ガンダムにはビームサーベルとビームガン以外の装備はない。たった2つの装備しかないのに……重火器を詰め込んでいる敵を次々と撃墜している。

「すげえ」

シヨウタも思わず声を上げる。

「……!!」

その姿。

0ガンダムが戦うその姿。

戦場に飛び交うGN粒子。

戦場を舞うように戦う0ガンダムの姿。

見惚れる。

少年はその視線を釘付けにされる。

「これで最後」

最後の一体も仕留めてみせる。

倒してしまった。

最後の1人もいとも簡単に。

「んなバカな……1体のガンブラで俺たち3体が全滅だと……!？」

男たちは唸りを上げていた。

「すげえよ！ お前、こんなに強かったのか！」

「……」

シヨウタの声に彼女からの返事はない。

「っ！」

異変に気付く。

「うろう……」

頭を押さえ、少女がその場でしやがみ込む。

「おい、大丈夫か!？」

シヨウタはヒカリの手を離し少女のもとへ向かう。

すごく苦しそうだ。頭が割れるように痛いのかずっと腕で抑えている。

「帰れるか……」

男子学生の1人がレバーに手を伸ばす。

「このまま帰れるかあッ！」

浅かった。

一体のガンブラはまだ動ける状態だったのだ。

ヒートホークを片手にザクが動けなくなった0ガンダムへと迫る。

「……ッ！」

その一瞬の出来事。

彼はその一瞬、自分でも何が起こったのか覚えていなかったという。

ただ、自分が思ったことは二つ。

——あの子を助けないと。

——あいつを倒すための武器は？

ビームサーベル。

0ガンダムがその武器を持っていたことを思い出し、彼は即座にビームサーベルをガンダムの手に取らせた。

そこからどう動かせばいいのか。

やり方は分からない。ただ、一心不乱だった。

完全なるファイリング。

かなり不規則ながらも相手に向かって走っていくガンダム。

「墜ちろオツ!!」

突き入れる。

ビームサーベルを、ザクの腹に突き入れた。

倒した。

撃墜した。未経験であるはずの自分が……ザクを撃墜した。

「俺が……倒したのか？」

自分の腕を見つめる。

自分が……倒したのか？

実感がわかない。

「覚えてやがれ！」

ただ立ち去っていく男たちを見つめることしか出来ない。

挑発も文句も何一つ許さない。そんな一瞬の出来事。

「……あつー！」

ヒカリはようやく目を覚まし、少女とシヨウタのもとへ向かう。

「大丈夫なのか？」

「平気、大丈夫」

痛みは引いたようだ。

少女は静かに立ち上がる。

……自分のガンプラを見つめている。

そこでようやく気付く。

無理に動かしたせいで、またガンダムの姿が滅茶苦茶になっていた。

0ガンダムも圧倒こそしていたが攻撃を一つも受けていなかったわけじゃない。攻撃を3人がかりで食らえば当然ボロボロになる。

動かすには可動域も死んでるし、メインカメラも吹っ飛んでしまっている。

やはり負担が大きかったのだ。

「……可哀そう、か」

少女の言葉を思い出したヒカリが口を開く。

「確かに……こいつら、こうなるために作られたわけじゃないのに」
「！」

少女はヒカリの顔を見る。

少女の顔には、驚きがあった。次いで、それとはまた違う表情を浮かべる。

まるで、救いを見たかのような表情だった。

「とりあえず、保健室に行くか？」

「そうだね」

少女を放っておけるわけにはいかない。

一同は体験イベントを後にして、学園の保健室へとガイドの案内を

受けながら移動した。

.....

入学式も終わり、学園イベントも終了。
夕方になり解散の時間となった。

「おつかれさん」

初ガン普拉バトルにひとまずはこの一言だ。

今日一日でいろいろなことがありすぎた。お疲れの言葉をかけた
くもなる。

「……」

ヒカリは空を見上げて立ち止まっている。

「やっぱり、嫌になったか？ この学園」

彼は何かを知っているようだった。

……この学園には自分が想像もできないような闇が潜んでいる。

力、破壊、蹂躞。見る者すべてを恐怖に落としてる暗黒がこの学園
には潜んでいる。

あれだけの悪夢を目の当たりにしたのだ。

ガン普拉ビルダーとしての道に嫌気がさしてしまうのも無理はな
い。

彼はそう思っていた。

「……あの女の子、辛そうな表情をしていた」

自分の事を助けてくれた少女の事を思い出す。

その無表情を見れば、この学園生活を楽しんでいないのがまるわか
り。

この学園には自分が想像できないような闇が潜んでいることも分
かってしまう。

「でも、ガン普拉を作ってるとき」

同時に忘れはしない。

「ガンプラを動かしているとき……」
そんな表情なんて忘れなくなるような。

「すごく、楽しそうだった」

あの楽しく躍動している表情を。

自分のガンプラを楽しんでいる姿を。

「……作ってみたい」

ヒカリはシヨウタの目を見る。

「俺も作ってみたい……自分だけのガンプラ……！」

目がキラキラしている。

恐怖どころか、その目は希望に満ちている。

「へっ！ そうこなくっちゃな！」

あのヒカリが。

何事にも無関心だったヒカリが。

初めて興味を示した。

その姿にシヨウタは嬉しさを隠せなかった。

「よっしゃ！ じゃあ、明日は休みだからガンプラショップにでも
行ってみるか!？」

学園生活は2日後からであり、その間の休日は準備期間。

その準備期間にガンプラでも見に行こうとの誘いだった。

「行くぜ〜！ 俺たちのガンプラビルダーへの道は始まったばかりだ

ぜ〜！ オー!!」

「お、おー……」

夕日に向かって2人は歩いていく。

カナタ ヒカリ。
学園に渦巻く闇。その闇と戦うビルダー。

これは、一人の少年が起こした奇跡の戦いの物語である。

02話 「出会いはサンダーボルト」

一波乱も二波乱もあった入学式のガンプラビルダー体験イベント会。

最初こそは、ただ作って壊すことを愉悅に感じるの行為に、何が楽しいのだと絶望を抱くだけであった。こんな世界に安易に足を踏み入れた自分への、浅はかな精神を呪うばかりだった。

少しだけ人生の選び方を大事にするべきかと思っただ瞬間でもあった。

でも、自分はこの学園を選んだこと……それは間違いではなかったかもしれないと思い始めた。

後悔が、ワクワクへと変わったのだ。

少女の作った0ガンダム。そして動く0ガンダムの姿。

綺麗だった。恰好よかった。

自分も作ってみたい。

あんなに綺麗で格好良くて……誰にも負けないようなガンプラを。

「んじゃ、行くか」

その願いを込めて、今日は外出。

腐れ縁である男友達のシヨウタと共にガンプラショップへと向かった。

.....

関西でも大規模なショッピングモールがこの学園の近くに存在している。

ガンプラビルダーが有名となったこのご時世、このショッピングモールに存在するガンプラショップは……お台場のガンダムエキスポに引けを取らないほどの大規模ショップと化していた。

なんと、ひとつの階の5分の3を占拠するほどの広さ。学園で体験

したバトルシステムやビルドコーナーも当然完備。ありとあらゆるキットがこのショッピングモールのガンプラショッピングだけでも揃えられるようになっていた。

「うおおお……」

ショップに足を踏み入れただけでも驚いた。

ヒカリは、ガンダムの知識を何一つ知らないわけじゃない。ガンダムとかザクとかある程度の情報は頭に入っている……主人公がアムロ・レイとかそのライバルがシャア・アズナブルとかそれくらいのこととは知っているのだ。

だが、その後の続編の事も、それ以外のガンダムの事も知らない。

だから驚いたのだ。

こんな山のようにガンプラが存在することに。

いや、数十年以上も続くコンテンツなのだから当然と言えば当然なのはわかる。でも、それを総計するとここまでの規模になるのかと驚きを露わにするばかりだ。

「え、ガンダムだけでもこれだけあるの……?」

歴代シリーズのガンダム。それ以外にも量産型のガンダムなど、ガンダムというモビルスーツだけでもこれだけの種類があることに驚いている。

極地型? 陸戦型? 何の違いが?

ブルーデイスティニー3号機? ZII? FAZZ? デルタカイ?

ディープストライカーという機体に関しては何だこれ。最早ガンダムじゃないじゃん。動く要塞か何かじゃん、これ。

「ザクウオーリア……ガンダムSEED……初代とSEEDってつながってる?」

「いや、つながってないな」

ザクは初代とかその関係だけかと思いきや、S E E Dの世界線にも存在しているザクの姿を見て、今世紀最大の困惑を浮かべている。

ザクだけでもかなりの種類がある。

ネタかどうかは知らないが、お勧めで張り出されている、この足が作画崩壊並みにスリムなザクは一体何なんだ？ これも別機体なのか？

分からない。

やはり、少しくらいはガンダムの事を調べてから来るべきだった。

といっても、調べたところでどこから調べたらいいか分からない。

何せ、ガンダムというコンテンツはあまりにも広すぎるから。

「まあ、ゆっくり探してみるといいさ。お前が気に入ったガンプラを」

……ぼちぼち探して見るとしよう。

自分が気に入るようなガンプラを。

「ちなみにオススメなんだけどよ！ このジムとかどうよ!？」

すると彼はジムのガンプラを持ってきた。

そう、彼はガンダムシリーズの中でもかなりのジムファンなのである。

彼の部屋には数百体以上のジムのガンプラがHG MGに1/100問わずに綺麗に並べられていたのは覚えている。そのモビルスーツがジムだというのを1時間ほど毎回レクチャーされて、最初のジムだけは頭に焼き付いている。

「なんなら、このジムIIとかも」

「え、これさつき見た」

「はっ」

彼の中で変なスイッチが入る。

「ジムとジムIIは全く違うだろうがよ！ ほら、よく見ろ！」
そういわれてもわかるわけがない。

テーブルに並べられた大量のリングを見て、どれがどの産地のリングですかと質問されているような感覚だ。ヒカリにはどのジムも一緒に映っているのだから。

ガンダム知識ゼロなんだから仕方ない。

ヒカリは内心、ジム・スナイパーもジム・スナイパーⅡも一緒じゃねえかと思っていた。

「探してくる」

これ以上ジム談議に付き合っていたら自分の機体がジムにされそうだ。

いや、別段ジムが嫌いなわけじゃないが、やっぱりいろんな機体を見てから決めたい。

ヒカリは無数のガンプラの中へ。

.....

一列の棚を見終わった。

彼が最初に見たのは宇宙世紀のモビルスーツだったのだが。

多すぎる。

敵の機体、味方の機体。あまりにも多すぎる。

第一、ザクとガンダムは分かるが……ゼータとつく機体はかなり多い。それ以外にもゼータに似た機体が多かったりで混乱が止まらない。

分からない。全然分からない。

ギラ・ドーガってなんだ。ギラ・ズールってなんだ。

両方ともギラってついてるけど兄弟機か何かなのかな。

混乱を極めながら次の列に向かっていく。

「ん」

その途中、ヒカリは足を止めた。

……それは、どのショップにも一つは存在するであろうディスプレイである。

ここにはたくさん数のガンプラがディスプレイされているのである。

彼の目に映ったのは……MG1/100 フルアーマーガンダム &サイコザク ラストセッションのディスプレイであった。

ディスプレイで再現されているのはサンダーボルトの最後のシーン。

すべてのアーマーをパージしたフルアーマーガンダムが、身動きの取れなくなったサイコザクに最後の一太刀を入れようとするあのシーンである。

再現を徹底してるのか、たまに電流のエフェクトがケージの中に入る。

あの最終シーンを再現するかのよう。

「……」

ガンダム。

ボロボロになりながらも最後の一太刀を入れようとしている姿。

電流が走る。

彼の中で一筋のイナズマが迸る。

「おーい、一通り見たか？」

「……これでいい」

ヒカリはフルアーマーガンダム(サンダーボルト)を指さしている。

「俺……こいつとなら行ける」

一目惚れだった。

「こいつを見たとき、『ビリッと来た』」

目を輝かせ、自身の思いを告げる。

「ビリッと来たんだよ、俺の中で何かが……！」

サンダーボルトとビリッと来た、これは駄洒落か何かなのだろうか、とシヨウタは思う。

いや、きつと違うだろう。何せ彼はガンダムを一度も見たことがない素人。

この作品の事も知らないのだから無意識であることに間違いない。

「俺、この『サンダーボルトガンダム』を作ってみた！」

現に機体の名前を間違っているのだから。

「ヒカリ、こいつはフルアーマーガンダム(サンダーボルトVer)であって、サンダーボルトガンダムって名前じゃないぞ」

ひとまず訂正は加えておいた。

サンダーボルトはこのモビルスーツの出演した作品の名前である。フルアーマーガンダムというモビルスーツは他にも存在するため、その区別のためにサンダーボルトと付け加えられてるわけである。つまり、この機体はサンダーボルトガンダムという名ではない、と。

「ああ、そうなんだ」

「まあ、何がともあれ、サンダーボルトとはいい趣味してるじゃねえか！」

彼の背中をどんと叩く。

「よし！ じゃあ、そのモビルスーツのコクピットまで一名様ご案内だ！」

シヨウタに連れられ、ヒカリは自分の選んだフルアーマーガンダム(サンダーボルト)の置いてある場所まで移動した。

「……？」

パッケージを見る。

そして、ディスプレイを見る。

おかしい。

何か武装が多いというか、装甲が多いというか……

「あ、いやな。それが本来の姿で、そのアーマーの下がああなってるってわけさ」

冷静に考えてみたら、ガンプラ初心者がサンダーボルトに手を出すのは少し無謀のような気もしてきた。サイコザクよりは遥かにマシンかもしれないが、フルアーマーガンダム自体も中々に手間がかかるし、難易度も高いような気がする。

その分、出来上がったときの愉悦感は素晴らしいものであるが。

重厚感も差し支え無しだし。

「まあ、あの姿に惚れたっていうなら、素体だけ作ってみるか？」

「うん」

ヒカリはフルアーマーガンダムのプラモを手に体験コーナーへと向かっていく。

「おい待て」

一度彼を止める。

「作る前にちゃんと買ってからな？」

「あ、そうか」

うっかりしていたヒカリはレジへと向かっていった。

「すいません、これくだ——」

「あ、ちよつと待て。学生証持ってるだろ？」

シヨウタはレジに箱を出そうとするヒカリを手で制す。そして自分の学生証をヒラヒラと見せた。

「持ってるけど、なんで？」

「このショップは学園と提携しててな。学生証を見せれば初回だけタダになるんだ」

「へえ、すごいね」

そう言うと、ヒカリは学生証を取り出し、箱と一緒にレジに出した。「じゃあ、これください」

結果、ヒカリはタダでガンプラを手に入れることが出来た。

.....

ビルドコーナー。

いよいよ、フルアーマーガンダムの箱を開封する。

「うわー……」

想像以上の数のパーツに驚く。

こんなバラバラとしたものがあんな姿になるのかと想像するだけでも不思議に思う。

「作り方は俺が教えるから、ニツパーの使い方とかはさすがに調べてきたよな？」

そこくらいは調べてこいと前もって連絡しておいた。

ガンダムの解説以前にガンプラを作るときのアイテムの使い方までその場で教えろと言われたらキリがない。さすがにそこは調べてこいと連絡は入れておいた。

「うん」

言われたとおりに調べてある。

一通りの作り方はしつかりと頭に入れておいた。

「それじゃあ、さっそく作ってみて……」

「ん？」

彼は気づく。

「あつ」

そこへ現れたのは……入学式と同じ、猫耳フードのパーカーを来た少女。

パーカーの下はさすがに制服じゃなく私服。

初日で知り合ったあの少女。

「君は」

思ったより早くの再会であった。

03話「始まりのビルド」

天使のように純粹で無垢な見た目の、幼い女の子。

壊れてしまったガンダムプラモを拾い上げ、自身の手で優しく修復してくれた女の子だ。

それだけじゃない。

ガンプラバトルでも、ひらりひらりと宙を舞う0ガンダムの姿は、さながら翼をはためかせる天使のようで美しかった。見るものを魅了する、崇高な美しさだ。

自分がガンプラに触ってみたいというきっかけとなったのだった。

その女の子が今。

自分たちの目の前で新しいガンプラの箱を手はこちらを見つめている。

「……」

少女はじつと、フルアーマーガンダム（サンダーボルト）のプラモデルの箱を見つめている。

「えっと」

「その子にするの?」

少女は首をかしげて聴いてくる。

「あ、ああ」

思いがけない質問に少し返答が遅れるが、即座に姿勢を整える。

「こいつとなら、やれると思って」

きつと、この機体となら楽しくやれる。

自分の頭上を駆け巡った、まさしくサンダーボルトのように鋭い電撃。体全体に巡り失踪したイナズマ。

今まで感じたことのない感覚だった。

こんなドキドキ。ときめくようなワクワク。

彼が16年生きた人生の中で、感じたこともない予感だった。

「そう」

少女は箱を両手で、ぬいぐるみを抱きしめるように持っている。「きつと、その子も喜ぶと思う」

以前にもみた、無垢で柔らかな笑顔。

ああ、その顔だ。

その顔を見たから……この子に導かれたから。

自分はガンプラの世界に足を踏み入れてみようと決心をつけられたんだ。

「なあ、体の方はもう大丈夫なのかよ？」

「あつ、そういえば」

シヨウタに言われて思い出した。

そうだ。この子は昨日行われた、ルール無用の3対1のデスマッチに勝利するも、突然頭痛と吐き気に襲われて具合が悪くしたのだ。

それだけじゃなく胸も苦しいようだった。数分経ったら、本人は平気だと立ち上がったが……念のためにと保健室に連れていき、ひとまずは安静にと数時間ぐらいベッドで休ませることになった。

見た感じ元気そうだが大丈夫なのだろうか？

「平気。ありがとう」

ヒカリとシヨウタの疑問には大丈夫だと答える。

「……ごめんなさい。迷惑をかけて」

「あつ、いやいやそんな迷惑なんて」

思わず2人同時に同じことを言ってしまった。

多趣味と無趣味、ハイテンションとローテンション。性格も温度差も全く違う2人であるのだが、彼らは小学生時代からの付き合いだ。息があつたから、どこかで波長があつたから成り行きで友達になつたのである。

付き合いも長いせいか2人はどこか似通っている場所がある。

慌てながら と 冷静に。

2人とも温度差は全く違うものの、セリフは一字一句間違えることはなかった。

「ふふっ」

少女は笑みを浮かべる。

「二人とも、すごく優しい」

「いや……」

「そうそう、へへっ」

頬をカリカリと搔く2人に微笑むと、今度はその表情に陰りを落とした。

そしてぼつりぼつりと事情を説明する。

「私、昔から体がよくなって……頭を使ったり、運動したりすると、あやつて具合が悪くなるの」

ガンプラを使ったバトルは遊びではある。

が、多大な精神力を必要とし、展開をよむために頭を使うことも多々ある。そして、集中を維持するためには体力もいる。

遊びでありながらも大いに体力を使うため、その競技は一種のスポーツと言われているのだ。

この少女が普段からおとなしめなのは体が弱いという理由があった。

「でも、どうして俺を助けて」

だとしたら、何故バトルに乱入してまで自分を助けてくれたのか。「どうして、ガンプラを。この世界に入ったの？」

ガンプラビルダーは何も戦わせるだけの世界ではないが、この学園に入れば必然的にガンプラバトルには手を出すことにはなる。

動かすことによってガンプラの魅力は数倍跳ね上がる。しかし、バトルに手を出すとすることは、ひ弱な自分の体に鞭を打ち付けることに他ならない。

何故、その苦しみがある環境の学園を選んだのか。

この少女のビルダーの腕の高さは、一目見て極上だとわかるもの。無理にこの学園に入らなくても、別の道でビルダーを目指すことも可能なはずである。

「好きだから」

少女は答える。

「ガンダムが、好きだから」

箱を抱きしめたまま答える。

「好きなものを自分で作って、自分で動かしたい……そんな理由じゃおかしい？」

「いや、おかしくはないな」

シヨウタは答える。

「情熱的になっても仕方ないよな！　好きなものなら！」

ガンプラビルダーとしての世界。興味を持って、その世界に足を踏み入れた男。

情熱的になれるものを見つけた彼にはその回答にはおかしいものなど何一つないと断言した。

「好きなもの……情熱……」

好きなもの、というよりも趣味という存在そのものに興味がなかった消極的な彼。

情熱なんて言葉とは程遠い世界を独り歩きしていた彼にはまだわからない感情かもしれない。

だからこそ、彼女の返答に少しばかり疑問を持ってしまおう自分がかしいのだろうかと疑問を浮かべてしまっていた。

まだ、この世界に足を踏み入れてみただけの彼には。

「お前もいずれわかるさ」

迷いを見せる彼の顔を察していたのか、シヨウタは肩をたたく。

「お前もきくと、情熱的になれる。保障してやるよ」

ヒカリのあの目の輝き。今まで見せたことのない表情。

シヨウタは確信していた。

きつと、彼は変わる。

この世界で彼は情熱を胸に宿すことになる。

「なあ、今からガンプア作るなら一緒に作らねえか？ こいつも今から新しく作るころだから、一緒に教えてほしいんだよ」

あの修理技術の手慣れている感じ、そして戦闘で披露した自作の0ガンダムの出来。

すべてにおいて無駄のない完璧さ。自分もそれなりにビルダーとしての技術はこの一念で磨いてきたつもりだが、彼女のビルダーとしての腕は脱帽もの。

プロレベルの彼女も手を貸してくれるなら百人力だ。

シヨウタは是非とも一緒に作ってほしいとお願いする。彼女のビルダーとしての技術もこの目で盗んでおきたいものだ。

「うん、いいよ」

快く少女はオーケーを出してくれた。

「えっと」

「ツキヨ」

少女はヒカリたちの体面に座り答える。

「アマナ ツキヨ。よろしく」

少女が手を差し出してくる。

……握手ということだろうか。

「あ、うん……」

戸惑いながらもヒカリはその手をつかむ。

本当に小さな手だ。自分と同じ高校生とは思えないくらいに儂げで。

温かい。

彼女の小さな手は、心が温まるようだった。

「わからないことがあったら、なんでも質問して」

「……君、年齢いくつ？」

早速質問をした。

「ガンプア関係ないやないかい！」

ハリセン片手にシヨウタの豪快なツツコミが返ってきた。
いや、そのハリセンはどこから取り出したのだ。SDガンダムのギヤグ路線並に突然のハリセン登場には一同も戸惑いを見せつつある。

「12歳」

ツキヨは快く質問に答えた。

「え？」

二人は固まった。

「私、飛び級で学園に入ったから……」

なんとということだ。

見た目が明らかに幼いと思ったからそういう体質の人なのかと思っただけ……本当に年下だったとは。年齢的にはまだ小学6年生くらいの年頃である。

何より衝撃的だったのは、12歳にしてあの技術を持っていること。

シヨウタはしみじみ思う。

世界は広い。

世界にはいろんな人たちがいるんだなと。

「ふうん。ありがとう」

「リアクションうすっ!?!」

まあ、もしかしたらと思っただけで質問したのだから当然と言えば当然かも。

それに何に対してもリアクションが薄いのは昔からだ。ヒカリは恐らく内側ではそれなりに驚いているのかもしれないけど、それを表に出すことは少し苦手なのかもしれない。

その証拠に自分と一緒に口をそろえて驚いているような声を上げたし。

やっぱり温度差があるせいかな、それに気づく人は少なかつただろうけど。

「それじゃあ、作っていいのかな」

たくさんのパーツを広げ、いよいよ組み立てに入る。

ビルダー経験者である2人の教えを受けつつ、しっかりと自分好みのフルアーマーガンダムを作っていこう。

「んっ」

パーツを広げた際、テーブルの上に少し積もっていたであろう埃が彼の鼻の中へ。

思わずクシャミをしてしまう。

口で抑えたため迷惑にはならなかったが、彼なりに豪快なクシャミであった。

おかげで鼻水が少し飛び出してしまった。

「シヨウタ……ティツシュ頂戴」

「そこ、『ティツシュくれよ』って言えば完璧だったな」

「え、何が」

「いや、なんでも」

このネタは見てる人にしかわからない。

指摘するのも次回にしよう。今はHGフルアーマーガンダムを作るのが先決だ。といっても、フルアーマーを外した素体の方を作るのが優先であるが。

「ツキヨはガイアか」

ツキヨが持っていたガンプラはHGガイアガンダムであった。

機動戦士ガンダムSEED DESTINYに登場するモビルスーツ。人型のモビルスーツ形態はビームライフルにビームサーベルのみとシンプルなものだけであるが、この機体の大きな特徴と云えば……やはり、犬のようなモビルアーマー形態が存在する事である。

人から獣の姿になるというのは当時発想としては面白いとショウタも思ったものである。

「どうしてガイアに？」

「……犬が好きだから」

女の子らしい。

可愛いものが大好きということか。

「ラゴウとかバクウじゃなくていいのか？」

「……この子がいい」

少女はガイアガンダムのパッケージを見てつぶやく。

「この子じゃないと……あの子をつけられないから」

「ん？」

そのセリフには何の意味があったのか。

彼は首をかしげていた。

「ああ、そうそうヒカリ」

言い忘れていたことがあった。

「フルアーマーガンダムの素体を作るのはいいが、ただそれだけだとオリジナリテイがないからさ、何かパーツをつけてみたらどうだ？」

ここの体験コーナーには、ほかのビルダーがここを使用した際に不要と判断したパーツが、一か所にまとめられてある。

これはジャンクパーツとして常にそこに置かれてあり、使いたい人がいるのならご自由にとりサービスである。

「……これ」

彼は何も考えずにフィーリングで機体を取り出した。

「……おお、お前やつぱり良い感性してるな」

取り出したパーツ。

それは自分の好きな作品の一つだったために、好感のある反応を見せた。

.....

数時間後。

ツクヨやシヨウタのアドバイスを得ながら作り上げた新しいガンブラ。

それがようやく完成した。

「できた」

フルアーマーガンダムの素体。

左腕にはフルアーマーガンダムが使用する、シールド付きの2連

ビームライフル。動かしやすいように少し小型化されている。

腰には右手で持ったためのビームサーベルがマウントされている。そこに原作と同じようにフレキシブルアームで接続されたシールドを、右肩のみに。あまり邪魔にならないようにシールドは小型化されている。シールドの内側にはフルアーマーガンダムの右腕に装備されている、5連装のロケットランチャーが内蔵されている。

それ以外にも牽制用のアサルトマシンガンがシールドの内側にマウントされている。どちらかといえば、このシールドはジェスタに近いものがあるだろうか。

火薬庫のようなシールドである。

何よりこの機体で特徴的なのは……背中のフルバーニアン。

彼が取り出したのは、試作1号機が宇宙で使用した、大型バーニアのフルバーニアンだ。ヒカリのガンプラに違和感がないように、少し形を変えて背中に装備されている。

そのバーニアの形は、どこかツールギスのバーニアを思わせるような形状をしていた。

「おう、良い出来じゃねえか」

大半は彼らの手伝いによって出来たものである。フルバーニアンとシールド武器に関してはショウウタが手掛けたものになっている。

しかし、素体を一から作ったのはヒカリだ。

だからこそ、彼は目の前のガンプラに感動を覚える。

……これが自分だけのガンプラ。

「サンダーボルトガンダム」

「いや、だから違うって」

名前が違うだろうとあれほど言っているのに。

……いや、むしろ彼専用のオリジナルガンダムなんだから、それを名称にするのはありかもしれない。

よし、決定だ。ヒカリもその気のようにだし、この機体の名前はサンダーボルトガンダムで決定。

「んじゃ、動かしてみるか？」

ここなら邪魔も入ってこないはずである。

体験コーナーで少しばかり触ってみるのはどうだと誘いに乗る。

「俺も機体を持ってきているからな」

今日は彼にも体験させたいことが山ほどある。

そのために、彼は学園で作った最高傑作のジムを見せたいとのことであつた。

「ツキヨは？」

「先に行つてて」

仕上げに少しだけ時間がかかるようだ。

……真つ白のガイア。

シヨウタはそのガイアの背中をちらつと見る。

「ああ、なるほど。そういうことか」

彼女のセリフの意味が分かつた気がした。

「んじゃ、行くか」

2人は向かう。

バトルシステム。といっても、今回は対戦相手の存在しないCPUを相手としたシミュレーションバトルだ。

そこで基礎的な動きとこのバトルの楽しさを覚えてもらうことにする。

「……これからよろしく」

もうすぐ始まるのだ。

サンダーボルトガンダム。自分だけのガンダム。

自分の人生を変えることになる、〃最高に運命的なセッション〃が始まろうとしていた。

04話 「運命的なセッション」

バトルシステムの登場により、ガンプラバトルは大きく幅を広げた。

ヒカリたちの目の前にある、コックピットのような巨大カプセル。これは旧型のバトルシステムである。

が、旧型は旧型で実際にコックピットに乗っているような臨場感がある、という肯定的な意見も多い。

現在のモデルはカプセル型ではなくなっている。コックピットの風景はバーチャルヴィジョンによる立体映像で映し出されており、映像技術の進歩もあつて、旧型よりも臨場感が増している。実際には自分の周りには壁がないので、そこが旧型に劣るというファンもいるのだが。

コックピットタイプの旧型バトルシステムの中に、ガンプラと一緒に足を踏み入れるヒカリ。

……いよいよ、自分だけのガンプラでステージに立つ。

胸の中がはちきれそうだ。ここまで興奮を覚えたことは一度もなかった。

「えっと、確かにここにセット、と」

目の前にガンプラをセットする装置がある。

ガンプラを配置すると、バトルシステムが一瞬で起動する。

「そういうえば、初心者向けにチュートリアルがあるって言ってたっけ」
ショッピングセンターのガンプラショップに配置されているバトルシステムには初心者へのガイドとしてチュートリアルが存在する。

専用のエリアにて、ガンプラの移動の仕方に武器の切り替え方、照準の合わせ方にエネルギー補給のやり方など、バトルに必要な最低限な知識を学ぶことができる。

自分もガンブレ学園の生徒。

ビルダーとしての最低限の知識を入れておくためにここでしっか

りと勉強をしておくことにする。

チュートリアル時間はおよそ5分。

それほど長くはない。指示されたことを実際に真似するだけでトントン拍子に進んでいく。

チュートリアルの成果を試すのは本番で、ということだ。

いよいよ、サンダーボルトガンダム初陣の時である。

「おおお……」

カタパルトから、自身のガンプラであるサンダーボルトガンダムが戦場へと吐き出される。

この何とも言えない臨場感が体にまわりついて離れない。

吐き出されたのは森林地帯の存在する荒原エリアだ。

バーチャルとはいえ、かなりの再現力だ。岩も木も実際の障害物として破壊可能だし、こちらの攻撃次第では地形が変化することもある。

広々とした大地の上をサンダーボルトガンダムが浮いている。

「……ん？」

しかし、そこでハプニング。

サンダーボルトガンダムが、ピタリと止まったのである。

「……んんんっ!?!」

サンダーボルトガンダムが地上へと落ちていく。

そうだ、そういえば忘れていた。

ここに入る前にシヨウタからある注意をされていたことに。

【チュートリアルが終わったら出撃。出撃の際はオートでやってくれるけど、そこからは自分で操縦しないといけないから気をつけろよ】
チュートリアルで学んだことを忘れないようにということもそうだが、実際に自身のガンプラが動いているという感動で頭いっぱい

だったせいか、すっかり忘れていた。
落ちる。

自分のガンダムが間抜けに落ちていく。

「えっと、確か……」

即座にブースターのスイッチを入れる。

「……ッ!?!」

機体が動く。

前方から突風と言えるような感覚が伝わってくる。

サンダーボルトガンダムの背中に搭載されている専用ブースター。
試作一号機のフルバーニアンをトールギスのスーパーバーニアの
ように再現し、空中でも宇宙でも殺人的な加速と超速トリッキーな動
きを行える特殊なブースター、“ボルテックバーニア”が搭載されて
いる。

ボルテックバーニアの出力は見事なものだ。

しかし、それ故に使いこなすには少し時間がかかる。

殺人的な加速を抑え、トリッキーな動きに体が慣れること。

最初こそ、サンダーボルトガンダムは空中を蚊トンボのごとく、不
規則かつ乱暴な動きで暴れまわっていた。

「あわわわ……」

歯をガタガタさせながら、ヒカリは顔を青ざめる。

『落ち着け。ゆっくりレバーを引くんだ』

突然、コックピットの中から声が入る。

これは通信？

聞き覚えのあるこの愉快的な声は……シヨウタの声だ。

「こう……?」

レバーをゆっくり引く。

止まる。

空中で綺麗な姿勢を保ったまま浮いている。

『チュートリアル通りに動かしてみな』

「チュートリアル通りに」

ブースターの動かし方。機体の動かし方はしっかりと頭に入れている。

彼は何に対しても無関心ではあったが、能力が低いわけではない。学校でのテスト勉強の際はしっかりとテスト範囲を頭に入れていたし、運動に関しても、ドッジボールで活躍できるくらいの運動神経と反射神経は兼ね揃えていた。

普通のちよつと上ぐらい、と先生からも評価を受けている。

彼は何の能力にも恵まれていない、というわけではない。

それなりに能力はある方だった。

それ故に、友人からのアドバイスを聞いてからは落ち着きを取り戻し、機体を思うがままに動かしていく。

「おお……」

ボルテックバーニアによる出力。

その加速が体にも伝わってくるようである。

最高の躍動感。

震えるような臨場感。

興奮鳴りやまぬ高揚感。

「……最高」

気持ちがいい。

胸の中にアツアツのガソリンを放り込まれたような。今まで電源の入っていないかった体にスイッチが入ったような感覚が体全体に広がっていく。

すごい。

体験したことのない未知の興奮にヒカリは熱心にレバーを引いたり押したりを繰り返す。

『楽しんでるところ悪いが少し落ち着けよ。とりあえず合流しようぜ？』

合流？

このエリアのどこかにシヨウウタのガンプラがいるのだろうか。

『ごつちだよ、ごつち!』

すると、空中に信号弾が射出される。

合図。自分はここにいるぞという合図であった。

「あれは」

見えた。

一体のガンプラが元気よく右手を降ってこちらを待っている。

やはりジムだ。

こよなくジムを愛する彼のガンプラは、やはりジムである。

しかし、想像したよりもゴツイ。

近くには陸戦型ガンダムのカannon砲に、肩にはガンキャノンなどで使用されるカannon砲など、ヒカリの知らないモビルスーツの武器が取り付けられている。

まるで動く要塞のようなアーマーを身に着けたジムがそこにいた。

『思ったよりも慣れるのが早いな。こりやあ期待できるぜ』

やはり、このジムがショウタのガンプラのようだ。

その証拠に、自身の画面にショウタのコックピット内の映像が映し出される。

いつも通り愉快的な表情を浮かべているショウタからの通信であった。

「それがショウタのガンプラ?」

『ああ! その名もジム・カラツテレだ!』

ジム・カラツテレ。

彼には、こだわりともいえるべき美学がある。

それは、『ジムとはあらゆる局面でも対応できる柔軟性を持ち、それぞれに適した装備にも対応することができるのが強みであり魅力』というものだ。

ジムとはそれぞれの局面によって装備が異なる。そのバリエーションは多数存在し、対応出来ない局面は存在せず、あらゆる場所でエース機の援護をし、チームワークで敵を翻弄する。

まさしく、縁の下の力持ち。

このジム・カラツテレは戦場において装備を変える仕様だ。

装備は基本としてフルアーマーを纏う。支援砲撃、狙撃、機動力、重装甲といった、目的に応じたフルアーマーを装着するのだ。

今回選んだのは支援砲撃タイプ。彼曰く、
“ソリッドキャノンアーマー”だそうだ。

これ以外のバリエーションも存在するという。

カラツテレとはイタリア語で性格。性格が変わる機体。

まさしくその通りだ。何故、イタリア語がチョイスされているのかは後々聞くとして。

『さて、そろそろ構えろ。敵が来るぞ?』

「敵?」

『乗る前に言っただろ。CPUと戦うから出撃後は気をつけろって』

そういえばそんなこと言ってたような気がする。

思い出したヒカリはジム・カラツテレの横にサンダーボルトガンダムを並べ、その横でジム・カラツテレの下準備をじつと見つめている。

『さあ行くぜ。敵さんのおでましだ』

シヨウタがそう口にするのと、コックピットに敵が接近したという警告のアラートが鳴る。

基本的にバトルシステムは対人戦が意識されている。

しかし、対人以外にもしっかりとバトル機能は搭載されており、CPUによるバーチャルのモビルスーツが数体お相手するというバトルモードまで搭載されているのだ。

ガンプラシヨップやバトル施設などで用意されているバトルシステムには基本搭載されているものだ。ガンプラバトルの準備運動タイムと言ったところである。

レベル1。

初心者でも安心して相手ができるモビルスーツがこちらのお相手をしてくれる。

3体のザク。

マシンガンとヒートホークのみを手にしたザクがこちらに接近してくる。

『んじゃ、ご挨拶と』

陸戦型ガンダムのキャノン砲を馬鹿正直に突っ込んでくるザクに向けて一発発射。

「おおっ……」

キャノンの反動がこちらにも伝わってくるようだ。

ヒカリは思わず、その場でたじろいでしまう。

命中。

一発はただこちらへ突っ込んでくるだけのザクに見事命中した。

「おお、お見事」

『いや感心しないで、君も何かしなさいよ！』

ジム・カラツテレの右手がチョップをするようにサンダーボルトガンダムの頭を小突く。

まさかガンプラ越しにツツコミを入れてくるとは思いもしなかった。

「何かする……」

サンダーボルトガンダムの左手に装備されている2連ビームライフル。

大き目のシールドの裏に搭載されている2口のビームライフルだ。サンダーボルト版フルアーマーガンダムの主兵装でもおなじみの武器である。

「これをこうして？」

銃口を接近してくるザクに向ける。

最初の一撃。

ヒカリは息を吐いた後、ゆつくりとトリガーを引いた。

「……ッ!？」

バカみたいな火力。

想像していなかった威力のビームがザクに向かって発射される。

このビームライフルはエネルギーパック式。そのエネルギーパックの中に含まれるエネルギーを初っ端から全開にして発射してしまっただめにこの火力である。

溶けてしまう。

見るも無残な姿で一体のザクがあっという間に溶けてなくなってしまう。

『いきなるフルバーストですか、ヒカリ君……』

思わず敬語で喋ってしまうが仕方ない。

初心者でよくやるミスである。エネルギーの装填量の調整をしなかったせいでいきなり全エネルギーをぶっ飛ばしてしまうケースは。

不幸中の幸いか、これはエネルギーパック式。

予備のパックがあと3本ほどマウントされている。いきなりガス欠という事態には陥らなかった。

「すい……」

思わず、口をあんぐりと開いてしまうヒカリ。

「やりすぎのような気が」

『まあ、それくらい過剰でもいい気がするがな。なにせ、ガンダムだしな』

白い悪魔と言われるガンダム。

圧倒的な機動力に圧倒的な火力。それくらいのパワーがあつてもバチは当たらないと口においておいた。

『いい機会だ。ヒカリ、残った一体を倒して来いよ。俺が後ろでカバーしてやる』

せっかくだから接近戦の練習も兼ねて、あの相手をヒカリに譲るこ

とへ。

こちらは砲撃支援型。ヒカリが危なくなったら後ろでしっかりとバックアップを務めるため心配は無用とグッドサインを送る。ジム・カラツテレの左手で。

「……よし」

機体の準備はオーケー。

あとは自分の心の準備だ。

迫る一体のザク。

自分に言葉で表せないプレッシャーも迫る。

しかし、そんなプレッシャーよりも。

この機体を動かしたい。活躍させたいというワクワクの方が抑えられない。

迫る。

サンダーボルトガンダムがザクへと正面切つて接近する。

レベル1のザクは、敵が射程範囲内に入ってからようやく攻撃を開始する。文字通り初心者向けの戦闘パターンに設定されたCPUである。

敵を捉えたザクはザクマシンガンでサンダーボルトガンダムへと数発お見舞いする。

「これで」

2連ビームライフルのシールドでガードする。

小さくしたとはいえ、それでも十分にサイズの大きいシールドなだけあり、頑丈だ。ザクマシンガン程度の弾丸なんて、簡単に防ぎきつてしまう。

「行け……ッ！」

シールドで身を隠しながら接近。空いている左手で腰にマウントされているビームサーベルへと手を伸ばす。

取り出したビームサーベルは高出力。

文字通り、過剰と言えるほどの出力が具現する。

斬り裂いた。

そのまま、ザクと体がすれ違う。

爆散。

ザクの体は塵となって、空の花火と化した。

『上出来だ!』

レベル1のため対処は簡単だが、それよりも操縦の慣れが早いことを賞賛する。

センスがいい。これならもっと上手くガンプラを動かせるはずである。

「これが……ガンダム」

コックピット越し。モニター越しから自分のガンダムの両腕を見る。

これが自分だけのガンダム。

まるで主人公になった気分。

止まらないワクワク。次第にそれは表情に出始めていた。

『……ッ!? ヒカリ! 後ろだ!!』

シヨウタからの声。

「ッ!」

即座に反応した。

盾を構えたまま、サンダーボルトガンダムを降り向かせる。

衝撃。

シールドに大きめのヒートホークがぶつかる。

『ちっ、ダメか』

いつしか倒したザク。

その姿は忘れもしないザク。

『まあいい、今度こそ潰してやる』

不安定なほど装備を詰め込んだザクがシールドを蹴り飛ばし、サン
ダーボルトガンダムの体を吹っ飛ばした。

05話 「執念のスクランブル（前編）」

幾度となく叩きこまれるヒートホーク。

それを何度もシールドで防ぐ。頑丈に作られたシールドとはいえ、そう何度も殴られ続ければ流石にボロが出始める。

「今度こそー。今度こそぶっ潰すー！」

目の前で大暴れしているモビルスーツ。見た目の趣味も最悪、ただ敵を潰すことを優先に考えた、効率のみの装飾で出来上がった非道理な見た目のザクのガンプラ。

まただ。

入学式で襲い掛かってきたガンプラ集団の1人がまたもや、自分の前に現れたのだ。

「俺のためにとつとスクラップになれや！」

このザクが入学式に悪夢を見せつけた本人であることはすぐに気が付いた。

ヒカリは何に対しても無関心であった。

そのボーっとした第一印象故に小さい頃はちよつとした虐めやちよつかいの被害にあうことも多少はあった。

しかし、彼はバケツの水を被ろうとも、カタツムリのようにボーっと歩くだけ。

文房具や教科書を隠されても、『まあ、いいか』と1分も満たずに諦めて、教科書などは忘れたことにして先生に説教を食らってることも多かった。

ちよつかいに関して何の関心もなかった彼である。

だがそんな彼でも。

これだけのアプローチをされてしまえば、思ってしまうことも一つや二つは出てくるというものだ。

(しつこい……!!)

それ程度の感情は湧き上がっていた。

ここまで執念深く付きまとわれると、さすがの彼でも苛立ちくらいはする。ウザい、気持ち悪いと罵詈雑言を口にした気分にもなる。うまくガンブラを操縦し、ザクの攻撃を回避しつづける。

『ヒカリ！ 避けるッ！』

下からシヨウタの声が聞こえてくる。

咄嗟の判断。

ヒカリは防御を中断して、その場で回避する。

「ぐううッ!？」

下からの援護射撃。

危なくなったらカバーくらいはする。この言葉に嘘などない。

シヨウタは思いがけない奇襲に対しても冷静に対処、下から援護射撃でキャノン砲をぶちまけてやった。

「ちっ！ 浅い！」

だが急所を外した。

狙いどころが悪い。ザクのシールドと多少の装備を吹っ飛ばした程度で終わってしまう。

「邪魔すんじゃないよ！」

「ちいいッ！」

咄嗟にビームサーベルを抜いた。

新手だ。

下からのカバーは許してたまるかと、一体の武器詰め合わせドムが妨害にビームアックスを叩きつけてきた。

シヨウタはその奇襲に即座に反応し、ビームサーベルで攻撃を防御した。

「くそっ！ ヒカリが……！」

呑気にこちらの相手をしていたら、ヒカリがやられてしまう。

そうだ、このドムにも見覚えがある。

あの時の3人組の1人であったことは間違いない。

となれば、この戦場にはもう一体、敵が潜んでいるはずだ！

「オラオラオラッ！」

視界の端で、蒼い何かが閃光のように戦場に切り込んでいくのが見えた。

ブルーデイスティニー1号機だ。

空中を自由に機動するブルーデイスティニーが、パワー重視のマシンガンでヒカ리를攻撃する。

やはり、もう一体潜んでいた。

一体が下でカバーするシヨウタを妨害し、残りの二人がサンダーボルトガンダムをぶつ潰すという行動に出ようとしている。

「へっへっへ、どうやら自分だけのガンプラを作ったようだが……乗り手がいまいちじや宝の持ち腐れだろうよ！」

不良生徒の1人は容赦なく武器のトリガーを引き続ける。

「お前が持つても勿体ねえ！俺らに寄越せよ！」

2体のガンプラがサンダーボルトガンダムに牙を剥く。

『させない……！』

一線のビームが、2体のガンプラの前を通過する。

「何の光!？」

突然の攻撃に2体のガンプラは困惑を見せている。

……今のビームライフル。見覚えがある。

少し綺麗というか。通過した後に綺麗な粉雪が残るような感覚があるというか。

この心が和むような声。

間違いない。

ヒカリはビームの飛んできた方向に目を向ける。

つられて、2体のガンプラもその方向へと視線を向けた。

「あれは……」

「白い、ガイア?」

宙を浮いている白いガイア。

顔立ちは普段のガイアよりもスマートに。パッケージで見た獯猛なイメージが一切感じなくなっていた。

それだけじゃない。

白いガイアの背中から舞っている「緑色の粉雪」。

そう、GN粒子だ。

その獣は、GN粒子を舞い散らせながら、戦場を上から見下ろしている。

「ツキヨ?」

『ごめん。遅くなった』

やはりツキヨだ。

あの綺麗な出来のガンプラは……彼女が作った物のような気がしたのだ。

「なんだ、もう一機邪魔が……」

『はあっ……!』

白いガイアはブルーデイスティニーへとビームサーベル片手に突っ込んでいく。

速い。

目にもとまらぬ速さで突っ込んでいった白いガイアは、ブルーデイスティニーと共に森林地帯へと突っ込んでいく。

『すぐに助けに行く。だから耐えて!』

一つの通信を残し、ツキヨからの通信がパタリと閉じた。

「仕方ねえ! 俺一人でもテメエを潰す!」

詰め合わせのザクは、マシンガン片手にサンダーボルトガンダムへ

と突撃した。

.....

地上ではジム・カラツテレと武器てんこ盛りドムが戦闘を続けている。

「やりづれえな！ クソツッ！」

自分がつけている “ソリッドキャノンアーマー” は砲撃支援型。肩のキャノン砲は撃つのに少々の時間がかかることを突かれ、隙もななくちよつかいを仕掛けられている。

小回りの利く自衛武器として100mmマシンガンやビームサーベル程度は装備してあるが、これだけではあの数の装備と装甲をつけたドムを片付けるのは少々難しい。

「とつとと片付けてやるよ！」

向こうは弾切れを気にすることなく攻撃を続けている。

敵を倒すことだけに効率を求めたガンプラは見た目にセンスを感じさせない代わり、その代償としての殲滅力は桁違いである。

底知れない数の弾幕量に苦戦を強いられ続ける。

『おらおら、その程度かよ!?!』

「ご丁寧にスピーカーまでつけてきやがった。

とことん、こちらをコケにしないと気が済まないらしい。

『まあ、そんなもんだよな！ 何せ、機体がジムじゃなあ！』

「……は？」

だが、そこが大誤算だった。

人を馬鹿にするためにつけたスピーカー。それが彼の運命を決めてしまった。

『今時ジムってさ！ ジムなんて、やられ役の代名詞じゃねえかよ！』

ブチン

彼の中でナニカが切れた。

決定的な、ナニカが切れてしまった。

「おいコノ野郎……今、ジムがなんて言った？」

ビームサーベルをドムに向ける。

「もういつペン言ってみろ、ゴルアアツ!!」

アーマーに付属されているブースターを最大出力。猪突猛進とはこのことか。

この先のペース配分など知ったことかと言わんばかりに、機体を最大出力で前進させる。そのアーマーの頑丈さゆえにマシンガン程度ではストップすることなどない。

『こいつ!?!』

結構な数の砲弾と弾丸をぶつけているが、流石の頑丈さである。傷こそつけてみせるが、それでも接近を許してしまう勢いだ。

ここに来る前に致命傷を与えることは叶わない。

『だったら、ぶっ飛ばす!』

ならばビートアックスで首をぶった斬ればいいだけの事。

すれ違うようにメインカメラを破壊し、そして視界が奪われた状況で完膚なきまでに袋叩きにしてやるまでだ。

ビームサーベルでの攻撃レンジなんて限られている。そこへ接近する前にこのハルバードタイプのビームアックスで首に一撃入れてしまえば。

「オッル、アアアア!!」

ところが向こうにも一つだけあった。

『ぐっ!?!』

ビームアックスよりも攻撃レンジの広い武器が。

陸戦型ガンダムのキャノン砲。

突っ込んでくる時に持っていたのはビームサーベルだけではなかったのだ。ドムと一定の距離を詰めたところでキャノン砲の砲筒をドムの腹部へと突っ込む。

そのまま、ドムの体を砲筒で持ち上げる。

「泣いて詫びろ！ ジムの敵がああッ!!」

ゼロ距離射撃。

ドムの体は腹部から木っ端微塵に消し飛んだ。

「……ふう、スッキリしたあ」

ドムを木っ端微塵にしたシヨウタの顔は清々しいまでにスッキリとしていた。

.....

森林地帯。

動きを制止させるために大暴れした白いガイアとブルーデステイニーの攻撃により森は半壊状態。畑のような更地へと姿を変えていく。

「ぐっ……っ……いっ」

ブルーデステイニーを操る男子生徒は固唾を呑む。

「やっぱり強え……!」

無傷で佇む白いガイアガンダム。

3対1で仕掛けることによりやっつとダメージを与えられたビルダーだ。1対1なんかじゃ当然かなうわけもなく圧倒されている。

それに、あの機体は0ガンダムよりも明らかにスペックが上昇している。

結構なレンジに対応したビームライフル。出力があがったビームサーベルに、バックパックについているビームキャノン砲。

確かなパワーアップであった。

『へっ、やっぱり強いガンプラに鞍替えするのは当たり前か……!』

「鞍替え。というよりはお引越し」

敵からの挑発に答える。

「あの子はまだ諦めていない……だから、作り直したの」
背中から吹き荒れるGN粒子。

そのGN粒子をまき散らすGNドライブ……それは、彼女が気に入っていたガンプラについていたパーツなのだ。

「この子の名前は、Re:0「レオ」」

Re:0。

リマスターを意味するReに、とあるモビルスーツ名のスペル。その二つの名前を足して獣の名前となる。

この白いガイアの名はRe:0ガイアガンダム。

新たに生まれ変わった。白き獣のモビルスーツだ。

『なんだっていい……どんな手を使ってでもスクラップにしてやる！』

ブルーデイスティニーの目の色が赤く点灯する。

EXAMシステムだ。

ニュータイプを圧倒するために作られたドーピングに近い戦闘システム。原作ではパイロットの負担など考えることもしないレベルのパワーアップを施すシステムだ。

流星にビルダーに対してそのような副作用は存在しない。

それ故に、機体の負担のみ、のリスクで乱用することも可能。

敵を殲滅すること前提で作られたガンプラなら尚更だ。

敵を殺すだけのモビルスーツと化したブルーデイスティニーが、ビームサーベル片手に狂獣のごとく襲い掛かる。

「可哀そう」

ビームサーベルを持つ手を一瞬で切り裂く。

「ガンプラが可哀そう」

EXAMシステムはうまく調整をしていなければ、ガンプラへかかる負担は絶大。その証拠に不良生徒の使うブルーデイスティニーは見るも無残な姿へと変貌しつつある。

機体が明らかに負担に耐えられていない。

崩壊寸前にまで追いやられている。

「必要以上には壊さない……！」

すれ違いざまにRe:0は変形する。

白き獣。

地上を駆け回る白い獅子へと姿を変える。

背中 of ビームエッジが刃となって形成される。

GN粒子を圧縮することで高出力のビーム刃を形成。まるで羽のような姿へと変貌したビームブレイドを纏い、ブルーデイスティニーへと接近する。

そして、切り裂く。

の腹を真つ二つに。

ブルーデイスティニーの上半身が地面へと落ち、下半身は立ったままだったが数秒後に力なく倒れてしまう。

機体の限界を知りもしない奴などに負けはしない。

この、少女は。

05話 「執念のスクランブル（後編）」

『ちっ！・しやらくせえ！』

空中を逃げ惑うサンダーボルトガンダムを撃ち落とそうにもなかなか捉えることができない。弾丸を何発お見舞いしたとしても、肩についているフレキシブル仕様のサブアームシールドが自動でその攻撃をオートガードしている。

まだ防御面などの小回りで苦戦しそうなヒカリのためにツキヨとショウタが付け足したおまけ機能のようなものだ。

その気遣いがすぐにでも役に立っているようだ。

蚊トンボのごとく逃げ回る。

「逃げないと……俺に出来るのは」

自分に出来るのはそれくらい。

……本当にそれくらい？

（俺に出来るのは、そのくらい？）

自分の胸の中で何かが批判する。

逃げることをやめろ。自分の中で何かわからない感情が必死にそれを抵抗する。

（……ううん、いやだ）

その気持ちヒカリを駆り立てる。

彼の中で芽生えつつある。

戦士としてのプライドに火がつきつつある。

（負けっぱなしは嫌だ）

自分のせいでガンダムが傷つく。

自分が不甲斐ないせいでガンプラがスクラップにされてしまう。

自分のせいで、自分の機体が負けてしまう。

嫌だ。

それだけは嫌だ。

「負けたくない」

負けたくない。

「こんな奴にだけは……負けたくない！」

覚悟は決まった。心も定まった。

彼の闘志は極まった。

「勝つ……勝つんだ……ッ!!」

Uターン。

サブアームシールドの裏面にマウントされているアサルトマシンガンを取り出し、威嚇射撃を行いながら接近を仕掛ける。

不安もある。当然恐怖もある。

それ故に狙いはぶれまくってるし、弾丸も明後日の方向へ向かって飛んでいくのもチラホラ見えてしまっている。

彼は叫んでいる。

だが、その声が震えている。

自分の覚悟にはまだ戸惑いがあることも分かっている。

でも、その戸惑いを押しつけようとする。

自分を止めようとする恐怖を払いのけ、ただ走る。

駆け巡るんだ。

この戦場を……イナズマのように。

この名前に相応しい、雷光のように。

「な……!?!」

「ザクを駆る男子生徒は驚きの声を上げる。
変わった。」

明らかに動きが変わった。

ボルテックバーニア。

その出力は殺人的すぎる前面加速に、トリッキーすぎる変則移動の連続。

その繰り返しにより生まれる挙動は、口で例えるのなら、ただ一言。

——「サンダーボルト」

目の前にいるモビルスーツは、最早蚊トンボなどという目障りで見苦しい動きをするだけのガンプラなんかじゃない。

ただその一瞬を。標的にめがけて絡みつき、喰らいつくように迫りくるイナズマ。

文字通り、サンダーボルト。

「はあああッ……！」

ビームサーベルを突き入れる。

「何度も同じ手に！」

一度同じような攻撃を受けている。

デジャヴを感じた男子生徒はその攻撃を回避する。

「逃がさない」

スイツチを入れる。

「逃がすわけにはいかない！」

サブアームシールドが蛇のようにザクの胸部分へと突っ込んでいく。

何かロックが外れる音がする。

感じる。

このサブアームシールドの裏には……マウントされていたアサルトマシンガン以外にももう一つ武器が隠されている。

ロケットランチャー。

本来ならば、フルアーマーガンダムのもう片方の腕に装備されている実弾兵器。

数発の爆発弾がザクの胸の中に打ち込まれ……起爆する。

「何だ……なんだ、その速さはあッ!？」

不良生徒はただ叫ぶ。

何が起きたか分からない。あの一瞬の閃光を。

「俺の……勝ちだ……っ!」

2連ビームライフルを構える。

空中でもがき苦しむザクへと向けて撃ち込んだ。

「何とか言いやがれよおッ! うおおオオッ!？」

理不尽な出来事にただ叫ぶのみ。

虚しい男の叫び声は、ザクが砕け散る音と共に儂く消えていった。

「はぁ……はぁ……」

息が上がる。

勝ったのか？

自分が、あの男に一矢報いることが出来たのか？

今はまだ、その発想には至らない。

初めての戦いの緊張、プレッシャー。

その反動が今になって自分へとやってくる。

バトルフィールドが解除される。

3人はコックピットを出る。

「ヒカリ! お前!」

「ヒカリ……!」

そのバトルの風景は見ていた。

完璧だった。

癖の強いボルテックバーニアを使いこなし、見事に敵を倒してみせた。

初のガンプラバトルにて見事なまでの初白星。

「出来た」

ヒカリは声を上げる。

「俺、出来た? 俺、ガンプラを動かせた……!？」

「ああ、完璧だ！ 恰好よかったぜ！」

「うん……！」

2人は肯定する。

最高にクールだった。自分たちも鳥肌が立った。

「ははっ……！」

自身の手にあるサンダーボルトガンダム。

自分の相棒。

初めての動作。初めての勝利。

そのすべての喜びが込みあがって、思わず笑みを浮かべてしまう。

この笑みは、きつと初めてなのだと思う。

ここまで心から嬉しいと思ったことはなかったのだから。

「畜生が！」

向こうからコックピットを勢いよく蹴り上げる音。

「あんなのチートじゃねえのかよ！ ふざけやがって！」

「何見てんだよ！ 見世物じゃねえんだよ！」

負けた腹いせに八つ当たり。

見苦しい。どこからどこまで見苦しい。

「いい加減にしてくださいー！」

ガンプラショップの店員がさすがに止めに入ったようだ。

バトルの許可もしていないのに強制乱入。それ以外にも負けた腹いせの八つ当たりの繰り返し、普通に考えて営業妨害およびルール違反。下手すれば出禁レベルの行動である。

「ちっ！ 帰るぞ！ 胸糞わりい！」

「ああ、本当にな！」

3人は機嫌を悪くしながらその場を去っていく。

「待って」

ツキヨや呼び止める。

「ガンプラはもっていかないの？」

フィールドにはまだボロボロになったガンプラが残っている。

修理すればまだ動く。過剰なまでに詰め込まれた装甲や武器が盾となつて、最小限の被害にまでは落ち着いているようあつた。

「いらねえよ！ そんなゴミ！」

「勝てもしねえジャンクなんか、いらねえんだよ！」

ゴミ、ジャンク。

罵詈雑言を言い散らして、その場から去っていく。

「……」

拳を握る。

ヒカリは言葉にならない怒りがこみ上げる。

「相棒じゃないのかよ……」

ボロボロになったガンプラを見つめる。

「一緒に戦う仲間じゃないのかよ!!」

叫んだ。

ヒカリが叫んだ。

「お前……」

シヨウタは当然驚いた。

ここまで彼が感情的になったのは初めてみたような気がしたからだ。

ここまで怒りの籠った表情を浮かべたヒカリは見たことがなかった。

「何なんだよ、この胸糞悪さは……！」

フィールドに散乱しているガンプラ。

ゴミと呼ばれうち捨てられたガンプラ達を見て悲しんでいる。

今までで一番怒って、一番悲しんでいるのかもしれない。

今のヒカリは。

「……」

ツキヨはフィールドへと侵入する。

そして、ボロボロになったガンブラ達を回収する。

「おい、何をして」

「私が治す」

そつと、ボロボロになったガンブラを抱き寄せる。

「この子達は……まだ動きたいと思うから」

どこまでも優しい子なのだ。あの少女は。

敵であった人間のガンブラ。捨てられたガンブラを子犬子猫のように抱き寄せた。

慈愛に満ちていた。

思わず言葉を失った。

「なあ、シヨウタ」

ヒカリは顔を上げる。

「教えてくれよ。ガンブレ学園で何が起きているのか」

拳を力強く握りしめ、怒りに満ちた目でシヨウタの瞳をのぞき込む。

「どうしてそこまでして力に固執するのか……ああまでして、叩き潰すことに何の意味があるのかを……！」

もう、逃げはしない。

学園に潜む闇。それと向き合う目をしている。

それは、戦う覚悟なのか決意なのか。

今はまだ分からない。

でも、そこには頑固とした現れがあった。

「……わかった」

最初は戸惑った。

でも、もう隠すことはしない。
全てを話そう。
ガンブレ学園。
希望の裏に隠れた闇の姿を。

06話「そこは地獄のスクールライフ」

1年前、シヨウタが入学したときの話である。

彼の将来の夢、それは勿論ガンダムビルダーである。

小さいころから親の影響で見えていたガンダム。

父親からプレゼントされたガンプラ。それがきっかけで幼稚園の頃からガンプラを作り、小学校後半くらいには自分で作れるようになった。

中学校時代にはジムが大好きになり、このジムの魅力を120パーセント伝えられるビルダー兼ファイターになりたいと志すようになった。

運のよいことに自身の中学校の近所に例の学園が設立されていた。私立ガンブレ学園。未来あるガンプラビルダーの育成を中心とした教育機関である。

入学式当日は当然、ワクワクが止まらなかった。

これから1年間365日。3年間に換算して……およそ10000

日！

これから毎日ガンプラに囲まれながらの生活を送ることになる。ガンプラビルダーを夢見る彼にとってはまさしく楽園のような世界であった。

ただ一つ、不穏なものも目に入っていた。

“力こそ証明”

この言葉。体育館ホールに大きく飾られた掛け軸に描かれているその言葉が気になった。

でも、最初はスルーしていた。

そんなことよりもこの学園で腕を磨き、どのようなジムを作るかのほうが先決だ。自身の想像する設計通りのジムをこの学園で実現させてみせるのだ。

ちよっとおふぎけでアロンドライトを振り回すジムとか、セブンソー

ドを振り回すジムとかも試しに作ってみたい。無限の可能性を秘めているのがジムの楽しみなのである。

楽しみに思えばかり、最初の不穩はものの数秒で消し飛んでいた。しかし、彼は気づくことになる。

この学園が楽園なんかではなく……ひとつの地獄だということに。

彼がこの学園の闇に気が付いたのは入学してから5日後の事であった。

彼は見てしまったのだ。

新生生の作ったガンブラ達が、在學生によって木っ端微塵にされているところを。敗北者のガンブラを弄び、持っていかれてしまっているところを。

その毒牙は自分にもかけられた。

数人によるランチで自分の作ったジムを粉碎され、『ザコはおとなしくボールでも作ってろ』と一蹴し、その場を去っていく。

何がどうなっている。

このような事が許されているのか。と疑問に思った。

その日から、シヨウタは学園のことを探り始めたのだ。

そして見つけ出す。

自身たち新生生と同様、一方的に蹂躪される在學生の存在を。

在學生から全てを聞きだした。

この学園に潜む闇……この学園に身を置く者には逆らえぬ、ルールというものを。

ガンブレ学園。

未来あるビルダーを育成する機関。

しかし、その裏の顔は。

ガンブラを力の証明として利用し、強者が弱者を薙ぎ払う地獄のような空間だったのだ。

ガンブラを力として振りかざすことを全面許可し、強き者こそを正

義とする、と。

バトルに勝利し、その力を証明した者のみにより多くのパーツと自由を得ることが出来る。力とは資材を手に入れるための手段であり、ガンプラこそが力そのものなのだ。

逆に弱者は全てを奪われ、静まり返るのみ。

敗北者は大人しくガンプラを差し出さねばならず、発言も抵抗も許されない。

そういう校則なのだ。それを良しとする者だけが、この学園で最後まで残れるのだ。

力なきものに与えられる選択は、おとなしく強者に従うか、この学園を去るかの二択だ。

敗者はビルダーの夢を見るな。

その一言に尽きる、ということだ。

当然、このルールに納得がいかず、反発する新入生が多数存在した。しかし、その反発もたったの1週間で勢いが静まることになる。

力のみが支配するこの学園には、2つの存在がある。

まずは、トップ集団。

この学園で力を証明し、その頂点へと君臨し、この学園の秩序として存在し、ある意味では管理する抑止力として存在する、トップレベルの4人。いわゆる四天王というもの。

この学園のルールを作りし学園長に選ばれた、トップ4である。

それ以外にも、学園長直属の組織「風紀委員」。

力のみが証明である場であれど、秩序は存在する。最低限のルールというものは存在するのだ。

ガンプラバトル以外での力の証明、敗北者たちの執拗なまでの反発行為やデモ行為、それを鎮めるのが風紀委員の仕事である。風紀委員も学園長が選抜した腕利きの生徒たちであり、弱者はその圧倒的な力の前にねじ伏せられる。

逆らうことは許されない。

ルールが気に入らないのなら、夢を捨てこの学園を去ればよいだけのこと。

その言葉で片付けられる世界なのだ。

シヨウタは怒った。

そんな世界が存在していいはずがない。

ルールに則り、初心者ばかりをつけ狙う卑怯者がいる。負けてたまるか。

こんなルールなんかに。

こんな卑怯者たちなんかに。

あんな奴らにだけは負けるわけにはいかない、そういう覚悟を決めた。

シヨウタはこの学園に意地でも残るとも決めていた。

この学園を変える力なんて自分にはないけれど、このルールに反発することくらいならできるはずだ。

強くなるのだ。必ず、強くなる。

自身の夢をかなえるために、自身だけのジムと共に。

.....

初のガン普拉バトルの夜。

自宅に戻ったヒカリは、ベッドの上で天井を見上げている。

ガン普拉バトルを終え、話を聞き終えたその日は解散となった。

ちよつとばかり騒ぎを大きくし過ぎた。大ごとになる前にその場から撤退することとなったのだ。

シヨウタはジムを片手にいつも通り元気そうに、ツキヨはあの男たちが捨てていったガン普拉を自身の手荷物の中にしまい礼儀正しく頭を下げて。

明後日、ガンブレ学園でまた会おうと約束を交わした。

帰ってきてすぐ、ヒカリはベッドに寝転んだ。

「.....」

殺風景な部屋である。

勉強机にテーブルにクローゼット。ゲームのためだけに液晶テレビ、ちゃぶ台の上には一世代前のゲーム機に少しだけ読んでいる漫画が置いてあるくらい。

「……力、か」

力こそ証明の世界。

それがガンブレ学園の実態である。

「なあ」

勉強机の上に立ちずさむ自分だけのガンダム。

サンダーボルトガンダムを見上げている。

「お前は戦うだけの存在でいたいのか？」

何だろうか。

こうやってガンプラに喋る。玩具に喋るなんてバカみたいなことをやってると思う。

あのツキヨという少女と関わった影響だろうか、こうやってガンプラにコミュニケーションをとってしまっているのは。

自分でもおかしいことだとは思っている。

でも、なぜか聞かずにはいられなかったのだ。

喋らないと分かっている。その質問に返事が返ってこないと分かっている。

「……嫌、だよな」

ベッドから起き上がり、サンダーボルトガンダムを手取る。

「楽しみたいよな。この世界を」

戦うためだけじゃない。力の証明として破壊し蹂躪するだけの存在ではない。

自分の作ったガンプラ。

この相棒には、そんな殺伐とした世界を味わってほしくはない。もっと楽しいバトルがしたい。

「楽しもう。俺もお前も……そのために戦おう」

拳を握る。

あの男たちには。

ガンプラに愛もなく、ただ破壊を楽しむだけの暴君なんかには。夢を壊すような絶望的なルールには。

負けたくない。

「あいつがそうしたように、俺も戦ってみる……学園と」

学園を変える、とまではいわない。

逆らうことくらいはしてみせる。あの学園のルールと。

あんな卑怯者たちなんかには負けない。

二度と、自分のミスで傷つく奴らを増やしたくはない。

「……おやすみ」

サンダーボルトガンダムを再び机の上に置き、ヒカリは電気を消す。

彼は夜更かしをすることがほとんどない。高校生という学生らしくなく、いつも夜の10時には寝るといふ健康的な生活を送っている。

静まり返った部屋の中。

サンダーボルトガンダムの瞳が、少し開いていたカーテンの月明かりに反射して、輝いているように見えた。

その姿は偶然か否か。

自身の相棒であるヒカリを見下ろしているようにも見えた。

07話 「頑張り屋たちのセーフポイント（前編）」

学園生活一日目。

ヒカリの学園生活は一日目からハードスケジュールとなっていた。まず、朝のホームルーム前。普通よりも早い時間に自宅から登校し、在学生であるシヨウタの案内でこの馬鹿広い学園を案内してもらうことに。

時間は限られているので、最初は食堂とかバトルエリアとか教室とか職員室に諸々……必要最低限覚える必要がある場所をだ。

朝のホームルームが終わり、いよいよ授業が始まる。

授業内容はビルダー育成の学校らしく、ガンブラを作るうえでの必要事項や研究時間、中にはEXAMやHADSなど特徴的なシステムの使用の注意事項など。

この学園の驚いたところは、ビルダーとしての育成教育のみで丸2年は持つほどの授業量があるということである。

仮にも高校生なので国語や数学などの普通授業も含まれている。しかし、それを挟んでいなくても教えることが山積みの授業量があることに驚いたのだ。

最初の授業は主に先生の挨拶や教材用具の配布などで終わった。ビルダーの授業は一日目からノート1ページが埋まるほどの内容であったが。

昼休み。案内された食堂で最低限の食事。

そう、まだ案内する場所が残っているのである。

たった1時間でこの馬鹿広い学園の全てを案内できるものか。食事を終えたら、学園案内パート2を実行したわけである。

その後、午後の授業も何事もなく終了。

そして放課後。

ヒカリは自動販売機の前で缶のお汁粉を飲んでいる。

「……あつつ」

当然だろう。

春という暖かくなりつつある時期にお汁粉など飲めば当然である。

「よつ、ヒカリ待たせたな……つて、なんでお汁粉」

「間違えたんだよ」

ボタンが一個ずれてしまつて、こんな生暖かい時期に飲みたくもないお汁粉を飲む羽目になつてしまつた。

「またボーつとしてたんだろ。嫌なら捨てればいいのに」

「勿体ないじゃん」

空っぽになつたお汁粉の空き缶をゴミ箱に捨てる。

「んじゃ、行くか」

放課後は主に自由時間となつている。

学園の施設を使つて新しいガンプラを開発することも、ガンプラを使つてバトルをすることも、夜10時までなら何をしても許される。

「ああ」

そんな自由時間に彼らはどこへ向かおうとしているのか。

決まつている。

ガンプラがあるのだ。楽しむためにバトルエリアには顔を出しておかなければ。

「こつちだつて」

この学園でのガンプラバトルは、学園が指定したエリアのみでバトルが許可されている。

バトルエリアのある場所は朝の学園案内で教えてもらつている。迷子になるはずもないのでその場所まで移動を開始する。

「ああ、ちよつと待て」

堂々と歩くヒカリを止める。

「俺たちが行くのはこつちだ」

「え、でもそつちつて反対方向じゃ」

「こつちでいいんだよ」

ヒカリの進行方向へとシヨウウタが回り込む。

「……限られているバトルエリア、そして俺が話した学園の現状……
どんな修羅場が存在するか、大体見当はつくだろう？」

その言葉にヒカリは立ち止まる。

そうだ。この学園はガンプラを使用して力の証明を行い、敗北者からビルダーの証であるガンプラやそのパーツを奪い取ることを繰り返している。

見るに堪えない泥沼の戦場。自身のために醜く争い傷つけあう地獄のような世界がそのバトルエリアだ。

「正直な事を言おうと、お前には見てほしくない。ガンプラでバトルすることを楽しもうとしているお前に、あんな場所は」

幼いころから一緒に遊び続けてきた腐れ縁からの気遣いであった。彼はガンプラバトルを本気で楽しもうとしている。学園のルールなんかに縛られず、心から楽しめるガンプラライフを求めているのだ。

そんな彼がああの地獄を見れば、憤ることは間違いない。

それに、あの戦場に足を踏み入れれば、上級生の魔の手が一斉に迫るのは間違いない。砂糖に群がる蟻のように勝負を挑まれ、消耗しきったところを狩り尽くし、パーツもバトルポイントも絞り尽くされるだろう。

「でも、だとしたら、どうやってバトルを？」

「へっへっへ、まあ黙ってついてこいよ」

胸を張るシヨウウタに首を傾げ、ヒカリは疑問と共に彼についていった。

.....

数分後、彼らが到着したのは、学園の外。

学園用の非常階段のすぐ真下にある地下倉庫の入り口だった。

「どうしてこんなところに」

「いいから、いいから」

ドアを軽くノックする。

『合言葉は』

「Ez8はジムじゃねえ」

『OK』

なんだ、その適當過ぎる合言葉は。

ヒカリの首がますます曲がっていく。頭の上に疑問から生まれたクエスチョンマークのジャングルが生い茂っていく。

向こうが合言葉の確認を終えると扉がゆっくりと開く。

「おつ、シヨウタじゃん。お疲れ」

「おう、つれてきたぜ。例の奴をさ」

シヨウタは後ろにいるヒカリを紹介する。

それに合わせて、ヒカリも軽く会釈する。

挨拶を徹底することを第一とする彼はどのような状況であろうとも挨拶は絶対に欠かさない。

「おお、待ってたぜ！ ほら、入れよ」

シヨウタとヒカリは非常階段の地下倉庫へと足を踏み入れた。

.....

「おお……」

地下倉庫の階段を下りていくと、そこに広がるのはガンプラバトルに必要なバトルフィールドと数名のガンブレ学園生徒たち。

あのバトルフィールドは……今朝見たバトルエリアに配置されていたものや、シヨツピングフロアにあったバトルフィールドと違って、どこか見た目に違和感がある。

完成度が少し低いというか、ちよつとゴチャついているというか。一言でいえば、手作り感が目立つような気がする。

そんなバトルフィールドが4つほど、照明も蛍光灯やら豆電球やらバラついているため少し薄暗さが目立つ。そんな空間に生徒が何名か集っていた。

「ここは俺たちだけのバトルエリア……在学生達から逃げている奴

ら、ポイントを狩り尽くされた奴ら……お前と一緒に、心からガン普拉バトルを楽しみたい奴だけが集まってるのさ」

バトルをするのなら、学園の外にあるバトルフィールドを使う事でも解決はする。

シヨツピングフロアには勿論あるし、それを目的としたトレーニング施設なども存在するし、下手すれば小さなゲームセンターやレジャー施設に一台置いてあることなんて稀にある。

だが、ガン普拉ビルダーが多くなったこのご時世では、バトルフィールドは使用中だということが多く、中にはそこを狙ってネズミ捕り作戦をかましている卑劣な生徒だっている。

それに何より、せっかくガンブレ学園の生徒になったのなら、学園でガン普拉バトルをするというスクールライフを満喫したいはずである。

その夢を叶えるため、シヨウタは立ち上がったのだ。

自分以外にも心からガン普拉を楽しみたい奴らがいるはず。その連中を集めて、自分たちだけのバトルエリアをこっそり作って楽しむという計画を企てた。

上級生たちの妨害もいくつかがあったが、この1年という長い年月を立てて、同じくガン普拉を楽しみたい人たちが集結し、このような即席バトルエリアを作り上げることになったのである。

「他の新入生は？」

「ひとまず様子見だ。危なくなってる奴を見かけたら片っ端から声をかけるさ」

……昔から、困ってる人を見捨てられないのが彼の良いところであつた。

家族である母親やおばあちゃんの買い物に付き合つて荷物を全部持ってあげたり、街で迷子になつてる子を見かけては一緒に親を探してあげたりなど……その人の好きは昔からののだ。

自分もよく助けてもらったものだ。

虐められているところを助けてくれたり、自分の失敗を一緒になつて謝ってくれたり。

「相変わらずだな、シヨウタ」

「どうよ。また見直したか？」

カツコよくポーズをつけて、キメた表情までしている。

「まあ、多少はね」

でも調子に乗るのは悪い癖である。というか、この男の最大の汚点である。

そのせいで女性にも恵まれないうし、いろんな人から怒りを買っている。

あまり調子づけないように彼のポーズをガンスルーした。

「お前の冷たさも相変わらずだねえ!」

バトルフィールドに近づくヒカリの後を彼は追いかけた。

「おお」

4つのバトルフィールドは何れも埋まっている。

2つは一対一のバトルフィールドとして。1つは3V3のチーム戦として。

そして最後のひとつ。

彼の眺めているバトルフィールドは“スクランブル専用”。

ルール無し、数体のモビルスーツが戦場で縦横無尽にバトルロイヤルを行う。この即席バトルエリア限定の交流ルールである。

バトルポイントの奪い合いもパーツの奪取もそこには存在しない。

まさしく、ガンプラを楽しむ者だけが集まった空間であった。

「さてと、ちょうど2席空いてるし。やるか？」

シヨウタはソリッドキャノンアーマー装備のジム・カラツテレを見せて誘う。

「ああ」

自身も学園のカバンから取り出した。

自身の相棒であるサンダーボルトガンダムを。

.....

2人は即席バトルエリアの戦場へと足を踏み入れる。

「おっと！」

戦場に入ると早速ご挨拶。

「はっはっはー！ 新入生だからと言って手加減しないぜえ？」

「死ぬ気でかかってくるんだな！」

サンダーボルトガンダムとバスターガンダムの目の前に立ちはだかったのはアサルトシユラウド装備のデュエルガンダムに、バスターガンダムの2体。

「おいおい、お手柔らかに頼むぜ？ 一応初心者だからな？」

事実上、このバトルエリアのオーナーであるシヨウタは注意をする。

新しいメンバーの歓迎会を派手にしたいのは分かるが、突然の洗礼で新メンバーをドン引きさせるような真似だけはやめてくれと一言。

「それじゃー！ すぐさま撃墜されないように気をつけな！」

デュエルガンダムとバスターガンダムが背を向け、一度その場から離脱する。

「さあ、動くぞヒカリ！ こんなところで棒立ちしてたらハチの巣にされてしまうぜ！」

彼の宣告どおり。

「おっと」

四方八方からビームや弾丸の雨が飛んでくる。

いろんなところからガンプラの攻撃が飛んでくる。

ジム・カラツテレと同じで陸戦型ガンダムのキャノン砲を持ったガンプラがいれば、戦艦レベルのビームを打ち込むガンプラ。中には腹からビームを撃つガンプラも存在した。

……なんか、あの腹からビームが出る機体。マント羽織っていたり、巨大なトマホークを持っていたりとかガンダムのモビルスーツっぽくないけど、あれもガンプラなのだろうか？

疑問に思いながらも、ルール無用のバトルロイヤルに身を投じ、彼

は反撃にマシンガンを撃ち込む。

イキイキとしている。

すごく楽しそうにガンプラ達が動いている。

そこには支配と暴力の世界に怯えることのないビルダーたちがいて。

正真正銘の楽天。

心が躍るステージがそこにあった。

「よしー。」

こちらにも気合を入れなおしていくとしよう。

サンダーボルトガンダム歓迎会。こちらにも初心者なりに頑張ってみせようと。

「おい、ちよつと待て！　なんだ、お前らは！」

……突然声が聞こえた。

慌てているような声？　かなり荒げているような声であった。

「いいじゃねえかよ！　俺らにもやらせろよ！」

愉快そうな声。

その声に合わせて、2体のモビルスーツが戦場に現れる。

……いや、違う。

あれはモビルスーツなんかじゃない。

「モビルアーマー？」

シヨウタは戦場の上空に現れた2体のガンプラを眺めて口を開く。現れたモビルアーマーとやははすごく特徴的な見た目をしている。

片方は巨大な鎌が2本生えた謎の巨大顔面、もう片方の顔面のような見た目をしており短い4つの足が生えたような見た目。

見るからに少し愛嬌というか、間抜けというか。

ちよつと変わった見た目のガンプラである。

「やーとっ」

4つ足のモビルアーマー。

その口から放たれたビーム砲が、一体のガンプラを破碎した。

「お前ら全員のパーツ……いただくぜー！」

戦場の響き渡る処刑宣告。

一同は宙を浮くモビルアーマーの洗札に背筋が凍り付いた。

07話 「頑張り屋たちのセーフポイント（後編）」

突如戦場に現れたのは2体のモビルアーマーだった。

その見た目は、まるで顔面のように。

どこか愛嬌のようなものも見え隠れしているモビルアーマーの名前は、片方がザクレロ。そしてもう片方がザムザザーだ。

ザクレロは初代に登場するモビルアーマー。2本の鎌と口のような場所から発射されるメガ粒子砲が特徴。

ザムザザーは敵を捕縛する巨大クローに強力なビーム砲。2体とも空中もしくは宇宙を飛行しながら敵を殲滅する機体である。

シヨウタは一度、バーチャルで作られたコックピットから離れ、向こうの様子をのぞき込んでみる。

見たことのない生徒が愉快そうにコックピットで首を鳴らしている。

間違いない。あの2人はこの集まりのメンバーなんかではない。

「なんでだ……」

コックピットに戻ったシヨウタは憤りを覚える。

「なんでザムザザーを一人で動かしてるんだよっ！ ザムザザーは指令に砲撃手に操舵士の3人がいて成立する機体だろうが！ おかしいだろ!!」

『『つつこむところ、そこじゃねーよ!!』』

戦場に残っているメンバーから文字通り四面楚歌の総ツツコミを食らった。

でも、その指摘はあながち間違ってるわけじゃない。

ザムザザーは本来3人乗りの設定のモビルアーマーである。

「へっ、アニメではそういう設定かもしれないが、このゲームはアニメ

じゃないんだよ！」

向こう側から反論が返ってくる。

「残り二人分のデータなんてインターフェースにちよこつとチートコード打つとけばどうにでもなるんだよ！」

アニメじゃないためザムザザーは一人でも動かせるようにはなっていない。

しかし、3人乗りの設定に基づいているためか、一人で動かすには制御やその残り2人分の操作パターンをAIに命令したりなど、そのすべてを一人で行わないといけない。

はつきり言えば、一人でザムザザーのガンプラを動かすには結構な処理能力が必要となる。

しかし、あのザムザザーにはそんな技術や能力など必要なくなる小細工が仕込まれている。

そう、チートコードだ。

その場で堂々と反則宣伝。勝てばどうだってよいという粗暴さが現れている。

「おらおらっ！」

ザクレロとザムザザーは空中を暴れまわりながら粒子砲をバラまいている。

戦場に残っているガンプラ達はその場から逃げ惑うばかり。

『おい！ ガンプラを傷つけないやつは離脱しろ！』

別のメンバーがガンプラを戦場から離脱させるようにと命令する。

『この野郎っ！』

メンバーのうちの一人のガンプラ。バスターガンダムのビーム砲がザムザザーに向かって飛んでいく。

超高インパルス長射程狙撃ライフル。

バスターガンダムの武器であるガンランチャーと収束火線ライフルを連携することにより強力なビーム砲を発射する。

見るだけでも圧倒的火力。グウレイトと言いたくなるような火力だ。

あの威力ならモビルアーマーであろうとも。

「きかねえんだよー」

しかし、そんな強力なビーム砲もザムザザーの前では無力。

陽電子リフレクター。機体の外部に存在する3つの突起から形成されるビームシールドだ。戦艦のビームであろうとも防いでしまう凶悪なシールド兵器である。

「デメエラのパーツもポイントもいただきだあッー」

ザクレロの口、ザムザザーの4つ足からビーム砲が発射される。

あつという間に戦場は火の海だ。

戦闘の続行は不可能と判断したガンプラが次々と離脱しようとしている。しかし、強制離脱には数秒の待機時間が発生するため、離脱はさせまいとその瞬間をせこく付け狙う。

『ビームがだめなら直接斬りかかれば!』

デュエルガンダムがザムザザーに向かって特攻する。

器用な動きこそ見せるが一発一発の攻撃には隙がある。次のビーム砲が発射される前にと隙だらけの顔面へ剣を差し込もうとする。

『ばかっ! ザムザザーには!』

ザクレロには鎌らしき切断武器がある。それゆえに近距離戦も対応されると判断。その結果、近距離の対策がないであろうザムザザーに特攻を仕掛けてしまう。

しかし、そんなわけがない。

冷静に考えれば思い出せたはずなのだ。ザムザザーの4つ足には。

「ほらよっー」

捕縛用のクローがあることに。

『しまった!?!』

デュエルガンダムの片足をクローで捕縛されてしまう。

「粉々にしてやる……!」

「おっと待ちな! そいつは俺がもらっぜー」

クローで両断するには時間がかかりすぎる。

まだるっこいと判断したザクレロが鎌をちらつかせ急接近。手柄の横取りついでに欲望丸出しの援護攻撃を入れようとしていた。

『まずい……！』

あんな攻撃耐えきれぬわけがない。

デュエルガンダムのビルダーはめをつぶってしまった。自身のガンプラが粉々になる瞬間を見たくないがために。

『させるか……ッ！』

しかし、そこから思いがけない援護が来る。

「ぐっ!？」

ザクレロの巨体に突進を仕掛けるモビルスーツが一体。

『ごめん……！』

ザクレロが距離を取ったところで、すかさずビームサーベルを引き抜いた。

クローで捕縛されているデュエルガンダムの片足を両断するためだ。即座にデュエルガンダムの自由を取り戻すためにやむを得ず足を切り裂いた。

『ぐっ！』

片足をもがれたデュエルガンダム。

『すまん！ 助かった！』

即座にデュエルガンダムはその場から離脱した。

そう、現れたのはサンダーボルトガンダム。

「やりやがったな!？」

ザクレロのメガ粒子砲がサンダーボルトガンダムに向かって降りかかる。

『ちい……！』

即座に回避。

「あぶなっ!？」

行き場を失ったメガ粒子砲はザムザザの方へと飛んでいく。

しかし、このザムザザにはある程度の行動はオートで動くようチートコードが仕込まれている。ビームが飛んできた瞬間にオートで陽電子リフレクターが作動するようにセッティングされていたのだ。

「気を付けやがれ！」

「ちっ！」

あのザクレロとザムザザ。お互いポイントを自分の分だけ回収しようと思死のようだ。そのせいか、連携なんか滅茶苦茶である。

『テメエら！ 一体どうやってここへ入りやがった！』

ここは自分たち以外場所を知られていないはず。

どうやってここへ入ってきたのか。それ以前にここへ入るためには合言葉も必要はずなのにどうやって合言葉まで手に入れたというのか。

シヨウタは2体のモバイルアーマーに向かって叫ぶ。

「簡単だよ。お前についていったんだ」

『え？』

シヨウタはきよとんとした顔で固まる。

「なんか、お前が新入生を連れてフラフラとどこか行くから試しについて行ってみたら、こんな場所があつてよお。合言葉もあんな声で喋ってたら丸聞こえだっつもの」

『『『シヨウタアッ!!!』』』

『わりいいいいッ!!!』

ジム・カラツテレ。その場で頭を下げ謝罪。

自分じゃなくてガンブラでジェスチャーを取るの癖なのだろうか。それとも、こんな柔軟な動きも見せられるという自分のジムのア

ピールなのだろうか。

どのみち、彼の大失態が晒されてしまった瞬間であった。

これまた言葉にならないくらい四面楚歌である。

「おらおらー！ 全員ぶっ飛ばしてやるぜ！」

『くそっどうする！ ビームは効かないし、近づいたら捕縛される！』
ここにいる皆でビームの雨を降らせようにもザムザザーの陽電子リフレクターですべて防がれてしまう。近距離攻撃を仕掛けに行けばクローによる近接に切り替わり、近くにいるザクレロが鬱陶しく邪魔を仕掛けてくるに違いない。

どうにかして、モビルアーマーに一撃を入れる方法は。

せめて、ビームの防御手段を持っているザムザザーだけでも行動不能にする方法が……

(捕縛?)

その時だった。

ヒカリの中でまた電流が走った。まるでニュータイプの直感のように。

「……『ビリつときた』」

トントンと自分の頭を叩くヒカリ。

名案かどうかは分からないが、試してみる手はある。

『ショウタ、あのカマキリ仮面の方をお願い』

『ちよ、ヒカリ!? って、カマキリ仮面とは何ぞ!?!』

たぶん、あの顔面のような見た目に両腕の鎌を見てそう名付けたのだろう。

にしても不名誉なのかどうかも分からないあだ名をつけられたものである。あのモビルアーマー君は。

しかし、ザクレロの方を止めるとはどういうことだ?

シールドを構えながらザムザザーの方へ突っ込んでいく。そう

やって近寄ればいともたやすく……

「はっはあ！ 餌が向こうから来やがった！」
捕縛されるにきまつてる。

サンダーボルトガンダムの腹を両腕のクローで捕縛されてしまった。

『ヒカリ！』

あの陽電子リフレクターは実弾も分解するため救助するための弾丸を打ち出すことは出来ない。

それにザクレロから目を離せば、援護射撃を許してしまう。今、ザクレロからターゲットを切り替えることも許されない。

「これで押しつぶして」

『いや』

サンダーボルトガンダムの目が光る。

『出せないだろ。この距離じゃバリアは……ッ!!』

2連ビームライフルの銃口がコツンとザムザザーの顔面に。

「しまっ……」

そうだ、彼はわざと捕縛されたのだ。

陽電子リフレクターを展開できない距離にまで近づき、ゼロ距離でモビルアーマー一体吹っ飛ばす火力を叩きこむために。

『沈め……!』

エネルギーパックの残量全てを一撃に入れ込む。

過剰な閃光がザムザザーの顔面を貫き内側から溶かしていく。

「んなバカナア!？」

ザムザザーがあっという間に行動不能に。バラバラになったザムザザーのパーツが雨となって地面に落ちていく。

「おい！ お前が死んだら俺の防御手段が……」

『全員撃てエエエエツ!!』

シヨウタが即座に命令。

現場に残っていたガンプラすべてが逃げ回るザクレロに向かって集中砲火。ビームにマシンガン、大量のマイクロミサイルなどがザクレロに迫る。

まるで巣に迫った侵入者を排除しようとする蜂の群れのような風景だ。

「無理無理無理無理！ 死ぬ死ぬ死ぬツ！ こんなに沢山貰ったら、もつわけがああアツ!?!」

本来一撃離脱を目的として作られているのがあのザクレロだ。こんな一斉に集中砲火を食らえば機動性の悪いザクレロでは回避できるはずもない。

ましてや四方八方から手加減抜き最大の火力を一斉に放り込まれれば。

2体のモバイルアーマーがバトルフィールドに転落。

これでゲームセットだ。

「よっしゃー！」

全員がガッツポーズとハイタッチを交わす。

勝利した。突然の侵入者を相手に一同は勝利したのだ。

「ふざけんなー！」

ところが負けを認めない男子生徒の1人がその場にいた女子生徒を一人捕縛する。

それだけじゃない。首元にデザインナイフを突きつけている。

「へっへっへ……お前ら全員ポイントとパーツをよこしやがれ！」

じゃねえと、こいつがどうなってもいいのかよー！」

「汚えぞー！」

あまりの暴力的解決法。

一同は固唾を呑む。向こうは興奮状態になっている以上、そのナイフを本当に突き刺す危険性だつてあつた。

「おら、早くしろー！ 早くしないと」

「まあまあ、落ち着きなさい」

ところが、ナイフが徐々に女子生徒の体から離れていく。

男子生徒の腕を何者かが掴んでいた。

「いけませんねえ。このナイフはガンπραを作るためのもの。凶器なんかではありません」

……不気味な男だ。自分たちとは少し変わったデザインの制服を身にまとつた男子生徒である。

ショートカットで綺麗な七三分けの髪形に、眼鏡をかけた男。そんな男がこの緊張深まる状況であろうとも、満面の笑顔で男子生徒に声をかけている。

「ほら、早く行きなさい」

自由になつた女子生徒を解放する。

「テメエ、何をしやが……」

「げっ！ 風紀委員……!!」

ザクレロを操っていた男子生徒が怯えあがる。

「風紀委員だと……!?!」

ザムザザーを操っていたビルダーも顔が青ざめていく。

満面の笑顔を秘めた男子生徒の後ろには、彼と同じく変わった制服を身に着けた生徒が数十人ほど。一同、胸に手を当てたポーズを取っている。

「君たちの戦いはしつかりこの目で見ていました」

笑顔の男は口にする。

「バトルへの強制乱入、チートコードを使つてのガンπρα改造、そしてガンπραバトル以外での暴力行為……これは学園のルールに違反しています」

彼らの悪事を。

「それにこのような例が過去に何件もあったと報告を受けています。証拠をこの目に収めた以上、君たちを見逃すわけにはいきません」

笑顔の男は指を鳴らす。

すると、一斉に風紀委員のメンバーと思われる生徒たちが男子生徒を取り押さえる。

すごい力だ。

ガタイの良い男子生徒であろうとも容赦なく力で押し付けている。

「君たちは生徒にも学園にも、悪影響だ」

満面な笑顔がより深くニコリと笑う。

綺麗で真っ白な輝く歯がとても眩しい。

「コノハ、アオバ、お願いします」

「了解です」

笑顔の男のすぐ隣に陣取っていた女子生徒二人。

片方は目を怪我しているのか眼帯をつけているロングヘアの女子生徒。もう片方は手入れをしていないのか、くせ毛だらけの長髪をした小柄な女子生徒。

2人はそれぞれガンプラをバトルフィールドにセットする。

2体のガンプラ。

一体は真っ白なMS。上半身がどこか刺々しい獣のような風貌をした長身細身のMS。もう片方は見るだけでも、城と言いたくなるような巨体のMS。

「風紀委員のハイエナ・コルレルにクロコ・ガブル……！」

細身のMSの元の機体はコルレル。機動力と軽さにこだわった結果、過剰ともいえる細身となり武器も出力にこだわったビームナイフ一本のみという、特徴的なモビルスーツ。

もう片方の巨体の元の機体はガブル。こちらは逆に防御性に特化すればどのようなかというコンセプトのもとで作られた機体であり、武装も肉弾戦による格闘攻撃のみというこれまた特徴的な機体。

2体とも、ガンダムXにて1話限りでありながら印象を残したモビ

ルスーツだ。

「処刑執行用ガンプラ……ッ！」

生徒たちが怯えあがる。

そのガンプラ達の登場に。

「処刑する」

ハイエナ・コルレルと呼ばれた機体はナイフを取り出すと、地面に転がったザクレロの破片を粉みじんに切り裂いていく。

目に見える速さでザクレロが両断されていく。修正不可能と呼ばれる領域にまで。

「処刑します」

クロコ・ガブルと呼ばれたガンプラの巨大な腕が握り拳を作り、ザムザザーの巨体を木っ端みじんに粉碎する。

2体とも、見るも無残な姿へと変わっていった。

「君たちの事は学園長に報告します。これだけの一件を犯したのですから、退学は覚悟してくださいね」

笑みを浮かべながら、2人に処刑宣告を言い渡す。

「それとあなた達。バトルエリア以外でのガンプラバトルは禁止されています。今回は彼らの対応で手が回せないため大目に見ますが、次回は控えてくださいいね？」

ついでに自分たちにも注意勧告。

バトルはちゃんと指定された場所でのみ行うようにと。

……全員は無言で頭を下げる。

風紀委員に逆らうということは……それは彼らにとって、ビルダー生命の死を意味することだからだ。

「それでは、解散！」

両手を広げて宣告。

生徒たちは一斉に散らばっていった。

.....

数時間後、ガンブレ学園会議室。

「.....のようなことが、非常階段下での出来事のまとめです」

風紀委員長を取り仕切るこの男。

名前はイチヨウ。風紀委員のリーダーだ。

彼は会議室にて、今回の事件の一件を伝える。

事実上学園を管理する立場であり、学園の抑止力の存在と言われている——

ガンブレ学園最強の四人組、〃四天王〃に。

「.....今日も、クニザキさんは休みですか」

しかし、会議室の四天王の座席に一つ空白がある。

「仕方ありませんね。彼は忙しいですから」

クニザキという男は結構な数の欠席を取っているようだ。

最早日常茶飯事なのか、それは些細なことであると話を進める。

風紀委員は学園で起きた事件の内容を、念のため四天王全員の耳に通しておく必要がある。今後も学園にて面倒なことが起こらないようにと対策を練ってもらうためだ。

「くだらんな」

四天王の1人が席を立つ。

「そんなことのために俺を呼ぶな。敗北者の報告などどうでもいい」

それだけ言い残し、会議室から出ていった。

「相変わらず孤高なお方ですね、リョウさんは」

リヨウ。

部屋から出ていった男の名前である。

「それよりも……シノハラさん？」

座席に座る一人の女子生徒へとイチヨウは目を向ける。

満面な笑顔。彼は何か大事なことを口にするときはこうやって笑みを浮かべる癖があるのだろうか。

「今回の一件の生徒……あなたの派閥の生徒さんですよね？」

その言葉を聞くと、女子生徒はビクツと体を動かす。

「気を付けてくださいね。怪我人が出てからでは遅いんですから」

「……気を付けておくわ」

四天王の1人である女子生徒。

彼女の名はシノハラアカネ。

学園では序列4位の實力を持つビルダーだ。多少は可憐な見た目をしているが、顔面に大量のそばかすがある女子生徒である。

飼い犬の不始末は主人の責任。

この学園にはシヨウタを含めた反対派のようなグループもあれば、それ以外にもパーツ集めを効率化するために作られた過激派グループも存在する。

今回の生徒はそのシノハラの下配りであることが判明していた。

部下の不始末にしっかりと頭を下げる。

「……ゴミカスが」

小声でシノハラは呟いている。

「どいつもこいつも顔に泥を塗りやがって……！」

その場にいる2人は見えていないだろう。

シノハラが浮かべている醜い表情には。

「一つ質問をよろしいでしょうか」

そんなシノハラとは打って変わって、全くの真逆。

清々しく礼儀正しい雰囲気男子生徒が拳手をする。

髪の毛を馬の尻尾のようなポニーでまとめている少年。まるで騎士のような爽やかな雰囲気的美少年であった。

この男の名前はツバキ・クサカ。

四天王の1人である。

「その、被害にあった生徒たちは」

「大丈夫です。彼らの暴動に関しては取り押さえましたし、ガンプラの強制乱入に関しても、勇敢なる生徒たちの手によって成敗されました！」

その試合は目を見張るものがあつたという。

「特にあのガンダムは見事でした！ 感服の極みです！」

肉を切らして骨を断つ。

その勇敢さをこの風紀委員長は讃えているようだった。

「……どのようなガンプラでしたか？」

「おそらくカラーリング、装備的にはサンダーボルトのフルアーマーガンダムを意識した機体でしょうか。少し寂しくなった代わりに派手なブースターを付けた機体でした」

「そうですか」

小耳にだけ挟むとクサカは席に座る。

「以上です。今後も事件が起きぬよう精一杯取り組ませていただきませう！ それでは解散！」

両手を広げ、その場で解散を宣言した。

.....

会議終了数分後、ガンブレ学園中庭。

「ふふっ」

ガンプラをこよなく愛する少女ツキヨ。

自身のガンプラであるRe:0を綺麗に拭いてあげている。

「おい、お嬢ちゃん？」

そんな少女の元に迫る。

「ちよつと付き合ってくれなあい？」

吐き気を催す魔の手が。

08話 「少女のドリーム」

シヨウタがかき集めた学園のルール反対派の一同の歓迎会ガン普拉バトルのスクランブルに参加した放課後。

風紀委員により、見逃す代わりに二度とこの場所でのガン普拉バトルを行わないことを条件に強制解散。

自分たちの罪よりも、いくつもの罪を重ねた男子生徒一同の重罪を処理を優先するためだそう。これは不幸中の幸いともいえるべきだろうか。

「大変だったね、いろいろと」

「あー、本当になー……」

グツタリとしながらシヨウタはヒカリと共に放課後の廊下を歩いている。

シヨウタが教材用具などの荷物を教室に置きっぱなしだったそうだ。ヒカリはそれに付き合う形でついてきたというわけである。

「よかったね。皆良い人で」

場所が見つかったことにより差し押さえ。せつかくのバトル空間を奪われてしまった。

これは後をつけられてしまったシヨウタの完全な失態である。これには当然、バトル部屋を追い出されたのちに頭を下げてシヨウタは謝罪した。

バツシングの雨がやってくるのかなと思いきや。

『仕方ないって！ いつかは見つかるとは思ってたし、それに場所が奪われたのならまた見つけなければいいんだよ！ いつもみたいにさ！』
『そうそう、お前のドジでバレたのは今日が初めてじゃないんだし、もう慣れっこだよ』

『次からは気をつけろよ？ 皆で場所を探すのは大変なんだからな？』

みんなの心は意外と広くて優しかった。

ただ、間違いなく彼をデイスっている言葉が何個か含まれていたのは間違いない。それに対してシヨウタはぐうの音も出ない表情を浮かべていた。

「どうやら、こうやって場所が見つかったのは3回目らしい。」

過去、別の場所に2回ほどバトル空間を見つけていたようだが、1回目は在学生達に見つかってしまい占領、2回目も在学生に見つかってしまつてを繰り返していたようだ。

これだけ馬鹿広い場所とはいえ、ザコ狩りに目を見開いている在学生達がウロチョロしているのだ。どれだけ足掻いてもいつかは見つかるものである。

3か所目である非常階段の下は今までよりも長い時間は滞在できたようだが……

「皆の優しさが胸に響いたぜ……」

「風紀委員、か」

シヨウタの話から聞いた例の組織の事を思い出す。

風紀委員。学園のルールと秩序を守るために動いている、いわば学園の警察機関。

話に聞いた通りの容赦のなさに仕事の速さ。その場にいた皆が彼らに逆らうことを考えておらず、風紀委員側も間髪入れずに罪を犯した生徒の処罰として、学園への報告にガンプラの完全スクラップ……

あの笑顔の男のことを思い出す。

ずっと笑顔だった。

刑を執行するときも、自分たちに猶予を与えるときも。

不思議な気分だった。

あの男から……これほどにもない不気味さを感じた。

「ところでヒカリ」

シヨウタはヒカリの手に持っている物を見る。

「なんで、またお汗粉の缶を……」

「また間違えた」

「また!？」

普段はボーつとしているヒカリだ。自動販売機のボタンを押し間違えることは結構な回数経験していることは前回伝えたことだと思う。

しかし、同じようなミスを1日で3時間もしないうちに犯してしまった。ここまでの上の空ぶりにはさすがの脱帽ものである。

「お前がボーつとしているのはいつものことだが……というか、間違えたのなら捨てればいいじゃねえか」

「勿体ないじゃん」

自分で買ったものだ。出された食事はちゃんと食べるのと同じように、自分で購入した者はしつかり自分で処理をする。

ヒカリの中にある中途半端な律儀感である。

「まあ、いいんだけどサ」

シヨウタは呆れながらも夕暮れの廊下を歩いている。

「しかし、これからどうするか」

今後の事を皆と少しだけ話し合った。

みんな曰く、『最近、風紀委員をよく見かけるようになった』など、ここ最近で頻繁に動きを見せるようになったという。

無理もない。力を証明するのはガンプラバトルのみというルールを平気で破り、今日のような暴挙に出る生徒も存在する。そういった生徒が増えれば、学園のイメージにも関わることなのだから迅速な処理をしたいのだろう。

ここ最近で、間違いなくそのような生徒が増えている。

学園側も困っているのかもしれない。

……ガンプラバトルで力を証明する。なんて馬鹿げたルールさえ消えてくれれば、こんな問題起きないんじゃないかと思ってしまうのは野暮なことなのだろうか。それを口にすることはやはり学園としては罪と指摘するのだろうか。

風紀委員の注意が向いている以上は迂闊にエリア外でのバトルが

できない。

どうにかして、バトルを楽しむための空間を見つけることが出来な
いだろうかと皆で話し合った。しかし、そう易々とそんな聖域が見つ
け出せるはずもなく。

今日はひとまず解散。

それぞれ、思い当たる場所を探ってみるとのことで話は終了した。

「どうにかならないものかねえ……」

シヨウタは頭を掻きむしっていた。

「なあー、その2人ともー」

そんな2人のもとに生徒が一人声をかける。

……こうやって声をかけるといことは、自分たちと同じあの場所
にいた生徒だろうか？

「俺たちになんかようか？」

「あのさ……アマナツキヨっているじゃん？ あの子って、君たちの
知り合いだよな？」

「まあ、そういうことになるのか？」

確かに2度ほど交流はしている。

向こう側も親しげに会話してくれていたし……友達と決めつけて
いいのかは少し判断材料が足りないような気がするが。

一応、知り合いということでシヨウタが回答する。

「なんか、その子が学園の中庭で3年生に絡まれていたけど……」

「!!」

そこで過った嫌な予感。

シヨウタの顔に嫌な汗が流れていく。

「っ！」

ヒカリはお汁粉缶を持ったまま走り出した。

「おいヒカリ、待て！ ああ、くそっ！」

シヨウタも慌てて、ヒカリを追いかけた。

「ヒカリ！ いったん落ち着いて」

「ムカついた」

その時、シヨウタはヒカリの横顔を見た。

「……完全にイラつときた」

いつものボーつとした表情とは違い、怒りを露わにした表情。

「シヨウタ、だから」

「わかったよ。これ以上言うな」

長い付き合いだ。ヒカリのことは彼も承知している。

自分と似たようなところがこの男にはある。

類は友を呼ぶという単語がある。その言葉が意味する通り、自分たちはどこか通じるものがあり、ここまで交流を深めてきたのだ。

2人は意気投合。そのまま中庭へと向かっていった。

.....

学園中庭。

シヨウタ達に声をかけた男子生徒の言う通り、ツキヨは3年生の男子生徒たちに取り囲まれていた。

力の証明である、自身のガンプラを見せつけながら。

「おい、お前、俺たちのダチを可愛がってくれたみたいじゃねーか？」

「泣いてたぜ〜？ お前に散々虐められたってなあ〜？」

話の内容からして、この男たちはおそろく……ヒカリを狩ろうとしていた男子生徒たちの仲間であることは間違いない。

あの男たちは仲間を呼んだようだ。

相手が飛び級性の12歳。少し病弱な幼い少女であろうとも……

徹底的に潰してほしいという残酷な願いを告げて。

「俺たちも可愛がってくれよお？」

「嫌……」

ツキヨはR e : 0をそつと抱き寄せたまま、その戦いを否定する。

「私はそんなことのためだけにガンプラを動かしたくない」

「じゃあどうして俺たちのダチを痛めつけたのかなあ!? なあ!？」

「それは……」

少女の想いはただ一つ。

「助けたかったから……」

ガンプラに興味を持ってくれたかもしれない生徒。これからガンプラビルダーとしての夢を持つてるかもしれない……輝かしい新たな仲間についてほしくなかったから。

助けたかった。

自分の大好きなガンプラで傷つく人の顔を見たくなかったからだ。

「ゴチャゴチャいわねえーでとつとと戦え！ ゴルアツ!!」

頭に響く。

男たちの騒音が病弱な体に障る。

次第にツキヨの視界に眩暈が生じていく。頭痛もひどいし、吐き気もひどい……否定しようとも押し付けてくる挑戦状を突き返す余力が徐々に衰退していく。

だが、こらえる。

ここで気を失えば……この大切なガンプラを奪われる。

でも自分にはどうしようもない。

さすがに腕の立つ彼女でも、5人以上いる敵を相手にすることは不可能だ。

「さあ、とつとと……」

「おいテメエラ」

男子生徒たちに声をかける救いの手。

「そいつから離れな」

シヨウタはいつにも増してカツコをつけた口調で声をかける。

ヒカリはその横で男子生徒たちを睨みつけている。

「ああ？」

男子生徒たちがこちらに注目する。

「俺たちが相手してやるっていつてらんだよ！」

威嚇するように声を上げる。

相手は8人はいる。

さすがに無謀にも程がないかと思っしてしまえる行動。

「へっ、随分とカッコつけるじゃねーか」

その挑発に乗った一同がツキヨから離れ、こちらにゾロゾロと近寄ってくる。

確実な殺意。お楽しみに横槍を入れた空気の読めないクソみたいな男子生徒の存在に腹が立ったのか。

どのみち、パーツを奪えるのなら誰だっていい。

こいつらが代わりをしてくれるというのならボコボコにすればいいだけのこと。二度とカッコつけられないよう痛めつけてから、あの少女の相手をしてやるだけの事だ。

不良生徒たちの欲望にまみれた目的が表情に見えてしまっている。

じりじりと近寄ってくる。

同時に空気も張り詰める。

来る。

自分たちを確実に潰してやろうと、殺意と欲望をガンプラに込めて。

「……くらえっ」

しかし、その瞬間。

真っ黒に少し茶色が混じったような液体が空中を舞う。

液体は湯気をまとい、舌も焼けるような暑さの小豆と共に男たちの顔面と体に飛び掛かる。

お汁粉だ。

ヒカリはここに来るまでに、入念に振り続けたお汁粉を男たちにぶっかけたのだ。

「あつつううう!?!」

「なんじゃ、これ!?!」

アツアツの液体が制服にかかり、言葉にならない暑さにもだえ苦しんでいる。

「よし撤退!」

シヨウタとヒカリは男たちが怯んだ隙にツキヨのもとへ。

「行くよ」

そのまま彼女の手を引いて、その場から離脱した。

あの二人、逃げ足の速さは見事なもので……気がついたら、ツキヨを含めた3人は視界から消えていた。

「追いかける! あいつらぶっ殺して」

「お待ちなさい」

お汁粉をかけられた男子生徒たちのもとへ誰かが近寄ってくる。

「バトルがしたいのですか? パーツが欲しいのですか? それとも名誉がほしいのですか?」

少しトゲのある黒い髪を纏めた少年。

まるで騎士のようなオーラを纏いながらその少年は近づいてくる。

「でしたら、僕の相手をしますか?」

「ああ、お前が望むならそうして」

「ま、待て! こいつって……!」

男子生徒の1人が耳打ちをする。

その瞬間、男子生徒の目がギンギンに見開いた。

「げっ!?!」

男たちは顔を真っ青にしてその場から逃げていく。

「すいませんでしたあッ!」

まるで……歯が立たない相手を見たように。

文字通り、尻尾を巻いてその場から逃げていった。

「……腰抜けどもが」

礼儀正しき、中性的イメージの少年。

「ツバキ・クサカ」は小さな怒りを口にして、その場から去っていった。

.....

数分後、学園の外まで逃げ切った3人組。

「はあく怖かったあく……心臓バツクバクだああ……ツ！」

あそこまで見栄を張って威嚇したのは生まれて初めてだった。

シヨウタは喧嘩慣れしていないわけではないが、向こうは明らかに自分より喧嘩慣れしている相手であることは直感でわかった。

さすがの彼も、失敗したらどうしようという緊張を隠せないでいた。

最後の最後まで格好のつかない男である。

「大丈夫？」

連れてきたツキヨにヒカリが声をかける。

「はあ……はあっ……」

息が荒い。

顔色も優れていない。

喘息っぽい。

息が上がっているのか、死にそうな表情を浮かべながら息を吐きだしている。

「あっ」

そこで思い出した。

彼女が病弱であったことを。

「ごめん」

さすがに謝罪を入れなくなった。

「ううん、いいの……ありがとう。助けてくれて」

喘息がきついのは隠せないようだが、それに交えて心からの感謝が

表情に滲み出ている。

良い子すぎる。

ここまで頑張ってお礼を言おうとするこの子、本当に良い子すぎる。

「この子を……戦わせずにすんだ」

Re：0を眺める。

したくもない戦いから、この子を避けさせることが出来た。

そのことに彼等へ感謝を。

「……戦いたくないの？ だったら、どうして俺たちを助けてくれて」

「楽しんでほしいから」

自身のガンプラの表情を彼に向ける。

そして、ツキヨも微笑みかける。

「ガンプラは楽しいものだって、知ってほしいから……」

彼女の対応からして、薄々と感じていた。

彼女はガンプラを本当に大事にしている。

ガンプラが壊れた時、自分のものであるうとなかろうと悲しんでいた。

この学園の戦い、そのルールを嫌っていた。

でも、彼女はその世界から目を背けず、むしろそのルールと戦って、たくさんのビルダーを助けようと奮闘している。

ガンプラの世界が素晴らしいものだと思ってもらうために、こんな残酷な世界なんかとは違うんだと教えるために……そんな気弱な体であろうとも戦った。

「どうしてそこまで」

「私ね、ビルダーのお父さんがいるんだ。世界でも有名なチームのメンバーで……小さい頃から一緒に遊んでた」

ツキヨは自身の事を語る。

ツキヨはハーフである。父親はロシア人であり、母親は日本人。彼女の髪が少し白いのはおそらくロシアの血が影響していると思われる。

父親はガンプラの雑誌に名前が載るくらいには有名なガンプラビルダーであった。母親は日本で塾の講師をやっている頭脳明晰な日本人……ツキヨはそんな2人のもとで産まれたのだ。

彼女は両親が本当に大好きであり、仕事の合間に相手をしてくれる2人といつも一緒に遊んでいた。

中でも、ずっと遊んでいたのは、やはりガンプラであった。

ツキヨ自身もガンプラで戦う父親、ガンプラを作るプロフェッショナルの父親の姿に憧れており、小さい頃から父親の影響でガンプラのことを学んでいた。

幼稚園児だったころには、すでにガンダムプラモを作れるように。小学校3年生のころには父親に負けないくらいの技術を身につけていた。

頭脳明晰な母親、ビルダー能力に決定的なセンスを持つ父親。

そんな2人のもとに生まれたツキヨは、文句なしの天才肌だったのだ。生まれながらの才能の持ち主であり、そのセンスは幼い頃より発揮されていた。

「だけど……ある日、事故が起きたの。お父さんの車が試合会場に向かう途中で事故にあつて……そこで利き手を失って、ガンプラが作れなくなったの」

それは、理不尽な事故であった。

相手はスマートフォンを見ながらの運転であり完全な不注意。若者の不注意により、父親はガンプラビルダーの命である利き腕を失ったのである。

「今、お父さんは入院してる……」

命に別状はなかった。

入院を余儀なくされるほどの重傷ではあった。

「だけどね、お父さんいつも私のことを心配してたの」

自分の事よりも娘のツキヨのことを心配していた。

「どうして私の事を心配してくれるの。自分の事を心配しないのって聞いたら……腕がなくなったりとところで何もできないわけじゃない。前みたいにバトルは出来ないかもしれないけど、まだできることはあるんだから気にするなっつて」

笑顔で語る父親の姿は今も覚えているらしい。

「前向きなところが、お父さんの良いところなんだ」
ポジティブに行け。

ガンπραを作ることとしても、これから社会に出るために勉強をすることとしても、人生を経験するうえでその精神を忘れるなどいつも言い聞かされていたようだ。

「お父さん言ってた。ガンπραで皆を笑顔にしたいって」

現在、父親は入院生活をしながらも、パソコンを使ってガンプラビルダーの講師をしているようである。

通信教育、そしてブログを使用しながらの講座。今自分に出来ることを精一杯やっている。

自分の夢のために。

今も前向きで戦っている。

「私、お父さんを心配させたくなくて。私もお父さんみたいなカッコいいビルダーになりたいなって思っつて……そのためにこの学園に来たの」

それから彼女はガンπραの事をたくさん勉強し、その実績を残した。

ガンπραバトルでの地区大会の優勝の連続、オリジナルガンπραの制作コンテストでの連続優勝。その実績が目にとまり、将来有望なビルダーとして、ガンブレ学園からの推薦がやってきたのだ。

飛び級性という、今までにない実例。

それを彼女は叶えてみせたのだ。

「ガンπραで皆を笑顔にする。それが私の夢」

自分も父親と一緒に。ガンプラで皆を笑顔にしたい。
その夢を叶えるためにツキヨは戦っている。

「今日はありがとう」

ツキヨはヒカリの顔を覗き込む。

「また一緒に、ガンプラで遊んでくれる？」

「……いいよ」

ヒカリは即答した。

「何度でも、何度でも遊ぶ」

少女の瞳を見る。

まっすぐな表情を浮かべるヒカリ。真剣なまなざしで自分を見つめ続ける彼の姿にツキヨはそつと首をかしげる。

「ねえ、シヨウタ」

「おつとそれ以上言うな。お前の言いたいことは分かる」

つうかあの仲とはこういうことか。清々しいまでの以心伝心。

自分たちも、この子にはずつと笑顔でガンプラを楽しんでほしい。
その気持ちは二人とも一緒だった。

「えつと、ツキヨでいいかな？」

シヨウタはツキヨの頭に乱雑に手をのせた。

まるで子供をあやすように力強く撫でまわしている。少しばかり乱暴な気がするが、今の彼からすれば、彼女は可愛い妹分のように見えるのだろう。

2人がしたいことはただ一つ。

いつしか、彼女が自分を救ってくれたように。

自分たちにも彼女の助けになれるように。

その願いを込めて。

「俺たちのところへ来ないか？」

シヨウタは誘った。

学園のルールなんて知ったことじゃない。

楽しむためだけのグループ。自分たちの元へ来ないかと誘いを入れた。

「皆いやつだぜ。お前のようにガンプラを楽しむ奴は大歓迎だ」

それにこの子には聞いてみたいことがたくさんある。

きつと人気者になる。この子なら自然と、皆と仲良くなれるはずだ。

「ツキヨ」

ヒカリは手を出す。

「一緒に、遊ぼう」

「……うん！」

ツキヨはヒカリの手を握った。

2人の手が重なった。

その瞬間。

まぎれもなく、友情が生まれた瞬間であった。

09話 「今後のプラン」

4月20日。ガンブレ学園にて午後8時45分。
学園閉鎖15分前。多目的ホール裏にて。

「そういうわけよ。頼めるかしら」

「獲物が少しばかり多いな……しっかりと報酬は弾むんだろな？」

2人の男女の生徒がひっそりと話し合いをしている。

学園に配置されている監視カメラの死角だ。生徒のほとんどが下校し、見回りの警備員も準備中のため、人の気配がほとんど感じられない時間帯だ。

「前払いよ。これでどうかしら？」

「ほう、中々思い切った額をくれるじゃねーか。報酬がパーツじゃない当たり、俺の事をよくわかってやがるな」

「いいから早く動きなさい……成功すれば、その10倍なんて余裕で払ってあげるわよ」

「充分だな。むしろお釣りが出る。まあ、全額貰うがな」

男子生徒はニヤケ面を止めることが出来ない。

茶封筒を自身の制服の胸ポケットにしまい込むと、多目的ホール裏から姿を消していく。

「頼むわよ……ガンブレ学園の壊し屋さん？」

「任せなよ」

お互いに背を向け、その場から立ち去る。

「俺が壊せなかったガンブラは、お前さん含めたトップフォー以外にないからな」

.....

4月21日。放課後。

ガンブレ学園より、徒歩15分ほどの距離の離れた市民ホールに

て。

「これで終わり」

「ぐわっ!？」

市民ホールには体育館同様のスペースが数か所用意されている。その中にはガン普拉ビルダー専用のスペースも当然用意されている。広々とした空間にて、4つ以上のバトルエリアが用意されている。そこでは、シヨウタ率いる学園ルール反対派の生徒たちが一斉に集まりガン普拉バトルを楽しんでいた。

新たなメンバー、アマナツキヨを中心に加えて。

「くっそおー！ 負けた!」

「すげーな、もう10人抜きだぜ!」

そこにはバトルポイントやパーツをかけた死に物狂いの血生臭さは存在しない。お互いにガン普拉を楽しみ、自慢のガン普拉を見せ合いながらのバトル。

「やるねえ、ツキヨちゃん」

「そう、今回は歓迎会。」

「うん、本当に強い」

ヒカリをこのグループに連れてきたときと同じように、ツキヨを歓迎するためのガン普拉バトルの会を企画していたのである。

シヨウタの父親はこの辺りでは顔が広く、パイプもかなり大きい。少しばかり親に無理を承知で頼んでもらい、市民ホールのバトルエリアを2時間ほど貸し切りで使わせてもらえることになったのだ。

風紀委員の手により使用不可能となった自分たちのバトルエリア。でもせめて歓迎会くらいはしたいという気持ちがあり、親に何度も頭を下げてどうか歓迎会にこぎつけたのだ。

ガン普拉バトル会にてツキヨは連続勝利。

早速その強さを見せつけ、同時に完成度の高いガン普拉を披露していた。

自慢の相棒、Re:0の姿を。

「すごいなツキヨちゃん！ すっごく強い！」

「しかもガンプラも綺麗だし、戦い方も恰好いい！ 憧れちゃうー！」

「ねえ、MA形態の時にGNフィールドを張ってたけど、あれどうやってカスタマイズしたんだ!？」

ものの数秒でツキヨはあつという間に人気者。

このグループのアイドル的な存在……いや、それよりはマスコットか？

早速同級生の皆から可愛がられていた。

「あわわわわわ……」

「ごちゃごちゃとした質問の数に押し寄せてくる人の波。

騒がしいことに慣れていないツキヨは当然戸惑っていた。心なしか、病弱な体も相成って顔色が少しばかり悪くなり始めている。

「おいおい、最初に言ったことを忘れたか！ ツキヨちゃんは体が弱いから、あまり乱雑にするなよって言っただろー？ 質問をするのなら一人ずつ、な？」

そろそろ助けに入らないとまずいと感じたのでシヨウタは救助に入った。

「よしよし、大丈夫か？」

「ありがとう、シヨウタ」

無理をしながらも笑みを浮かべてくれるツキヨちゃん。まさに幼き天使、といった感じだ。

シヨウタも思わずつられて笑みを浮かべてしまう。

「俺も戦ってみたいよお！ ねえー、いいく？」

「まあ落ち着けて。ちよつと疲れてるみたいだから休憩を挟もう」

いったん落ち着けと皆を宥める。

ツキヨも連戦で少し疲れているのは事実。10分くらいの水分補

給などを挟むことを提案した。

「……次の場所がいつ見つかるかは分からない。だから焦る、って気持ちは分かる。だが一旦リラックス、な？」

そうだ、市民ホールのバトルエリアは本来はオープンスペース。老若男女のビルダーが楽しむために自由に使われている空間のため、こう何度も貸し切りをすることは不可能と考えた方がいい。

今回だけ特別なのだ。

本来なら、2時間もこの空間を学生たちだけが貸切るということは難しい。本来このスペースを貸し切り使っているのはプロのビルダーチームの合宿だったり、近所のガンプラ同好会の交流会だったりなど、そういった集会で使用するのである。

「早いとこ次の場所見つけないとなく」

「でも学園の方は風紀委員が目光らせてるし、しばらくは迂闊に動けないってのもなあ」

間も明けずに違反を連続で行えば、自分たちが標的にされかねない。

今回は自分たちなど比喩物にならない重罪を犯した男子生徒の処理が忙しいため、見逃してもらったのだ。その猶予を与えられてる状態で違反を犯すには非常に勇気がある。

風紀委員に逆らうことは学園に逆らうこと。

彼らに目を付けられるのは、ビルダーの夢の崩壊を意味しているのだ。

「まっ、ボチボチ探そうじゃないの！　なあ、ツキヨちゃん、今度は俺と戦ってくれないか？　休憩が終わったらさ」

「うん、いいよ」

疲れている様子ではあるが楽しんでくれているようだ。

無理をして親に頭を下げた甲斐があったというもの。シヨウタはそう胸を張って、少女の笑顔を誇りに思っていた。

「俺はちよつとトイレに行ってくる」

ヒカリは一度トイレへと向かった。

.....

「ふう」

トイレを終えたヒカリはしつかりと手を洗い、タオルと乾燥機で乾かしたところでバトルエリアのあるオープンスペースへと戻ること

に。
……オープンスペースに向かう途中、ビルダー専用の多目的室や広場がいくつかあったのだが、そこにはかなりの数のビルダーが自身のガンプラを作り上げていた。

若い男女は子供だけじゃない、中には、初代のアニメを当時から見ていたであろうお爺さんもあり、ガンプラという文化は年齢を選ばないという凄さを実感する。

そして同時に、ガンプラが如何に世界で影響を与えた文化であるかということも。

自分もサンダーボルトガンダムを動かしたい。

自分もツキヨの白いガイアとは戦ってみた。

一体どのようなパフォーマンズを見せてくれるのかとウキウキが止まらないでいた。

自然と無関心な表情が緩くなる。

自然とスキップをしながら、オープンスペースへと戻っていく。

「えっ！ 今日集まりは見学禁止ってことっすか!？」

受付の前。

ヒカリはそこで足を止める。

「うん、ごめんねえ。ちょっと向こう側で都合があるらしくて、メンバー以外は入れたくないみたいなんだ」

今回はグループだけの歓迎会。

そこをつけ狙って、在学生どもにパーツ狩りをされては困る。今回ばかりはと念を入れて防御を固めていた。

「うわわあ、それは残念……」

受付前で落胆する少女。

……ガンブレ学園の制服を着ている。

少し薄い茶色の長髪に眼鏡をかけた少女。眼鏡越しでもわかるが少しばかり可憐な印象が伝わってくる。

「あれ、この人」

ヒカリはその人物に見覚えがあった。

「確か……同じクラスの人だっけ」

ヒカリは腕をポンと叩いて思い出していた。

そう、学園初登校の日。最初のホームルームにて生徒全員に簡易的な自己紹介をしてもらうよう言われていた。

ガンプラを奪い合うかもしれない関係はと言え、仮にも同じ学び舎でガンプラビルダーとしての勉強をしていく仲間なのだから、挨拶くらいはという先生からのお告げだった。

ちなみにヒカリは随分と質素な自己紹介だった。

カナタヒカリ。16歳。よろしくお願いします。

たったこれだけであった。

まあ彼らしいと言ったら彼らしい。着飾りもしなければ、大胆無謀な夢を口にしたりもしない。抑揚もクソもない超簡易的な自己紹介であったが、正直彼らしいと言ったら彼らしい。

そんな中、自己紹介をしている生徒の中にこの人がいたのを覚えている。

何事にも無関心。中学生時代も友達以外は顔をあまり覚えていなかったようなヒカリが

何故、この人の事を覚えていたのかは少しばかり理由があった。

「ねえ、君」

「あ、ひゃい！ にやんでしよう!？」

思いつきりテンション高くテンパっていたのだ。

たった今、自身に返答したときと同じように自己紹介の時も完全に上がりきっていた。

緊張のあまり滑舌も絶望的だったし、先生に声をかけられたときもこんな感じで噛んだ後に全力で謝っていた。

あまりにもその姿のインパクトが強すぎて、この人だけ覚えてしまったのである。

「あれ、貴方は確か同じクラスの」

どうやら向こう側もヒカ리를覚えているようである。

「すごい質素な自己紹介してた人」

「悪かったな、質素で」

ほほを膨らませてヒカリはいじけていた。

あれだけ簡易的すぎる自己紹介が逆に皆の印象に残ったようだ。クールなのかドライなのか分からない謎の生徒として。

「えつと、コミネさんだっけ」

「はい！ コミネです！ コミネサクラです！」

ずれた眼鏡を戻してから自身の名前を改めて自己紹介した。

「……ガン普拉バトルが見たいの？」

「え……あつ！ はいっ！」

せっかく正した眼鏡がまたズレてしまっていた。

テンションが高いが情緒不安定。少し変わった子だなと、『お前が言うな』とシヨウウタが言い出しそうなことをヒカリは考えていた。

新入生。自分と同じクラス。

在学生ではないため、パーツ狩りなどをやっている人には見えな
い。

「大丈夫よ。その子、君たちが嫌っているような子とは違うから」
PARTY狩り。その影響はこの市民ホールにすらやってくる。

そのため、市民ホールでは裏でブラツクリストのようなものを作っているのだが、このコミネサクラという人物はそこに加えるような悪どい人ではないことを受付のお姉さんが口にする。

「……シヨウタと話してみようか？ バトルを見たいっていう人がいるって」

「いいんですか!?!」

サクラは自分の肩に手をのせてくる。

目をキラキラ輝かせながらこちらに近寄ってくる。ぐいぐいと迫ってくる姿に流石のヒカリも引き気味であった。

……勢いで押されそうになったヒカリは冷静になる。

「うん」

受付のおねえさんの言う通り、この子が悪い人には全然見えない。変わった人ではあるが妙な事を考えてる人ではなさそうだ。

ヒカリは彼女を連れて、オーブンスペースまで向かっていった。

10話 「ハイ・テンションな新入生」

「ふむふむなるほど……よしよし、うむうむ……よっしや！OKだ！」
受付前にてビルダー同士のバトルを見たいというサクラの願いを叶えるためにショウタと相談。

ヒカリから話を聞くこと数秒、意外とあっさり許可が下りた。

「いいの？」

「ああ、大丈夫だ。お前や受付のお姉さんの言う通り、パーツ狩りをするような奴には見えないしな」

今まで見てきたパーツ狩りを行う生徒たちと違って、この子からはそのような雰囲気を感じない。

そもそもこの子はヒカリと同じ新入生。それに受付のお姉さんも大丈夫と口にしていたのでその部分は安心して大丈夫だろう。

「OKだって」

「うわあ！ありがとうございますっ！」

サクラは嬉しいのかピョンとウサギのように一回跳ねた。

天真爛漫な笑顔から嬉しさが伝わってくる。

「そんじゃツキヨちゃん。はじめるかい？」

「うん、いいよ」

ツキヨはRe:0を取り出す。

休憩中に再調整、そして汚れを拭き取ったりしていたおかげか連戦後とは思えないくらい綺麗になっている。彼女のマメな整備の証拠である。

ショウタが取り出したジム・カラッテレは今まで見てきた装備とは違う見た目になっていた。

今まで見てきた装備はソリッドキャノンアーマーという後方支援の砲撃型であったが、今回は必要最低限のアーマーにビームサーベルやマシンガンだけといった、高機動型装備。

サンダーボルトガンダムに近い装甲。

その装備の名前は、ブリッツアーマーだそうだ。

ジム・カラツテレは集団戦闘を意識している機体ということもあり、機動型に調整されているこの装備は先行して奇襲を仕掛け、敵のヘイトを集めるといった役割を補うコンセプトとなっている。

ただ今回は特例。

機動にも優れているRe:0が相手な上に一対一。後方支援は防衛特化だけあって後れを取ってしまうため、彼の言う4つある装備のうち、このブリッツアーマーを選択したようだ。一対一ということもあり、今回だけ特別にミサイルポッドを装備したようだ。

2人はバーチャルで再現されたコックピットの中へと入っていく。それぞれガンプラをセットすると、バトルフィールドが展開され、バーチャルで再現されたリアルな戦場の中でジム・カラツテレとRe:0が姿を現した。

「それじゃ！ バトル開始っ!!」

メンバーの一人が試合開始の号令を上げた。

それぞれシンプルな装備だけあって余計な装飾をつけていない。2体の戦闘は見るも鮮やかな高速戦闘となり、サーベル同士がぶつかり合い、サーベルのビームが花火のように飛び散る。

自身のガンプラへの熱意と想いを乗せたツキヨのRe:0、ジムへの愛をこれでもかと放り込んだジム・カラツテレ。

ただ破壊することを目的としたコンセプトで作られたガンプラじゃない2体。ガンプラを楽しむことを前提として作られた2体の戦いは、見る者全てを虜にしていく。

「うわあ……」

現にサクラもその勝負には視線を釘付けにされていた。

シンプルなカッコよさを誇るジム・カラツテレ、見た目だけでなく戦闘さえも綺麗であるRe:0。2体の戦いは次第にクライマックスを迎えていく。

「もらったぜー！」

「甘い……！」

ジム・カラツテレのビームサーベルの一撃。確実に隙をついたはずの致命的一撃が鮮やかに回避される。

「まじか!？」

「はっー！」

Re:0のビームサーベルがジム・カラツテレの右腕。ビームサーベルを持つ右腕を切り離れた。

「かあくー！俺の負けかあー！」

シヨウタは潔く負けを認めた。

隙を突いたはずであったが、隙を作られたのは自分の方だったと痛感したからだ。

自分はまんまと罠に嵌められたのである。シヨウタはそう思う。

一瞬だけみせた隙はブラフ。反射神経が良いとかそういうレベルじゃない回避を行った動きから推測するにこちらを誘い込んだことが伺えた。

右腕の挽げてしまったジム・カラツテレをシヨウタは回収した。

「ビックリしたぜ。見事に嵌められたよ」

「シヨウタもすごかった。あなたのジム、本当によく作りこまれてる」

ジムはやられ役なんかじゃない。縁の下の力持ちというところを見せてやる。

その熱意がツキヨのハートに伝わってきたようだ。今回の戦闘を通じて改めて。

「どうだった？」

ヒカリは横で震えているサクラに声をかける。

「感動しました!!」

サクラはちよつとばかりオーバーじゃないかと言えるようになりア

クシヨンで2人の元へ近寄っていく。

「お二人とも素晴らしい勝負でした！ あんな綺麗なガンプラの戦いを間近で見れるなんて……私は幸せ者です！」

目をキラキラさせながら、ぐいぐいと近寄ってくるサクラの姿に2人は少し困惑する。

シヨウタの場合照れてる様子もある。ジムが褒められて素直に嬉しかったのだろう。

ツキヨは目の前でギャーギャー騒がれることに少し目を回していた。何度も言っているが、彼女はこういう騒がしいことには慣れていない。

「どうだ、お前もやってみるか？ ガンプラバトル」

どうせなら見ていただけじゃなくてガンプラバトルもしたらどうだと口にする。

せっかく遊びに来てくれたのだ。

いい機会だし、間近でもつと楽しむために実際に戦場へ足を踏み入れるのもアリではないかと。

「ああ、いや、実は……」

人差し指同士をツンツンさせながらサクラは申し訳なさそうに呟く。

「私、ガンプラもっていないくて」

ガンブレ学園の生徒、そしてここまでのガンプラバトルへの興味。てつきりガンプラの一つでもあるかと思っただがもっていないようだ。

「私、子供のころからガンダムが好きで。自分もモビルスーツに乗ってみたいなんて願望があったのですが……そこでガンプラビルダーの存在を知って。私も自分だけの機体で遊びたいって夢をもって！ そのためにガンブレ学園に入学したのです！」

「じゃあ、作ってみればいいじゃん」

「いや、その……」

これまた人差し指同士をつんつんさせる。

「私なんかガンブラを作って皆さんと同じような場に立つのは……少しおこがましいというか、立場をわきまえろというか……」

天真爛漫かつテンションが高い。

スキンシップも割と気にせず取ってきた割には変なところで謙虚な子であった。

言い方が尖りすぎているが、滑らかに言えば、自分なんかガンブラ造りが出来るのだろうかと不安に思っているのだろう。

情けないガンブラを作って恥をかくだけではないだろうか。自分がガンブラバトルの世界に泥を塗るような真似をしちやうのではないかと。

謙虚というか臆病なところだ。

「関係ないっ！」

シヨウタはサクラの両肩を掴む。

「ひゃあっ!」

「ガンブラの世界は来るもの拒まずだぜ！ 特にお前のようにガンダムが大好きな奴は大歓迎！ ただ見てるだけなんて勿体ないぜ！」

「え、えつと、あの……」

シヨウタは目の前にいる少女に少しヒカリの面影を感じたのだから。

年下の後輩で可愛い弟分……いや、女の子だから妹分という方が正しいか。

シヨウタは年下の少女に、遠慮せずに遊びに来いよと猫なで声で誘いをかける。いや、むしろ逃がしはしないと少女の肩をガツシリ掴んでいた。ガンダムアシユタロンのアトミックシザーも顔負けな握力だ。

「シヨウタ、その子怯えてる」

さすがに怯えてるのがわかったのでヒカリが助けに入った。

「よっしや！　せつかくだし今から作らないか!?　歓迎会もちょうどいい区切りだし、今からガンプラ造りの時間に入っても！」

ガンプラバトルも随分と楽しんだ。

あと1時間くらい時間もある。ガンプラビルダーの楽しみはガンプラを作ることには価値がある。

新しいガンプラの構成や自身のガンプラの武器の開発。今からそんな時間を設けようというシヨウタの発案には皆が賛成した。

「えつと……」

「一緒に作ろう?」

ツキヨもサクラに誘いをかけた。

「……はい！」

ここまで善意的な誘いをかけられ歓迎されている。

サクラの胸の中で過ぎっていた不安も一気に消え去ったようだ。

「私の事はサクラとお呼びください！」

改めて自己紹介もしておき、後輩らしく気軽に呼んでほしいと口にした。

……

一同は広場の隅っこへと移動し、それぞれガンプラの制作にかかりはじめる。

「そういえば、お前は何を作りたいんだ」

「えつと、それはですね……」

恥ずかしいのか少し戸惑っている。

……彼女の持つ手提げ袋に少しだが膨らみがある。

シヨウタはその袋の膨らみ方からして、その袋の中には何があるのかを瞬時に理解した。

ガンプラの箱だ。

シヨウタはテーブルに置いてあった手提げ袋から問答無用でガン

プラの箱を引き抜いた。

「ほほう、これか」

出てきたガンプラはファルシアであった。

ファルシアは機動戦士ガンダムA.G.Eで登場するモビルスーツ。アニメ本編では初めてビット兵器を使用した機体である。

当時は可愛すぎる見た目に衝撃を受けた視聴者も多かったとか何とか。見た目が女の子のイメージのようなモビルスーツはノーベルガンダム以来か。

いや、あれはモビルスーツじゃなくてモビルファイターだから、モビルスーツとして加算していいかは謎だけど。

現にヒカリも箱を興味良さに眺めている。

こういう可愛いモビルスーツも存在するのかと少々驚いてもいるようだ。

「どんな機体を作りたいんだ?」

「えつと……このような機体を」

ガンプラの箱が入っていた手提げ袋の中には、別でスケッチブックが入っていた。

スケッチブックを開くと、彼女だけのオリジナルファルシアのデザインや武器の発案などが綺麗なイラストで描かれている。

「あの、どうですかね?」

不安げな表情でスケッチブックを眺めるシヨウタとツキヨをのぞき込む。

「面白いじゃねーか! 作り甲斐があるぜ!」

「すごく可愛いわ」

シヨウタとツキヨもスケッチブックに描かれていたデザインにはなかなかの好感触。

それにほつとしたサクラの表情にも笑顔が戻る。

「んじゃあ、さっそく作ってみるか」

「作り方は私が教えるね」

シヨウタは初心者には難しいフルスクラッチの武器の作成とそのやり方。

素体としての作り方をツキヨが手取り足取り教える形となった。

(……俺も何か作れないかな?)

ヒカリもサンダーボルトガンダムを眺めて呟いた。

自分にももう少し。

自分の手でコイツに手を加えてやれないかと。

.....

40分後。

「出来たっ!」

「仕上げも完璧」

シヨウタとツキヨが自分の事のように嬉し気な声を上げる。

ようやく完成したようだ。

コミネサクラが数年の間、実現を夢見ていたオリジナルデザインのファルシア。

その姿はようやくお披露目される。

「わあああ……!」

自分だけのファルシアの実現。

そして自分がガンプラを作ったという事実。

その喜びで思わず笑顔があふれる。

嬉しさのあまり涙も流してしまふほどに。

彼女がデザインしたオリジナルのこの機体の名前はライラックファルシア。

まずピンク統一だったファルシアのカラーは薄い紫のようなカ

ラーリングに。

武器は通常のファルシア同様、胸から放出されるビーム砲に数基のビット兵器。

そして彼女のファルシアにだけ追加されているオリジナル兵器。

ファルシアといえば、足元にあるお立ち台。

元々は機動力の低いファルシアの問題点を解決させるために追加されているベースである。

そのベースを……足ではなくバックパックのように装着。

しかも特徴的なのはそれだけじゃない。

なんとこのお立ち台そのものも巨大なビットとして使用できる。

マザーファンネルに近い立ち位置となったファルシアベースは、ビーム刃を形成して相手に襲撃をかける装備に。ラフレシアのバグに近い装備と言えはわかりやすいだろうか。

「ありがとうございます！ このお礼はいつか必ず……！」

「いいんだよ、その笑顔だけで充分ご褒美だぜ」

そんなに喜んでもらえたなら作った甲斐がある。

シヨウタもツキヨも喜んでいた。

「どうよ、お前も俺たちのところに来ないか？」

ガン普拉を楽しむため、うちのグループに遊びに来ないかと彼女を誘う。

「……ガンブレ学園の事、少しは知ってると思うしさ」

サクラも知っていた。

1週間も学園にいれば、その実態は嫌でも思い知ることになる。パーツを奪い合い、強者だけが生き残る。

そんな本物の戦場のような場所であるということ。

「うちに来いよ！ 毎日ガン普拉楽しめるぜ！」

「本当ですか！」

サクラの目が輝く。

楽しめる。毎日ガンプラで遊ばせてくれる。

これには彼女も大喜びだ。

「おいおいシヨウタ。歓迎するのは俺たちも賛成だが、毎日遊べるっていうのは少しばかり語弊があるぜ？」

「そうそう、俺たちにはスペースがないんだぞ？」

「あつ、そうだった！」

そこで痛恨的なことを思い出す。

そうだ、今の自分たちにはガンプラバトルを行うためのスペースがない。

市民ホールも頻繁に貸し切りが出来るわけじゃない。それにどこ
の施設も基本的には使用中のため、こうしてみんなで集まる機会も減
少する。

学園にも集まれるようなスペースが見つかる気配がない。少なく
とも、風紀委員の目が黒いうちにはほぼ不可能だろう。

「くうく……せめて、場所があれば」

「あ、あの〜」

サクラは小さく手を上げる。

「ガンプラバトルをする場所が欲しいんですか？」

「ああ、そうだが」

「……よろしかったら、うちにあるバトルスペース使います？」

一同の目が開く。

今、ものすごく救われるような言葉をこの子は口にしたような？

「えつと、今なんて？」

「よろしければ私の家のバトルスペースをお使いに……自分の家、小さな中華料理店なんですけど、料理を待ってる間の暇つぶしに、ビリヤードとガンプラのバトルスペースを設けているんですよ」

照れくさそうに笑いながら、サクラは口にする。

「まあ、ビリヤードの方は近くにレジャー施設があるから滅多に人が来ないし、バトルスペースも別の場所があるしで……とまあ、このようにあまり人も来ないから、よろしければ皆さんでお使いに」

「ぜひともお願いいたしまする!!」

シヨウタはその場にて土下座でお願いした。

見事なまでに綺麗に鮮やかな土下座であった。

「本当にいいのか!？」

「助かる!」

「お願いします! ぜひともお願いしますっ!」

「皆さんがよろしければ……ただ、一度お父さんと相談してからですが」

「!!「よっしやあああああッ!!!」!!」

全員一斉にガッツポーズ。

「またガンプラで楽しめる……!」

ツキヨも嬉しそうに表情を浮かべる。

「ありがとう、サクラ」

ヒカリもすかさずお礼を挟んだ。本来ならリーダーである彼がすべきであるが、メンバーたちに胴上げをされているあの状況ではそれは叶わない。

「いえ、あははは……」

あんなに喜ばれるとは思っていなかった。

サクラは少し戸惑いながら照れ笑いをしていた。

.....
市民ホールバトルスペース外。

「なかなか盛り上がってるじゃないか」

フードを被り、マスクをつけた男子生徒が一人。

市民ホールから聞こえてくる歓声に耳を傾けている。

「まあ、今のうちに楽しんでろ」

その歓声を背に、男は立ち去っていく。

「お母さんっ！ 僕のガンプラが突然ドカーンって……！」

「うわああああん！ 僕のガンプラが粉々あつ!!」

「大事にしてたんだよ！ 僕、ガンプラに何もしてないもん！ いきなり壊れたんだもん!!」

幼稚園児か小学生くらいの子供たちの鳴き声、叫び声。

聞いてて胸を痛めるような声が一緒に聞こえてくる。

「……ひひっ」

その声を耳にした男は……笑みを浮かべていた。

11話 「新しいバトルスペース」

後日、ガンブレ学園の昼休みにて。

ヒカリ、シヨウタ、ツキヨの3人は朝のホームルーム前に屋上へと集結していた。

この時間なら屋上には誰もいない。パーツ狩りを行う高学年の存在もないため、その時間帯を狙って集合する。

そう、3人がこの場へ集結した理由はただ一つ。

「例の件ですが……」

3人以外にももう一人生徒がいる。

コミネサクラ。

先日、シヨウタのグループに入った新入生だ。

3人が彼女から待っている言葉。それはただ一つ。

「OK出ました!!」

「よっしゃアツ！」

サクラの実家である小さな中華料理店。そこには料理が出る前までの娯楽として、ガンプラバトルを行うための自家製バトルスペースがあるというのだ。

ここ最近はお客の出も悪いから使ってもいいかと、昨日の歓迎会の後に親と相談したようだ。

その結果、無事に許可は下りたようである。

これでシヨウタのグループも無事、放課後にガンプラバトルを行うための遊び場が出来たというわけである。

「よかったね」

「うん、よかった」

ヒカリとツキヨも喜んだ。

これではらくはパーツ狩り上級生や風紀委員の目も気にするこ

となくバトルを行える。

「ただし！・ひとつ条件があります！」

この流れ、やはりタダでは貸せないという事か。

学園の生徒たちが満足いくまでにガンプラバトルやガンプラ制作を楽しむとなれば、当然長時間はその場所を借りることになる。少なくとも結果的に占領することになるのだ。

となれば条件が出るのも当然か。

「来たときにでもいいのでうちの店の料理を食べてほしいとのことです！ すなわち、レンタル料ってことですね」

レンタル料代わりに中華料理店として利用していただきたいとのことだった。

これが交換条件である。

「おう、いいぜ！ たらふく頂いてやるよ！」

それくらいの条件なら大丈夫だ。

サクラの話では彼女の店の料理はどれも1000円を超えることはないリーズナブルな値段の料理ばかり。その料理一品だけで長時間バトルスペースを貸してくれるというのなら太っ腹もいいところである。

何度か利用してくれるだけでいいという条件に一同は当然賛同する。

「じゃあ、早速放課後に向かってみる？」

ヒカリも自分たちの居場所が出来たことに喜んでいるようだ。

「おう！ 勿論だ！」

善は急げである。

今日の授業がすべて終わったら早速サクラの親父さんが経営している中華料理屋に向かうとしよう。メンバーの何人に連絡を入れて、早速新しいバトルスペースが出来た事への祝勝祝いだ。

「……了解つと」

そんな4人の様子を遠目で見ている男子生徒の気配。

「あつという間にバラしてやるよ」

壊し屋と呼ばれた生徒。何者かに雇われた少年は笑み浮かべてその場を後にした。放課後の仕事に備えて早速準備をしなくては。

『カナタヒカリにアマナツキヨ、そしてサクマシヨウタ。奴らのガンプラを木っ端微塵に破壊してしまえ』

破壊するのはガンプラだけというのは少しばかり生温い気がする。

あの人物は相当キレていた。その3人の存在が非常に気に入らない様子だった。

この男はそう分析している。

となれば……ガンプラ以外にも、グループや居場所もぶっ壊してしまえば報酬にボーナスがつくのではないのだろうか。

想像するだけでニヤニヤが止まらない。

壊し屋の男は放課後の惨事を楽しみにしながらその場を後にした。

.....

放課後。

商店街の大通りから少し外れた小道にある小さな中華料理店、その名は桜坂。

なんで中華料理店なのに日本語の店名にしたのかとツツコミを入れたくなるが、そんな野暮なツツコミはスルーしちゃうことにして一同は店内へ。

「へい、らっつっしやい！ 待ってたよ！」

お店の中に入ると頭にタオルを巻いた少しイカつい雰囲気のお兄さんがお出迎えをする。

この人がサクラの親父さんだそう。ドスの利いた声から、そういった仕事柄の人なのかと勘違いしてしまいそうだが、サクラ曰く普通に優しいお父さんだとのこと。

「本当にありがとうございます！ バトルスペースを貸してくれて！」

グループを代表してシヨウタがお礼を言う。

「バトルスペースは綺麗にしといたから！ 好きに使ってくれい！」
「よっしゃ！ お前ら行くぜえ！」

シヨウタ達は朝通勤前の駅のラッシュアワーも顔負けの勢いでお店の奥にあるバトルスペースへと突入していった。

「あつ、シヨウタ。レンタル料」

「はっはっは！ 大丈夫大丈夫、いっぱい遊んだ後にでも晩飯代わりで！」

心の広いおやつさんで助かった。

「ヒカリも行く？」

「あ、いや、ちよつと何か食べてから行く。話したいこともあるし」

少し用事があるのでここに残ると一言。

「じゃあ、行こう。サクラ」

「はい！ ご指導のほどお願いするっす！」

サクラとツキヨも二人仲良くバトルスペースへと向かっていった。

「ラーメン一つお願いします」

「あいよー」

お腹が空いているのは確かである。腹が減っては戦は出来ぬというし、体を動かす前に栄養補給だ。

「……本当にありがとうございます。場所を貸してくれて」

「いいんだよ。うちのサクラが世話になったみたいだから！ そのお礼つてことさ！ まつ、このお店ここ最近お客さんが入らないから

客寄せのためって寸法もあるんだがな！」

サクラの親父さんは大笑いしている。

なんというかサクラのお父さんというにはイメージがかなりかけ離れている気がする。こっちはサクラと似てるところはテンションの高いところだが、豪快なところとか似通っていない場所がほとんどである。

もしや、サクラは母親似なのだろうか。

ちなみにサクラの母親は近くの本屋で働いているらしい。このお店の経営が少し厳しいみたいで稼ぎに向かっているようだ。

「別に気を遣わなくてもいいんだよ？ 遊んできても」

「いえ、お腹が空いてるのは事実ですし、それにちやんとお礼をしたくて」

ショウタはテンションが上がると肝心なことを忘れることも多かった。

中学生時代になってからはショウタの代わりにヒカリがお礼をしたりすることが多かったのだ。

「ははっ！ 出来た子だねえ！ そんな良く出来た学生さんにはおまけしてやろう！」

テーブルの上にチャーシューとメンマが普通よりも多くトッピングされたラーメンが置かれた。

豚骨の良い匂いがする。さつきまで空腹だったお腹も悲鳴を上げ始め、早く食べると体に鞭を入れ始める。

「いただきます」

ラーメンを静かにすすった。

美味い。

さっぱりしてるけど濃厚な味。チャーシューも醤油がしみ込んで箸がすすむ。

とにかく美味しい。

レポーターでも何でもないので、美味しい以外に言葉が見つからないのはご愛嬌。

「美味しいです」

「そうかい！ それはよかった！」

……しかし同時に思う。

これだけ美味しいラーメンにガンプラのバトルスペースとかあるのに、どうして客の出入りが少ないんだろう。

サクラとその親父さんが言うにもここ最近の客の入りはかなり悪いと聞いている。

「……客の入りが少ないの、やっぱり気になるかい？」

「いえ、そういうわけでは」

「隠さなくていいんだよ。表情に出てるって」

どうやら自分の視線が店内の様子を眺めるように動いていたために察してしまったようだ。

ヒカリは少しばかり失礼なことをしてしまった気分になってしまった。

「実はな、このお店でもアンタの学園の生徒が入り浸ることが多い時期があったね。パーツ狩りとかやって追い返してたんだよ。それからは客の入りが少し悪くなってな。営業妨害だから辞めろって言っただけど、そいつら全然どく気配が見えなくてなあ」

煙草を吸い、新聞の競馬情報を眺めながらラジオの電源を入れる。投票したレースが今から始まるようである。

「いつそのことバトルスペースを畳むかって思ったんだけどよ。その時にうちの常連のお坊ちゃんがガンプラバトルでそいつらを追い返してくれたんだよ」

「お坊ちゃん？」

「ああ、ちよつと離れたところに住んでるお金持ちみたいなんだが、執事のおじさんと良くうちのお店に遊びに来るんだよ。確か、去年あたりでガンブレ学園に入ったんだっけか？」

「ガンブレ学園の生徒の誰かがここを利用して居るのか。」

ラーメンをすすりながら親父さんの話に耳を傾ける。

「そいつ、パーツ狩りを見ていて快くないって言って、パーツ狩りの生徒を片っ端から追い返してくれたんだよ。本当、あの子には感謝してるよ」

それ以降はパーツ狩りを行う生徒は一切ここへ寄らなくなったようである。

パーツ狩りを行う非道な輩を追い返したというお坊ちゃん。

一体どのような生徒なのか是非一度会ってみたいものである。

しかもパーツ狩りを得意とする上級生を相手に一人で挑んだように見える。それで追い返す発言ができるほどの圧勝を飾ってるとなれば結構な腕の持ち主であることも伺える。

「だが、そこから更に客の入りが悪くなつてなあく。たぶん、追い出された生徒が腹いせに悪評を広めたんだろうな。全く、往生際が悪いつたらありやしないぜ。おかげでうちに来るのは商店街の集まりで仲良くさせてもらつてる爺さん婆さんと友人くらいになつちまったよ」

それで客の入りが悪くなったのか。それでもバトルスペースを開けたままなのは、その常連のおぼっちゃまの心からのお願いだそうさ。

「とまあ、そういうわけだから、お店のために御贔屓のほどを頼むぜ？」

「正直な店長さんですね」

「はっは！ 兄ちゃん程じゃないよ！」

ラーメンも食べ終わり、ラーメン代をしっかりと支払う。

今日のバトルスペースのレンタル代だ。

「じゃあ、早速」

「誰なんだ！」

バトルスペースから声が聞こえてくる。

この声はシヨウタの声だ。

「お前一体何をしに来やがった！」

何か騒ぎが起きている。

ヒカリは慌てて店の奥へと向かっていった。

「俺の仲間のガンブラに何をしようとしやがった！」

……シヨウタが一人の生徒に向かって怒鳴っている。

マスクとフードで素顔を隠したガンブレ学園の制服を着た少年。

怪しげな男に向かってシヨウタは怒りを露わにしていた。

12話 「戦慄のキラーマシン（前編）」

数分前。中華料理屋「桜坂」前にて。

「よっし集まったな！」

約束通りの集合時間まで時間は遡る。

一同は学校が終わってすぐに現地集合とした。新しいバトルスペースでバトル三昧に洒落込もうというシヨウタの意見に賛同したメンバーが集結。

その数は15人にも渡った。

こんな大人数で押しかけても大丈夫なのだろうかというヒカリやツキヨの不安など目もくれず、シヨウタは話を進めている。

「ああ、あとそれと……サクラと同じ新入生も何人が連れてきたぜ。学園のシステムに痛い目にあわされた奴らだ」

シヨウタとその仲間はずり狩りにあつて痛い目を見た新入生たちにも何人か声をかけていた。

純粋にガン普拉を楽しみたい人達。その気持ちを持つものだけを集め、楽しいガン普拉ライフをエンジョイさせようという願いを込めて。

「んじや、入るとするか！」

一同は中華料理店の看板をくぐる。

（ちよろいな）

しかし、その中に紛れ込んでいたのだ。

楽しいガン普拉ライフをエンジョイしようとしている新入生たち、そして在学生達の敵である存在……はずり狩りよりもタチの悪い男が。

カナタヒカリ。アマナツキヨ。サクマシヨウタ。

そして、その3人が身を隠しているグループ。大量の報酬を得るために全てをぶっ壊そうとする悪魔の壊し屋。その男は素顔を隠し、新入生と嘘をついて一同に紛れ込んだのである。

侵入は見事に成功。あとはゆっくり見図るだけだ。

依頼された奴らのガンプラを壊すタイミングを。

完膚なきまでに破壊してやるつもりだ。

(ん、確かここって……)

壊し屋の男はこの中華料理店の名前に見覚えがあった。

ここは確か、パーツ狩りの連中のたまり場だった場所だ。

謎のガンプラビルダーが現れてパーツ狩りの連中は追い出されて、ほぼ出禁のような扱いを受けて以降は近づかない生徒がほとんどだという。

(まあいいか。俺はここへ来たことないし)

咎められる理由もないし、恐れる理由もない。

壊し屋は後ろでショウタの挨拶が終わるのを待つ。簡素なお礼と挨拶が完了すると、一同は雪崩れ込むように奥部屋のバトルスペースへと入っていく。

小さく寂れたた中華料理屋のお店におまけとして置いてあるスペースには中々広く、出来もよろしい。15人という人数も割と余裕で入れるくらいのスペースである。

もうすぐガンプラバトルがスタートする。

この連中の話によれば、グループのメンバーのみで行うスクランブルとやらがあるそうだ。タイミングを待てば、そこには一斉にガンプラが集結することになるだろう。

そこには間違いなく数体のターゲットも現れる。

その瞬間、欠片も残さずにぶっ壊すことにしよう。

依頼通り、そしてボーナスなどにも狙いをつけて全滅を図る。壊し

屋の頭の中で膨らむスケジュール。

思わずヨダレが出てしまいそうである。

「んじゃ、とつとと始めるか!」

シヨウタの合図とともに何体ものガンプラがフィールドに出現する。

「それじゃあ、サクラも行ってみるか!」

「はい!」

シヨウタの呼びかけに答え、サクラはライラックフアルシアを取り出した。

気のせいか分からないが昨日よりも綺麗になっている気がする。帰った後にも磨きまくったのだろうか?

それくらいガンプラを大切にしていることにツキヨが気づく。

シヨウタも明らかな変化に気づいたようであり、思わず笑みを浮かべていた。

(丁度いい)

壊し屋はそつとサクラへと近づいていく。

「あの、すみません。そのガンプラ、少し見せてもらっていいですか?」

「え、どうしてですか?」

「なんか、関節がおかしい気がします。確認を」

関節がおかしい? そんなもの嘘に決まっている。

この空間とグループをぶつ壊すのなら何か一手打っておいた方がスムーズに事も進む。その協力者として、この紫色のフアルシアを利用させてもらうことにしよう。

細工。少しばかり細工をさせてもらう。

なに、そんなに悪魔じみた細工を施そうというわけではない。

せいぜい、《バトルステージをぶつ飛ばす爆弾》あたりに姿を変え

てもらおうという魂胆っただけだ。それくらいの手を打っておいた方が仕事もあつという間に終わる。

壊し屋の夢が続く。

そう、この壊し屋は……ガンプラを壊すための細工に関してはプロ級の腕を持つ。

先日、市民ホールにて起きた連続ガンプラ破壊。多くの小学生や幼稚園児、子供たちが大泣きしていたあの事件に関与していたのはこの男だ。

子供が余所見をしている間にガンプラに近づき細工。

その後は仕掛けた細工が設定した時間に発動。あつという間に内側から吹っ飛ぶように爆発する仕組みだ。

このファルシアには昨日、子供たちに仕掛けた細工よりはレベルが数倍も違うものを仕掛けさせてもらおう。

バトルスペースを消滅させるほどの人間爆弾へと……！

「ええ、どこがおかしいんすか？」

「ほら、ここのあたりとか」

ファルシアに壊し屋は手を伸ばした。

「待って」

しかし、壊し屋の腕はぴたりと止まる。

止められた。何者かに。

壊し屋は声の下方向へとそつと顔を向ける。

小柄の少女。ガンブレ学園の2学年に所属する飛び級入学の女の子。

アマナツキヨ。自分が依頼されたターゲットの1人だ。

「……その機体には何もおかしところはないわ」

「ええ、そうですね?」

一度、ファルシアに顔を近づけじつと見つめる。見たフリだ。あくまで、おかしいものがあるかどうかを確認するフリ。

ビルダーとしての能力は高いと依頼人からは情報をもらっている。戦闘力の高い、見事な完成度のガンπραを作った人物となれば、こういったことに関しては鋭いか。

「ああ、本当だ。すみません、気のせいでした」
頭を掻きながら申し訳なさそうに笑う。

仕方ない。
ならば、スクランブルとやらで直接叩くことにしよう。

「……それと一つ」

ツキヨはマスクと帽子で素顔を隠す男を指さす。

「あなた、本当に新入生?」

壊し屋の背筋が凍る。

「な、なにを言ってるんだ? 俺は本当に新入生で……」

「あなたと同じような人、似たような声をした人を見たことがある?」
見たことがある?

似たような声をしている?

壊し屋は更に息を呑む。

「数か月前、交流エリアで沢山のガンπραが欠片も残さず粉碎された事件があった。その事件の犯人の姿と顔、そして声は覚えている」
交流エリア。そこでガンπρα造りを行っていたツキヨのもとで起きた事件。

パーツ狩りを行う生徒、それとは全く関係のない被害者の生徒たち。

その一同が一体のガンプラビルダーによって圧倒された。
その姿と顔、そして声をツキヨは覚えているという。

「まさか、俺だというんですか?」

「そうとは言っていない……でも、本当にそうでないなら、証拠に顔を見
せてほしい」

「……!」

壊し屋は下を向いた。

「誰だ、テメエは!」

シヨウタはツキヨの声に過剰なまでの反応を示した壊し屋に向
かって激昂した。

一同から注目が集まる。

何故か数分ほど遅れて入ってきたヒカリも慌てて現場へと駆け付
ける。

「お前は一体誰なんだ!」

「……ちっ」

壊し屋はいまも口を閉じるだけ。

「……ウカジコウヤ。だよね?」

ツキヨはその名を口にした。

誤算だった。彼にとっては大誤算だった。

自分の起こしたというその過去の騒動は、時間が経てばその他の出
来事に埋もれてしまう程度の規模の事。自分が顔を出してしまった
のはその時だけで、その顔を見てしまったのも現場にいた人物たちく
らいである。

だが、彼女はどうかやら現場にいたようだ。

一斉にガンプラ粛清を行った壊し屋の姿を。

「……まあ、バレちゃったら仕方ねえか」

認めた。

一斉に生徒たちは壊し屋ウカジから距離を取る。

サクラも自身のガンプラであるライラックファルシアを慌てて自分の後ろに隠し、自分自身もショウタの後ろへと隠れた。

「今、ファルシアに近づいたのは」

「なに、ちよいとばかり協力してもらおうと思ってな……バトルスペース一つぶっ飛ばすくらい、ボンツってなってもらうためによ」
自身のやろうとしたことも壊し屋ウカジは次々と白状していく。

「しかしお前らも馬鹿だよ。密かに終わらせてやろうと一手打ってやったのに台無しだぜ……おかげで一方的に蹂躪する羽目になる」

バトルステージの電子モニターにウカジが触れる。

脱出不可。

バトルフィールドに出現したガンプラ達は全員離脱することが不可能になった。

「な、なんで!?!」

「お前ら纏めて面倒見てやるよ」

壊し屋ウカジは自分の機体をセットする。

ガンダムグシオン。巨大なハンマーを手に取った、ずんぐりむっくらな機体。やや大型の機体である。

「それじゃあ、粉碎」

ガンダムグシオンはフィールドに現れているガンプラ達次々と襲っていく。

「なんだよ、こいつ!?!」

「固すぎる!!」

厚い装甲を持つガンダムグシオン。しかも原作を準拠に作っているのかビーム系をほとんど無効とする装甲となっており、徹甲弾やバズーカ砲も耐えきる重装甲。

それだけじゃない。その大柄な体から放たれるパワー。ガンπρα達がグシオンの振り回すハンマーの餌食になっていく。

「なんでガンπραを外せないんだ!？」

ガンπραを離脱させることが出来ない。まるで牢獄のようにバトルフィールドに閉じ込められている。

そうだ。皆がショウタの方を見ている間にこっそりバトルフィールドのシステムを改造したのである。神がかりなハッキング能力と改竄能力により、このバトルフィールドは一度戦場に入ると破壊されるまでは外に出られない仕様へ。

フィールドを彷徨う数体の機体が木っ端微塵に消し飛んでいく。

「やめろ、テメエー！」

「おい、いいのかよ」

ウカジは近寄ってくるショウタを睨む。

「今、バトル中なんだぜ？ その最中のビルダーに手を出すことは学園のタブーだぜ。バトルフィールドにはガンπραを操縦するビルダーの映像も残るんだから、お前が俺に手を出してしまえば風紀委員の極刑の対象になっちまうな？」

「ぐっ……！」

ショウタは一瞬だが止まる。

いや、だがダメだ。

ショウタは壊し屋の暴虐に耐えきれず、すぐにでもゲーム中のウカジに殴りかかる勢いだ。

自分はどうなってもいい。仲間のことを放っておけるわけがない。そんな人物だということをヒカリは分かっている。

「ダメだ、ショウター！」

ヒカリは声を上げる。

「止めてほしいか？」

ウカジの言葉に一斉が制止する。

「ただし、条件がある」

静かにウカジの指がヒカリの方を向く。

「そこのお前、俺とサシで戦え。お前が勝ったら止めてやるよ」

壊し屋の殺害予告が向けられる。

最初のターゲットに選ばれたのは……初心者であるヒカリであった。

13話 「戦慄のキラーマシン（後編）」

戦場に並ぶ2体のガンプラ。

ヒカリのサンダーボルトガンダム。

壊し屋ウカジのガンダムグシオン。

突如挑まれた勝負。

「わかってるな？」

「ああ……」

話は数分前にさかのぼる。

……

壊し屋ウカジはグループの中に紛れ込み、バトルフィールドのシステムを細工したのちに一斉処刑を執行。誰にも、妨害や脱出を許さぬ一方的な殺戮が始まった。

しかし、この殺戮をやめてほしいのなら条件があるとウカジは口にする。

勝負をすること。

自分と一対一でサシの勝負をしろとのことだった。

そして彼が対戦相手に選んだのは……よりもよって初心者であるヒカリだったのだ。

「それ以外の条件は認めねえ。その代わり、お前が俺に勝ったら、大人しくここから出ていくし、お前らにも二度と手を出さない。ああ、たった今、壊しちまったガンプラの修理費もまとめて払ってやる。

どうだ？ 条件としては充分だとは思うが？」

「何が充分だ！」

ウカジに対しシヨウタは怒鳴る。

「ヒカリはまだ初心者なんだぞ！ それにお前の戦い方はかなり手慣れている……出来レースも良いところだ！ 俺は反対だ！」

「じゃあ、この処刑は続行だナ。フィールドにいる連中が俺を倒すことを祈るばかりだな」

バトルフィールドに組み込まれているシステムが彼によって細工をされている。その効果はガンプラの離脱を不可能にしているだけではなく……グシオン以外のガンプラの制御が制限されるというシステムまで組み込まれていたのだ。

マトモに動かせるのは武器だけ、という辛い状況である。

事実上、フィールドにいるガンプラではウカジのグシオンを仕留めることは出来ない。

数の差で有利だとしても、ろくに動けないのでは不可能だ。

「……俺が勝ったら、出ていくんだな？」

「待てヒカリ！ お前が出しゃばる必要は」

「黙ってるシヨウタ」

必死に止めるシヨウタを押しつけて、ウカジの元まで行く。

「本当に約束するんだな？」

「ああ、するサ」

一時的にガンダムグシオンの機動を停止する。

こちらの取引にヒカリ本人が乗ろうとしているのだ。こういった交渉はしっかりと面を向いてやらなくては失礼である。

ウカジはにやりと笑みを浮かべ、ヒカリと向き合う。

「バトルフィールドの細工は全部解除しておく、汚い戦法は一切なしの対一だ。俺が何か怪しい動きを見せたり、バトルフィールドに変なシステムが作動したらバトルを止めてもらって構わない。俺が不正をしたらその場で俺の負けでいい」

シヨウタにバトル条件の説明をする。

バトルフィールドに設定した制限システムは、話した通りすべて解

除した。

「ただし、それ以外のことで止めてみる。あと、俺が何の卑怯な手もしてないのに止めたその瞬間、妨害行為とみなしてお前らの負けだ」

同時に釘もさしておく。

お互いに卑怯な手も妨害も無し。最終確認に軽い脅しを加えておいた。

「どうだ？ 俺との勝負に乗るか乗らないか」

「ああ、乗ってやる。その代わり、俺が勝ったら本当に出て行けよ」

「何度も言わせるな。男に二言はねえヨ」

呆れたような声でウカジは返答する。

嘘をついているようには見えないが……過去今までに自分たちへ勝負を挑んだ上級生の事もある。信用していいかどうかは分からない。

だが、今ここで勝負を挑まなければフィールドにいる皆のガンブラが一掃される。

ならば、勝負を挑んだ方がまだ、可能性はある。

「ヒカリ、だめ……！」

ツキヨは彼を止めようとしていた。

「あの人の強さは今までのとは格が違う……！」

ツキヨは過去、その風景を見ていたからわかる。

たった一人でPARTY狩りを行う上級生たちのガンブラを粉碎。一機残らずスクラップのジャンクに変えてしまった悪魔のような強さである。

ヒカリとウカジ。その2人の経験の差は歴然。

今の彼では経験が足りなさすぎる。弱い者いじめをしてきた卑怯な奴らとは話が違う。

「……勝てないかどうかなんて分からないだろ」

ツキヨの静止を振り切る。

「こいつのやり方は気に入らない……ッ！」

勝負は決まった。

「じゃあ10分くらい時間よこせ。一対一用にシステムを設定してやる。その間にガンプラの最終設定でもしてろ」

細工の解除も含めて結構な時間のメンテナンスを行うという。

この先のことを左右する貴重な戦いだ。ウカジはヒカリに10分間という最後のチェツクの猶予を与えた。

……

そして今、2体のガンプラは戦場に並んでいる。

もうすぐバトルのゴングは慣らされる。

「もう一度だけ確認する。俺が勝ったらアンタはここから出て行って、俺たちには二度と手を出さない。それに壊れたガンプラも治すて」

「待て待て、俺は修理費を出すと言っただけだ。ガンプラを治すのは自分の手で頼む。後から元の形と全然違うなんて苦情出されたらたまったモンじゃねえしナ。それに、お前もわかっているな？」

グシオンのハンマーが勢いよく地面に下ろされる。

「お前が負けたら……お前の仲間たち全員のガンプラを俺に寄越す。いいな？」

「……」

ヒカリは後ろを見る。

背後には不安な表情を浮かべる一同の姿があった。

彼の行動は正しかったのかどうか。正直に言えば賢い選択ではなかったかもしれない。

そのフィールドにいたガンプラ達の犠牲で済むと考えれば、これ以上の被害を生むことはなかったと考えることもできる。赤の他人から見れば、彼の行動は火の元を広げただけの自爆行為と変わらない。

……しかし、あんな状況堪えられるはずもない。

ヒカリが止めにかからなければショウタは間違いなく暴力に走っても彼を止めようとした。そうなれば彼には重い処罰が下される。それはこの場にいる全員が望んでいないことでもある。だが、自分のガンプラが一方的に破壊されることも黙っていられるはずがない。……少しでも可能性があるのならという賭けだった。そして、その場にいた全員がヒカリに賭けたのである。誰も犠牲が生まれない結果を作ってくれることを信じて。

「ああ」

「じゃあ、始めるか」

スタートのカウン트가始まる。

3から2、2から1。そして。

カウン트가ゼロになる。

「ぶっ潰すー」

ガンダムグシオンがハンマー片手に全速前進。

(早いっ……!?)

慌ててサンダーボルトガンダムを後退させる。

ガンダムグシオンの体、その第一印象はガンダムを知らないヒカリからすれば、カエルのようなデブという感想だった。

そんなデブな体からは想像もできない加速力での接近に思わず声が出そうになる。

それだけじゃない。

サンダーボルトガンダムがいた場所に振り下ろされたハンマーが地面に巨大なクレーターを作り上げる。砕かれた地層の瓦礫が雨となって戦場に降り落ちる。

その見た目からは想像も容易い、いや想像以上のパワーまで見せつけられる。

「逃がすかよー！」

胸に仕込まれた内蔵のキャノン砲が、後退して隙を見せたサンダーボルトガンダムに発射される。

「ぐっ!？」

そこでようやくヒカリは声を上げた。

2発のキャノン砲がサンダーボルトガンダムの両肩に掠る。

命中すれば粉碎は免れない。致命傷は避けたとはいえ、万が一当たっていたならばという恐怖感が彼を更に焦らせる。

「だったら……!？」

エネルギーパックの残弾をすべて使って、ビームライフルを出力最大で発射する。

これだけの威力なら、そんな太つちよな体だろうと耐えきれぬわけがないと彼は踏んだのだ。

「無駄だ！ オルフエンズ世界のガンダムにビームは無価値なんだよ!!」

ビームはグシオンに命中するも、過剰なまでのナノラミネートアーマーが最大出力のビーム砲をいとも容易く弾いてしまう。

原作を意識しているのか。それともガンプラを壊すことを考えての装甲処理なのか。ビームは勿論、生半可な銃撃だろうとグシオンの本体には届かない。

「おらあッー！」

グシオンのハンマーが近づいて来る。

「……ッー！」

2連ビームライフルに装着されている巨大なシールドで身を庇う。

「チンケなんだよッー！」

だが、あれだけのパワーを見せたグシオンを前にシールドなんて無意味である。

2連ビームライフルとシールドは破壊される。彼の前では赤子の腕同然のアーム諸共粉々に。

「やっぱりダメだ……実力が違いすぎる！」

「ヒカリさん！」

シヨウタとサクラが声を上げる。

「呆気ねえな。まあ、こんなもんか」

腕も壊され、肩にもダメージを受けたため自由に振り回せなくなった。

グシオンの攻撃に耐え切れず、サンダーボルトガンダムはついに地面に伏せてしまう。

「負けられない……」

それでもサンダーボルトガンダムは立ち上がる。

「ここまで負けたら皆の居場所が……!」

自分が勝たなければ皆のガンプラを奪われてしまう。

それだけはダメだ。

やっと見つけた居場所。それが自分のせいではなくなるのだけは嫌だ。

しかし、戦力の差に絶望的な違いがあるのは彼も内心気づいていた。

実力の差が違い過ぎる。ガンプラの完成度も自分の機体と比べて相当なまでの差が。

「すぐ楽にしてやるよ」

グシオンのハンマーが再度振り下ろされようとしていた。

「お願いやめてー!」

声が響く。

……ツキヨの声だ。

「はあはあ……」

大声を上げるだけでも喘息になるほど病弱な彼女が大声を出した。
我慢できなくなったのだ。

「お願いだから……これ以上、彼をいじめないで」

「おい」

ハンマーを一度地面におろし、グシオンの目がツキヨの方に向けられる。

「反則以外でバトルを止めたらどうなるか、忘れたか？」

グシオンの赤いアイカメラが鋭く光る。刃物のように突き刺さる殺意の瞳は、ガンプラの操縦者であるウカジの瞳とシンクロしているようだった。

警告だ。

自身が怪しい動きを見せない限りはバトルを止めないという約束である。それを破れば、ヒカリの反則負けとみなすことを。

「……どうして」

ツキヨは震えている。

「どうして、それだけの技術を持つていながら、そんな酷いことを」

ウカジの実力も技術も本物だ。

ガンダムグシオンの完成度は自分たちにツキヨやシヨウタに及ぶほどのもの。隅から隅まで隙の無い仕上げで作られたグシオンはまさしく彼の実力の高さを物語っている。

それだけの實力を持ちながら、何故破壊を行うのか。

彼女にはそれが理解できない。

「酷いことだあ?」

バトルフィールド、そしてヒカリの勝利を願う皆のいるバトルエリアに響く。

「こんな酷いことが、この世界では当たり前なんだろうが! ええッ!」

ウカジの叫びが。

しかしなぜだろうか。

彼の声は壊すことを楽しむ愉快な声というには……どこか悲痛な叫びにも聞こえたのは。

「……簡単な事だろうよ。この世界では強者の生存が当たり前。弱い奴はしゃぶられて吸われて終わり。満足な戦いも出来やしねえ」

グシオンの瞳はどこか宙を見上げている。

ヴィジョンに映された青い空。

彼にはその空に……何かを映し出しているようだった。

「生き残るには、れつきとしたガンプラビルダーになるには強くなかつちやならねえ。こうして強いところを見せつけないとよお、自分を守れねえんだよ」

「だったらヒカリのように純粋にバトルを楽しんでいる奴を狙うことはないだろ！」

シヨウタの疑問がぶつけられる。

彼の言動からすれば、学園のルールを良く思っているわけでもなさそうだし、パーツ狩りを行っている上級生の事もひどく嫌っているように見える。

ならば、彼は自分たちのようなビルダーまで狙う必要はないはずだ。そこまでして無差別にガンプラを破壊しようとする意味があるというのだろうか。

「……簡単なことだ。ムカつくんだよ」

グシオンの瞳が次にサンダーボルトガンダムに向けられる。

「お前らみたいには叶えられもしない夢や理想だけで……ただ楽しみたいってだけで強くもないくせに足掻こうとするやつが苛立つんだよ……！」

グシオンのハンマーが振り上げられる。

とどめの一撃。最後の一撃を与えるつもりだ。

「ガンプラの世界は破壊と蹂躪！ この学園のルール！ それがこの

世界だ!!」

「……違う!!」

無理やりにでも動かして回避する。

グシオンの一撃を。

「破壊だけがガンプラじゃない……!」

「いつまで減らず口を叩きやがる!」

グシオンの胸のキャノン砲が発砲される。

まるで大地のうめき声。彼自身のうめき声のようにも聞こえる破音がバトルフィールドにこだまする。

次に直撃を受ければ致命傷は免れない。

迂闊に回避をすれば、再びそこをキャノン砲で狙われる。

こちらが反撃に一撃を入れようにも……あの装甲で弾かれて終わりだ。

そんな絶望的な状況の中、ヒカリがとった行動は。

しやがんだ。

サンダーボルトガンダムの姿勢を低くし、キャノン砲を自身の頭上で通過させる。

それこそ最大の間になる。

グシオンを操縦するウカジはもう一発のキャノン砲の装填を開始する。

「俺はそうは思わないッ……!」

サンダーボルトガンダムのボルテックブースターが響きを上げる。

彼の鼓動に反響するかのように、壊れたサンダーボルトガンダムの体を押し出していく。

「まだ動く余裕があったか……だが、無駄だ！」

接近して攻撃を仕掛けようとしても無駄だ。

この体にビームサーベルは全くの無意味。焼け石に水だ。

それ以外にこの装甲をぶち破るような高威力の武器は見受けられない。タツクルを仕掛けてパワー勝負を仕掛けようというのなら馬鹿以外の何者でもない。

想像以上のスピードだが、グシオンは迎え撃つ準備を始めている。

自身のグシオンの装甲の硬さに耐え切れず隙を見せたところでトドメを刺して終わり。ウカジは最後の処刑プランを執行する。

「ガンプラは楽しむものだって……」

背中の子ブームに装着されたシールドの先端がそつとグシオンに突き付けられる。

「そう教えてくれたのは皆だ!!」

ガンダムグシオンの装甲がはじけ飛ぶ。

何だ。何が起きた。

自身の作ったグシオンの装甲の硬さは一級品だ。爆発の原因は間違いない。ロケットランチャーであることには気づいているが……何故、自身のグシオンの装甲が耐えきれなかった。

あれくらいの威力なら余裕で耐えきれはす。

損傷原因をウカジは速攻で調べる。

「あいつ……!」

そこで気づく。

「装甲の隙間を狙いやがったな!」

隙間に直接ロケットランチャーを埋め込んだのだ。

フルアーマーガンダムのロケットランチャーはデブリに直接仕込み、爆破物の罫として利用することも可能だ。

その原理を使用して、グシオンの装甲の隙間にロケットランチャーを直接埋め込んだのだ。

絶大な火力。表からなら受け止められたが、内側からなら話は別

だ。

グシオンの胴体の骨組みが露わになる。

「そこを狙えば……」

「させるかよ!!」

サンダーボルトガンダムの腕に握られたビームサーベル。

その一撃を受けてたまるかと、ハンマーを持っていない方の腕でサンダーボルトガンダムの腕を握りしめる。

万力のようなパワーでもう片方の腕も粉々に砕いていく。

「今度こそ……!」

姿勢が不安定なためパワーは充分ではないが、これだけボロボロの機体なら事足りる。片方の腕だけでハンマーを振り下ろし、今度こそトドメをさす。

「まだッ!!」

背中の子アームがシールドをパーズする。

腕が手放したビームサーベルをサブアームでキャッチし、グシオンに向けて突き入れる!

「なっ……!」

グシオンに致命的なダメージが入る。

高出力のビームサーベルがグシオンのコックピットを貫いた。

バトル終了。

致命傷を受けたグシオンは力が抜けるかのように地面に倒れた。

「勝った……?」

ヒカリは佇んでいる。

「ヒカリイイッ!」

ヒカリの元に全員が近寄ってくる。

「よくやった! お前、本当によくやったぞ!」

「すごいっすよ！ あそこから勝つなんて！」

シヨウタからは必要以上に頭を掻きむしられ、サクラからは異常なまでに握手をせがまれている。

それどころか皆が一斉にヒカリに向かって蟻のように集まっていた。

「あ、あの、ヒカリが……」

ヒカリの腕だけが見える。

水を求める亡者のように震えていた。

助けに入りたくても、それだけの力がないツキヨはただオロオロと困り果てるだけだった。

「……負けた、か」

バトルフィールドの転がったグシオンを回収する。

「よりにもよって、平和主義の甘ちゃん達に、か」
破壊する。

勝利することだけにこだわって作ったグシオン。

「……はあ」

自分も彼等みたいにもう少し足掻く勇気があったなら。

ガンπραを楽しむことに全てを裂ける強い心があったなら。

自分ももしかしたら、

破壊だけの狂気に取り付かれなくても済んだ未来があったのだろうか。

ウカジはグシオンを握りしめたまま、一同の元へと向かう。

「……取り込み中のようだな。じゃあお前でいいわ」

ただ一人、手の空いていたツキヨの修理費とメモを渡す。

「約束だ。お前らには二度と手を出さない。修理費の釣りもいらねえよ。足りないっていうんなら、そのメモに書いておいたメアドに連絡

しな」

片腕を振って、その場をウカジは後にする。

「あ、あの……」

「久しぶりだぜ」

ウカジはそつと呟いた。

「こんなに、悔しいって思ったのは」

その言葉には満足と後悔。

2つの感情が入り混じった苦痛が伝わってきた。

「おつと、悪いな」

バトルエリアの入り口に誰かいたのかウカジはその人物とぶつかってしまふ。

「いえ、構いませんよ」

通り過ぎていったウカジに対し、気にしてないと一言だけ告げる。

「あれが……例の新生、ですか」

バトルエリアでその様子を見つめていた何者か。

ガンブレ学園の制服に身を通す何者かはじつとその視線を向けていた。

皆に賞賛され、干からびる寸前の、ヒカリカナタを。

14話 「アイドルはお転婆姉ちゃん」

後日、ガンプラ学園昼休み、多目的ホール裏にて。

「……はあっ!? しくじった!？」

密会のはずだというのに、そんなのお構いなしに女子生徒の叫び声が響いている。

報酬という名目の金額が入った茶封筒を片手に。

「ああ、だから前払いも返しておくよ。依頼を失敗したのなら、これを受け取る資格はねえからナ」

女子生徒の前に立つのは今も素顔を隠している壊し屋ウカジ。

受け取ったはずの前払い報酬を依頼人本人である彼女に突き返しているところだった。

「待ちなさいよ。一回負けたっただけで手を引くなんてこと」

「……その一回がでかかったんだよ」

女子生徒に背を向ける。

「おかげでズツタズタさ。俺の気分も心もナ」

歯ぎしり、そして拳を力強く閉じているために肉と筋肉が締め付ける音が聞こえてくる。

その音は彼の悲痛さをひどく感じさせるものだった。

心からの悔しさ、矛先がどこへ向けられているのかも定まっていな
い酷い苛立ち。

ウカジコウヤは激怒していた。

自身は敗北した。いや、決定的な部分で既に敗北していたという事
実に。

「そういうわけだ。他をあたりナ」

「待ってっついてるでしょ!」

女子生徒の呼びかけにも応えることなくその場を去っていくウカ

ジ。

その姿に女子生徒も次第に怒りを覚え始めていく。

「……私に逆らえばどうなるか分かって」

「お前らの追っかけでも雇って、俺を徹底的に潰してやるってか？」

足を止めウカジは彼女がその先に言おうとしたことを口にする。

この学園ではガン普拉バトル以外での暴力行為や権力を使つての排除は禁止されている。排除するのならガン普拉バトルを通じなければならぬ。

そのルールさえ守っていれば、集団で襲わせようとも、そこに至るまでに如何に汚い手段を使つていようとも問題ではない。すべての雌雄を決するのはガン普拉という存在なのだ。

この男はそれをわかっている。

しかし、ガン普拉バトルを通じての暴力にウカジは怯む様子を見せない。

「ああ、いいヨ。好きだけかかってきさせな」

ウカジは女子生徒へと見せつける。

「俺はもう負けねえヨ。誰にも、自分自身にもな」

自身の覚悟の現れを。

今まで隠してきた素顔。フードもマスクも取っ払い、壊し屋ウカジではなく、一人のガン普拉ビルダーであるウカジコウヤとしての素顔を。

狼のように強いくせ毛のショートカットに刃物のような鋭さを見せる赤いメッシュ。そのメッシュと共に見えるのはギラリとしている鋭い目つき。

真っ向からの敵意を送り付けていた。

ウカジは宣戦布告を正面から受け止めた。どんな方法を仕掛けようとも、今まで通り壊し屋としても、一人のガン普拉ビルダーとして

も相手をする。

それだけ言い残し、彼はその場を後にした。

「……まあ、いいわ。私の言うことを聞かない役立たずなんてコツチから願ひ下げ」

ウカジの背中を見ることすら不愉快になった謎の女子生徒は背を向ける。

「別の手を打つ」

スマートフォンを取り出した。

すでに通話ボタンは押されている。そこに表示されているのは……カナタヒカリ達を確実に抹消させるための新たな刺客の名前であった。

.....

ガンブレ学園。放課後。

「……」

ヒカリはいつも通りボーっとしている。

机で寝そべっている視線の先には相棒であるサンダーボルトガンダムがいる。ヒカリは相棒の頭を人差し指で軽く動かしながら考え事をしていた。

昨日のバトルの後、ボロボロになったサンダーボルトガンダムを自分の一貫として皆が修理をしてくれた。

自分が治すにはビルダーとしての能力が足りなさすぎる。複雑な壊れ方をしていたために、皆が腕を振るって治してくれたのだ。

皆の好意に関してはすごく嬉しかった。

……でも同時に複雑な心も抱いていたのだ。

サンダーボルトガンダムは自分の相棒だ。自分の相棒が傷ついて

いるというのに、自分は彼を治せないからという理由で他の人の手を使って治してもらった。

「今後もそうやって甘えるというのか？」

「今後も自分の機体は酷く傷つくことはあるかもしれない。なのに自分は指をくわえてみてるだけだというのか？」

「それに自分の腕の方もだ。」

「今回も自分の腕が未熟なために無理な戦いを相棒に強いてしまった。その罪悪感が今も自分の胸に焼き付いている。」

「……もつと頑張らないと」

サンダーボルトガンダムを目を見て、ヒカリはそう呟いた。

「ヒカリ君！ 今日も元気ツスね！」

友人があまりいなかったのだろうか。

同じクラスであるコミネサクラが、ぎくしゃくと緊張した姿で彼に声をかける。

「どう見せても元気には見えないだろうが、おそらくシヨウタあたりから、『アイツはブーツとしてる時が多いけど大抵元気だから気軽に声をかけちゃっていいぜ』的なアドバイスをしてくれていたのだろう。」

「その気遣いは本当ありがたいことではある。」

「でも今日ばかりは少しタイミングが悪い。今日は考え事をしていただけだから。」

「今日の放課後、空いてるツスか!？」

「……空いてるけど?」

「放課後に何かをする予定なのだろうか。」

「特に予定もないし、今日も彼女の実家である料理店桜坂へと向かう予定だった。たぶん、皆も集まっているだろうからバトルとかメンテナンスのアドバイスを聞きに行こうと。」

「実はシヨウウタさんから頼まれたんすよ。ヒカリが暇なら引つ張ってきてくれって」

シヨウウタからの頼み？

今日は何か用事があるのだろうか？

「いいよ」

「それじゃあ、一緒に行きましょう！」

初めての友人のコミュニケーションがうまくいったことに隠し切れない喜びを露わにしている。桜のような満開な笑みは見ていて心地いい気分になる。

彼の中で芽生えていた不安も少し拭われたような気分になった。

ヒカリは自身の相棒をバックの中にしまうと、サクラと共にシヨウウタがいるという体育館まで向かうことになった。

.....

数分後。サクラとヒカリは体育館へ到着。

「みんなーっ！ 今日も張り切っていくぜええっ!!」

ヒカリは困惑していた。

放課後の体育館はバトルエリアとしても活用されていたはず。体育館に連れてこられたのだから、何かバトルに関係する行事でも行うのかと思っていた。

ところがどっこい。

体育館にあったバトルフィールドはすべて撤去されている。

その代わり体育館にいるのは……数百人以上はいる生徒たち。

そして体育館の窓全てにはカーテンが閉められ辺りは真っ暗。真っ暗になった体育館をカラフルなスポットライトやフラッシュが照らしている。

そしてステージには……派手な衣装でキャピキャピな歌を熱唱しているアイドルがいる。

何がどうなっている？

ヒカリの困惑は熾烈を極めていた。

「あ、いたいた！」

会場に入ったサクラはヒカリが迷子にならないよう誘導しながら、シヨウタ達のいる観客席へと近づいていく。

「お、来たな！」

そこにはいつもバトルをエンジョイしているシヨウタのグループのメンバーに、そのリーダーであるシヨウタ本人。

……全員、カラフルな装飾が散りばめられた法被を身に纏い、両手にはビームサーベルを意識したようなサイリウムがある。

皆が立ち上がってヲタ芸とやらのダンスを披露している中、おそらく無理やり連れてこられたであろうツキヨが震えながら椅子に座ってサイリウムを振っている。

うむ、楽しんではいいるのだろうか観客たちの声が耳に響いて体に障っているのだろう。顔色の悪さからそれが伺える。

「あと2曲だ！ しつかりと気を引き締めろよ、お前ら！」

シヨウタの掛け声にグループの皆が雄たけびを上げる。

……あと2曲という単語を聞いた途端、ツキヨの体は真っ白になった。

無理をしなくていいのに。とヒカリはツキヨの背中を優しくさすっていた。

「しかしビックリですよ！ セーラさんの生ライブを見れるなんて！

ガンブレ学園の生徒って噂は本当だったんスね！」

「セーラ……？」

クエスチョンマークのジャングルが生い茂っている中、聞いたこともない名前にヒカリは混乱を極めていく。

「ネットライブで有名なガンプラアイドルつすよ！ 3年前くらいから活動を始めて、たくさんのファンを持つているんです！」

セーラ。巷では有名なネットアイドルのようだ。

動画サイトのチャンネルをメインに動いているようで、ガンプラは勿論ガンダムのメディアに広く顔を出しているオタクアイドルのようだ。

皆を引っ張っていくような、どこかボーイッシュかつ少年っぽい元気の良さがファンのハートを掴み、固定ファンをしっかりと持っている。

ちなみにシヨウタのグループ。

ガンプラバトルをエンジョイするグループであると同時に、ガンプラアイドルであるセーラのファンクラブでもあるようだ。

そんな有名なアイドルとやらが何故、この学園でライブを？

「聞いて驚くなかれ、セーラは何と、この学園では5位の成績を収めているのさ！」

なんと、彼女はガンプラバトルの腕の技術も高く成績優秀。この学園では5位という成績を収める天才肌のようだ。

なるほど、学園5位という記録も持っているとなつて、ガンブレ学園の生徒となればよいイメージアップに使える。こうして、皆の意欲を広めるためにライブを行つてるといふ事だろうか？

「ふうーん」

「相変わらず興味なさそうっすね……」

無理もない。何せ彼はアイドルのことなど微塵も興味ない。

というか音楽関連自体にそれといった興味がないうだ。普段聞いているのもお店で聞いて気になった洋楽をたまに耳にする程度である。

「ひっひっひ」

「何がおかしいのさ」

何故か笑みを浮かべるシヨウタを見る。

「いや、お前のその興味なさげな顔があとで驚くことになると思うと……って感じてな」

「??？」

ますます首をかしげるヒカリであった。

.....

数分後。ライブは終了した。

明るくなった会場。セーラが会場から去った後も観客席からは歓声が続いている。

ファンクラブの皆も熱狂。

そんな中、体力を使い切ったのかツキヨはエネルギーの尽きたサイリウムを持ったまま真っ白になっていた。

その姿はまるでフェイズシフト装甲がダウンし、機体の色が落ちたストライクのような姿であった。

うん、頑張った。

健気な彼女にますます好感が持ててしまう。

「よし、じゃあお前ら。いつもの場所に行つといてくれ」

「おうー！」

皆からの返事が聞こえ、一斉に会場を去っていく。

「じゃあお前ら、行くぞー！」

「[[[6]]]」

ヒカリとサクラ、そして真っ白なツキヨは3人同時に首を傾げた。

.....

会場からまだ声が聞こえてくる中。

今4人はなんと……

ガンプアアイドル・セーラの控室前に来ています！

「ちよつと！ 大丈夫なんスか!? 怒られたりしないんですか!？」

「まあ、見てなつて」

控室前に到着すると、警備員の男に声をかける。

……やけに親しげに話している。警備員のおじさんも不審者を見るような目から次第に柔らかい目つきになつていく。

数秒後、警備員のおじさんは快く道を開ける。

「さてと」

ノックを軽くした後、シヨウタは何の遠慮もなく控室に入る。

「あ、ちよつと!？」

サクラも慌てて彼を追う。ヒカリとツキヨもそれに合わせて控室の中に。

……控室の中にはステージ衣装のまま水を飲んでいるセーラの姿。

「あわわわ、本物……!!」

本物のネットアイドルを前にサクラは動揺を隠せない。

「……」

セーラはこちらをじつと見つめている。

次第に近づいて来る。

シヨウタとセーラの距離はかなり近くなる。

「よっ！ 相変わらず元気だな、シヨウ吉！」

「そっちなー！」

するとどうだろうか。

突然2人は気兼ねなくハイタッチを交わしたのだ。

「え……う？」

突然の事態にサクラは固まっている。

「ん、シヨウ吉……う？」

そんな中、ヒカリの顔つきが変わる。

その呼び方に何か既視感があったようだが。

「おおおー!!」

すると今度は目をキラキラさせながらセーラがヒカリの元へ。

「ヒカ坊じゃん！ 相変わらずボーっとしてるなー、お前っつ！」

ヒカりに抱き着いたかと思うと頭を鷲掴みにして撫でまわしてきた。

……自分より少し高いくらいの背丈。そしてこの対応。

その呼び方。

「もしかして、ヒビ姉？」

「イグザクトリー！」

親指を突き立て、セーラは満面の笑みで肯定する。

「え、え？ どういうことっスか？」

今もなお、サクラの困惑は止まらない。

「ああ……、ナノハ ヒビク。俺とシヨウウタの幼馴染……」

「ええええー！ーっツ!?!」

衝撃のカミングアウト。

サクラはあまりの衝撃に尻もちを付きそうになった。

「中学校の頃に引越したはずじゃ」

「ああー、うん。飛ばされた親についていったんだけど、向こうの職場とウマが合わなかったみたいで結局戻ってきたんだよ」

大笑いしながら笑い浮かべるセーラもとい、ヒビク。

この懐かしい姉御肌。ヒカリは懐かしい気分になる。

ナノハビク。自分が幼少期の頃、シヨウタ以外に彼を可愛がっていた年上の幼馴染がもう一人いたのだという。

それがこのボーイッシュな少女。ナノハビクなのである。

ビクはシヨウタの友人であり、彼とは幼稚園からの付きあいだったそうだ。

シヨウタと同じく面倒見の良い一面が強く、誰にでも気兼ねなく喋る人懐っこい性格の人だ。

まさしく、類は友を呼ぶ。

シヨウタの同族、というかコピーではないかと言えるぐらいに性格が一緒の彼女であった。

「髪も染めたの？」

小さい頃は天然茶髪のポニーテールだったはず。

だが今は金髪の長髪だ。大きなりボンも特徴的。

「ああ、これカツラだよ。オフの時はいつも通りと変わらんぜえ」
なるほど。

ヒカリはボンと腕を叩いた。

「ところでどうよく。ヒカ坊々？」

ポーズを取りながらヒカリに挑発するビク。

「数年ぶりにあった幼馴染の姉ちゃんは〜？ 綺麗になった？」

「前よりうるさくなった」

「ぐはあっ!!」

相変わらずオブラートに包まない言葉にビクは胸を押さえ倒れこむ。

「ふっ……さすがヒカ坊……相変わらず正直者だぜ。容赦がない……！」

ちなみに彼女は意外とハートが弱く打たれ弱い。

このように、ヒカリの容赦ない本音で毎回ハートがぶっ潰れるのがお約束であった。

久しぶりに再会した幼馴染。

お姉ちゃんのような立場である彼女とのコミュニケーションにヒカりは少し喜んでいた。

「……むー」

そんな中、ツキヨが少し不貞腐れているように見えた。頬を膨らませている。

……ヤキモチであった。

初めての友達であるヒカリには思い入れが強い。だから、友達がとられたような気分になって自然にそれが表情に出てしまったのだろう。12歳の少女らしい対応である。

「おおお！ この子たちが例の!?!」

すると今度はヒビクはツキヨとサクラの元へ。

「可愛い子たちじゃん！ このこのおくー！」

2人を抱きしめ、頬ずりを始める。

「あわわわわ……」

「セーラさんが間近に……間近に……!?!」

2人とも違う意味で緊張していた。

「二人とも名前は!?!」

「アマナツキヨ……」

「コミネ、サクラっす……!?!」

「じゃあ、ツッキーとサツキーだな！ よろしくー！」

……もう打ち解けやがった。

といっても一方的なような気もするが。

「ヒビ姉。気持ちはわかるがそろそろ行くぞ。次の仕事まで時間ない

んだしな」

「ああ、そうだった！」

2人から離れたヒビクは人差し指を天井に向ける。

「それじゃあ行くとしますか！」

高らかに彼女はそう宣言した。

「「?」」

ヒカリ達はまたしても首をかしげる一方であった。

15話 「熱狂的ファンサービス」

ライブ終了から数十分後。

中華料理店・桜坂、バトルフロアにて。

「よっしやあー！ 皆、盛り上がってるかーい！」

目の前でコールをするのはネットアイドル・セーラこと、幼馴染のお姉ちゃんことナノハビビクである。

ビビクのコールに合わせて、一同から返ってくるコール。小さくたびれた中華料理店が軽い地震に襲われたかのように震えている。

とてつもない音量だ。自重しないコールの大きさにヒカリは耳を抑えて棒立ち。ツキヨに至っては再びフェイズシフト装甲のように色が落ちていくようだった。

「おい、ビビ姉。今はセーラとしてココにいるわけじゃないだろ？」

「ごめんごめん。つい、反射的にね」

職業柄のため許してくれと両手でせがんでくる。

ああ、間違いない。このテンションの高さと皆を引っ張りたがる姉御肌。

この人物は間違いなくビビクであるとヒカリは呆れていた。

「あんまり大声出すと店にも迷惑だしさ」

「うーん、でも店長さん、サイン渡したら好き放題やっていいって」

お店に入るとサクラの父親である店長がビビクを見た途端に大発狂。

どうやら、彼もまたネットアイドル・セーラの大ファンだったようである。

彼女は地上波のテレビバラエティなどには出演せず、基本的にはネットのみの活動する身であっても、その人気は国民的アイドルに負けないくらいにファンを獲得しているようだ。

ガンプラおよびガンダムというカテゴリを中心とした活動もし

ているために、全国の地域ガンプラ大会のメインパーソナリティーとして呼ばれることも多々あるようだ。

ガンプラバトルにはそれなりに目を通していているサクラの父親。その際にセーラを知り、気がついたら隠れファンになっていたようである。

店長さんは握手とサインをねだってきた。

それに対して、ヒビクはネットアイドル・セーラとして快く引き受け、握手をした後にお店に飾る用のサインまで書いてあげた。

贅沢なまでのファンサービスを経験した店長さんはしばらくボーっとしていた。

「それじゃあ、とつととやろうぜ。しばらく忙しくなるんだろ?」

「うん、まあね!」

するとヒビクは腕を鳴らし、気合を入れるために軽く首も慣らす。そう、彼女はネットアイドル・セーラとしてここにいるのではなく、ガンブレ学園の生徒であり、ガンプラを楽しむビルダーの1人、[〃]「ナノハビビク」としてこの場所にいるのである。

こうやってグループに隠れてガンプラバトルを楽しめる瞬間こそが、彼女がナノハビビクとしてバトルを行える唯一の時間なのだ。彼女は学園にて不定期のライブを行った後はすぐにその場から移動。

次の配信やインタビューなどの仕事来る前に、こうして隠れてガンプラバトルを楽しんでいるようである。

ヒビクからすれば、普通にガンプラバトルを楽しんでいるだけだと思ふ。

でも……セーラのファンであるグループのメンバーたちにとっては最高のファンサービスになっているような気がしてならなかった。

下手すれば、抽選で選ばれたメンツのみが入室を認められる握手会やサイン会などよりも価値のある瞬間に立ち会っているのだ。感無量と言ったところだろう。

ヒビクは誰と対戦しようかキョロキョロと見回している。

「よし！　じゃあ、今日は君たちだ！」

元気な声でメンバーを指名した。

「ヒカ坊にツツキーにサツキー！　3人同時にかかってこーい！」

「え？」

ヒカリとサクラは突然の選抜に声を上げる。

「え？」

ツキヨも驚き、デュートリオンビームを受信したかのように色を取り戻した。

.....

バトルフィールドが展開される。

サンダーボルトガンダム、ライラックファルシア、そしてRe:0の3体が呆気にとられたようにフィールドで立ち荒んでいる。

突然すぎるバトルのお誘い。

いや、内容は聞いていたから自分たちに白羽の矢は立てられる可能性はあったのだ。予測は出来たはずなのだ。

突拍子も計画性もないのがナノハビビクの悪いところ。幼い頃もヒカリとシヨウタは彼女の尻に敷かれて引っ張りまわされていたのを思い出す。

「……ねえ、サクラ。バトル経験は」

「動かす練習は家でボチボチやってるっすけど、実線は初めてっす……」

なんということだ。

バトル経験こそあるが、まだまだ未熟なヒカリ。そして、ガンダムの知識こそあれどファイターとしての経験は全くもって皆無のサクラ。

足の引っ張り合いが起きそうだと2人の顔面が青ざめる。

何か責任重大なような気がして。

「大丈夫」

緊張に震える2人の真ん中でサクラが声を上げる。

「私が2人を守る」

グッドサインをして、2人にそれぞれ視線を送った。

ヤバイ、カツコイイ。惚れそう。

相手は12歳の可愛らしい女の子だというのに乙女心が芽生えそう。

今日のツキヨとそのガンπραであるRe:0の背中が大きく見えるような気がした。

「でも、3人がかりで1人を相手するって……」

「サクラ。油断するんじゃないぞ。わかっていると思うが……ヒビ姉は学園5位の成績を持つ腕前だからな？」

学園5位。

四天王には及ばないが、そこに片足を付きかけているレベルの腕を持つている。

実際、ナノハヒビクというかネットアイドル・セーラのガンπρα技術はネット上でもかなり評価が高く、彼女が作るオリジナルガンπραはゲストで呼ばれるプロのビルダー達も絶賛するレベルの出来の良さだ。

それだけじゃなくバトルも強いと有名である。一度、ネット番組上で行われたガンπραバトルロワイヤルという企画にて怒涛の14人抜きを記録したこともある。

その実力は学園でも発揮されている。番組の八百長ではないことを証明している。

「それじゃ、可愛い弟分と妹分を可愛がってあげるとしますか!」

ヒビクのガンπραがフィールドに設置される。

「いけっ! Gノーティラス!」

そのガンπραがバトルフィールドに現れ、地上に着地するかと思いきや、寸前で蝶のように宙を浮いて制止する。

……見た目はGのレコンギスタに登場するG系のモビルスーツ。一番近いのはGルシファーか。Gセルフとアルケインとは違い、モアイを使用した少しイカツイ見た目の顔面に華奢な胴体が奇妙な美しさを表している。

何より特徴的なのは。

そのモビルスーツの右肩に大きな黒いオウム貝が装着されていることだ。

……オウム貝。というのかアレは？

入り口とも割れる穴の付近には牙のような4つの突起物に、目のようなイメージを漂わせるビーム砲。機体のパーツというよりは、独立したモビルアーマーのような……

「おわあっ!! 肩にノーティラスをそのまま乗っけてる!!」

斬新すぎる発想にサクラが声を上げる。

「ノーティラス?」

「クロスボーンガンダムに登場する、モビルアーマーのこと」
ツキヨが軽く解説をした。

ノーティラスはクロスボーンガンダムという作品の終盤に登場した旧式のモビルアーマー。ビーム砲と機動用の大型ジェネレーターをそのまま直結したような斬新な見た目が特徴だ。

そのノーティラスを小型化。そのままモビルスーツの武器として右肩に直結させているのである。カラーリングは機体に合わせて少し薄めの黒になっている。

「さあ、かかってこい!」

Gノーティラスがくいくいつと手で挑発する。

うん、やはりショウタにそっくりだ。

行動が似てるというか、彼と同じでガンプラを使ってコミュニケーションを取ろうとしているのが丸かぶりである。

「えっと」

「来ないならくっつちから行くぜえ?」

Gノーティラスが両手の指をこちらに向けてくる。すべての指の先端に穴が空いている。瞬間、全ての指先の穴に淡いピンク色の光が纏われていく。

「ビームガン!」

ツキヨが警告する。

豆鉄砲状のビーム砲が数発サンダーボルトガンダム達目掛けて飛んでいく。

ご挨拶の攻撃と言ったところか。

サンダーボルトガンダムは即座に盾を使いガードに入り、近くにいるRe:0もガード兵器を装備していないライラックファルシアの背後に回りGNシールドを展開。そのまま、GNフィールドも展開する。

「さーて、どのくらい頑丈なバリアか見せてもらおうよ!」

Gノーティラスのビーム砲も作動する。

ビームガンの雨に紛れて一閃のピンクの閃光がRe:0のGNフィールド目掛けて飛んでいく。GNフィールド相手にビーム兵器はあまり意味がないのは承知。

しかし、彼女はGノーティラスの火力にはとことん自信があるようだ。Gノーティラスの火力か、Re:0のGNフィールドの頑丈さが勝利するか、と力比べに出たのだ。

「くっ!?!」

シヤレにならない火力が襲い掛かる。

しかしRe:0は必死に踏ん張っている。

「ツキヨ……くっ!」

援護に向かいたいが想像以上に攻撃が激しい。

それだけじゃない。豆鉄砲くらいの大きさのくせに威力の一発一

発がキャノン砲クラスを誇っている。盾で受け止めるたびに一発一発の重さが身に染みる。

とてもじゃないが防御したまま前進するのは難しい。

「このままじゃ、まずいつすね」

サクラは自分の顔を何度もたたく。

「よし……覚悟決めたっすー！」

サクラのライラックファルシアの目が光る。

「コミネサクラのデビュー戦！ 派手に咲いてやるっすよ！」

ライラックファルシアの背中に装備されたマザーベースの内部から数基のファルシアビットが姿を現す。数10基のファルシアビットがベースから飛び出すと、背中に引っ付いていたマザーベースも独立して移動を開始。

ビーム刃を形成し、ファルシアビットと共に攻撃の雨をかくぐる。

ファルシアビット達は攻撃を回避するとGノーティラスの四方八方を囲う。

「おおっと!？」

ビットから放たれるビームの雨。

Gノーティラスの指先から放たれたビームガンに負けず劣らずの数のビーム砲を次々と乱射する。逃げ場のないオールレンジ攻撃でGノーティラスの動きを制限させる。

「おわわっ!？」

ビーム刃を形成したマザーベースが巨大手裏剣のようにGノーティラスに襲い掛かる。

これぞライラックファルシアのオールレンジ攻撃。

ファルシアビットから発射されるビーム砲に紛れて、ビーム刃を形成したマザーベースが奇襲をかける。

まるで花吹雪のような攻撃でGノーティラスを圧倒する。

「おおっ」

「初めてにしては上出来」

ビット系武器はモビルスーツとは別に処理を行わないといけない。防御はRe:0が行っているためビットの操縦に集中できるとはいえ、あれだけの数を的確に動かせるのは初心者には難しいことだ。

ビルダーの世界に憧れていたために下準備は完璧だったというわけだ。

その努力の成果が見事に実っている。

「今がチャンスっすー！」

動きを封じられているGノーティラス目掛けて、ライラックファルシアが飛び出していく。

「これで倒してみせるっすー！」

マザーベースがライラックファルシアの元へ飛んでいく。

ライラックファルシアの右手には、フォーンファルシアが使用しているようなファルシアバトンがある。しかもそのサイズは伸びる前の如意棒くらいには長い。

ファルシアバトンの先端にマザーベースが合体。

一瞬にして、大振りのハンマー兵器の出来上がりだ。

敵はオールレンジで動けない。そこへ重い一撃を喰らわせてやる。決死の一撃にかけて、彼女は飛び込んでいく。

「えーい、しやらくさいー！」

Gノーティラスの右肩。ノーティラスパッドが怪しい色を浮かべ光る。

ノーティラスにはビーム兵器以外にももう一つ装備がある。

それは、ワイヤーだ。

その見た目故に近距離では活躍できないイメージのノーティラスだが、その対策はしっかりと練られている。高熱線のワイヤーが蛇のようにGノーティラスの体を取り囲み。

自分の周りに展開されたファルシアビットを破壊していく。

「そして君もー!」

一本のワイヤーがライラックファルシア目掛けて飛んでいく。

「んっ!?!」

マザーベースハンマーにワイヤーが巻き付かれる。

「飛んでいけー!」

ワイヤーを振り回し、ライラックファルシアの体が宙に浮き、そのままサンダーボルトガンダムとRe:0の元へと飛んでいく。

「え」

2人同時に声を上げた。

戻ってきた。ライラックファルシアは……Gノーティラスのハンマーと成り果てて。

「あぐおっ!?!」

ライラックファルシアが固まっていたサンダーボルトガンダムとRe:0に衝突。

「っ!!」

サンダーボルトガンダムとRe:0も想定外のダメージを受ける。

「あっはっは!・ それぞれそれ!!」

バトルフィールドの中の風景は見るだけでもゴチャゴチャの状態になっている。

振り回されるライラックファルシア。それに叩きつけられるサンダーボルトガンダムにRe:0。次々と破碎されているバトルフィールドの岩石。

「おいおいおい、相変わらず容赦ねえ」

シヨウタは右手でサインをし、両手で合掌する。

小声で南無三と口にしていた。

.....

数分後。バトル終了後。

「「……」」

3人ともボロボロであった。

全員色が抜け落ちていた。完全にエネルギー切れである。

結果、Gノーティラスが大暴れしたことにより3人とも敗北。しかもタイムアップギリギリまで付き合わされたせいで完全に体力を絞り尽くされてしまった。

あれからもいろんな手段で彼女に攻撃を仕掛けようとするが咄嗟の判断で対処される上に、火力でもノーティラスパッドから放たれるビーム砲で負けてしまう。

それだけじゃない。

あの機体、胸にも拡散ビーム砲があったりと散々な目にあった。

バトル経験の少ないヒカリとサクラは完全敗北。

ツキヨの場合は一対一だったら良い勝負をしていたかもしれない。でもさすがに2人を庇いながら戦うという器用な真似は出来なかったようだ。

「おっと、もうすぐ仕事だ」

携帯を見ると次の収録が近づいているようだった。

「おっと残念。俺もしごかれてみようかと思ったんだけどな。学年5位と戦えるのは中々貴重な経験だしな」

「ごめんごめん！ 次は相手してあげるからね！」

ヒビクは自身の荷物を持つと、ベンチに仲良く固まって座っている、色が抜け落ちた3人組へと向かっていく。

「ありがとう3人とも！」

ヒビクは3人同時に抱きしめた。

「3人とも個性的なガンプラだったよ！ 戦ってて楽しかったぜい！」

「「あががが……」」

3人とも体力的にも限界だったようだ。

「今後とも頑張ってね」

荷物を手にバトルフロアを出る。

「私も頑張るからさー！」

そのままお店の外に出ていった。

「疲れた……」

久々にヒビクの相手をしたヒカりはげつそりと声を上げていた。

ネットアイドル・セーラ。

その強引な雰囲気と押しが彼女の良いところだと評価されているが……やはり、身近で経験すると心臓がいくつあっても足りない。

ナノハビビクの底のないテンションへの疲れに、ヒカリ達はそのまま夢の世界へと旅立っていった。